

京都府遺跡調査報告集

第197冊

1. 川北遺跡第4次
2. 法貴峠20号墳第2次
3. 木津川河床遺跡第42次

2 0 2 5

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



川北遺跡全景(北から)



法貴峠20号墳全景(上が北西)

序

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年に設立されて以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行うとともに、その成果を広く公開し、考古学・歴史学研究や地域の歴史教育などに活用していただけるように、さまざまな取り組みを実施してまいりました。これまで発掘調査を実施したすべての遺跡の調査報告は、『京都府遺跡調査報告書』『京都府遺跡調査概報』『京都府遺跡調査報告集』として刊行し、それぞれの遺跡がもつ考古学的・歴史学的な重要性について報告を行ってきたところです。

さて、本冊で報告する福知山市川北遺跡第4次調査は、大砂利川緊急自然災害防止事業に伴い京都府中丹西土木事務所の依頼を受けて実施しました。また、亀岡市法貴峠20号墳の調査は、国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」事業に伴い農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施しました。一方、八幡市木津川河床遺跡第42次調査は、木津川流域下水道洛南浄化センター建設工事に伴い京都府流域下水道事務所の依頼を受けて実施しました。このたび、発掘調査ならびに整理等作業が完了し、『京都府遺跡調査報告集第197冊』として刊行いたします。

本冊で報告する川北遺跡の調査では、各トレンチの堆積状況の確認により、由良川流域の自然環境の変化に合わせた土地利用の実態を明らかにできました。また、古墳時代後期に築造された法貴峠20号墳は、多重にめぐる墳丘内列石をもち、全長7.2mの横穴式石室を埋葬施設とする直径13mの円墳であることが判明しました。一方、木津川河床遺跡では、島畑の盛土や地震による液状化現象に伴う噴砂などを確認しました。

これらの調査成果は、今後、それぞれの遺跡が所在する地域の歴史や日本史研究を進めるうえで重要な考古学的成果となることを確信しています。

最後になりましたが、発掘調査をご依頼いただきました京都府中丹西土木事務所、農林水産省近畿農政局、京都府流域下水道事務所をはじめ、多くの関係各位に厚く感謝するとともに、心より御礼を申し上げます。

令和7年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 井 上 満 郎

例 言

1. 本書に収めた報告は下記のとおりである。

(1) 川北遺跡第4次発掘調査報告

(2) 法貴峠20号墳第2次発掘調査報告

(3) 木津川河床遺跡第42次発掘調査報告

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	現地調査期間	経費負担者	執筆者
川北遺跡第4次	福知山市字川北	令和6年11月11日～ 令和7年1月24日	中丹西土木事務所	面 将道
法貴峠 20 号墳 第 2 次	亀岡市曾我部町中 中小路・一ノ井出	令和2年6月2日～ 令和2年12月23日	農林水産省 近畿農政局	荒木瀬奈 森島康雄
木津川河床遺跡 第 42 次	八幡市八幡一丁目	令和5年11月6日～ 令和5年12月26日	流域下水道事務所	加藤雅士

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第Ⅵ座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。

5. 本書の編集は、調査課調査担当者の編集原案をもとに、調査課編集担当が行った。

6. 現場写真は調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係武本典子が行った。

本文目次

1. 川北遺跡第4次発掘調査報告

1. はじめに	1
2. 位置と環境	
1) 地理的環境	2
2) 歴史的環境	3
3. 調査の経緯と方法	4
4. 調査概要	4
5. 出土遺物	8
6. まとめ	9

2. 法貴峠20号墳第2次発掘調査報告

1. はじめに	11
2. 位置と環境	
1) 地理的環境	12
2) 歴史的環境	13
3) 法貴古墳群の概要	16
3. 調査の経緯と方法	
1) 調査の経緯	18
2) 調査の概略	18
3) 調査の方法	18
4. 20号墳墳丘の調査	
1) 調査前の状況	19
2) 中近世の遺構	19
3) 墳丘盛土	21
4) 墳丘構造	23
5) 墳丘内列石	24
6) 墳丘内列石以外の墳丘内の石材	25
7) 墳丘盛土内の遺物の出土状況	26
8) 外表施設・周溝について	26
9) 墳丘規模について	32
5. 20号墳埋葬施設の調査	32
1) 横穴式石室の構築状況	32
2) 横穴式石室の石材	34

3)横穴式石室内埋土	35
4)横穴式石室内床面の状況	35
5)横穴式石室の閉塞状況	36
6)横穴式石室の下部構造	36
6. 石組遺構及びB地区の調査	
1)石組遺構S X50の調査	38
2)B地区の調査	41
7. 出土遺物	
1)横穴式石室玄室内及び羨道部出土遺物	44
2)横穴式石室内埋土出土遺物	50
3)墳丘上及び周溝内出土遺物	51
4)墳丘盛土内出土遺物	58
5)石組遺構S X50出土遺物	59
6)B地区出土遺物	59
8. まとめ	
1)遺構・遺物の分布状況	59
2)法貴峠20号墳についての検討	59
3)石組遺構S X50について	63
 3. 木津川河床遺跡第42次発掘調査報告	
1. はじめに	79
2. 位置と環境	
1)地理的環境	81
2)周辺遺跡	81
3)浄化センター内での既往の調査	82
3. 調査の方法	
1)調査の経緯	84
2)遺構記号	84
3)小グリッドの設定	84
4. 調査概要	
1)基本層序	85
2)検出遺構	90
5. 出土遺物	92
6. まとめ	92

挿 図 目 次

1. 川北遺跡第4次発掘調査報告

第1図	調査地の位置	1
第2図	川北遺跡と周辺の遺跡	2
第3図	調査区配置図	3
第4図	川北遺跡周辺の地形区分図	3
第5図	1区～5区平面図	5
第6図	6区～10区平面図	6
第7図	土層柱状図	7
第8図	出土遺物実測図	8

2. 法貴峠20号墳第2次発掘調査報告

第1図	調査地の位置	11
第2図	亀岡盆地の地形	13
第3図	周辺遺跡分布図	14
第4図	亀岡市曾我部町古墳分布図	15
第5図	法貴峠古墳群分布図	17
第6図	20号墳墳丘並びに石室地区割	18
第7図	20号墳調査地及びB地区平面図	20
第8図	20号墳調査前測量図	21
第9図	20号墳中近世遺構平・断面図	22
第10図	20号墳墳丘内列石の区分図	24
第11図	20号墳墳丘測量図	25
第12図	20号墳墳丘石材平面図	26
第13図	20号墳墳丘石材立面図	27
第14図	20号墳墳丘北東側断面図	28
第15図	20号墳墳丘北西側断面図	29
第16図	20号墳羨道部付近墳丘断面図	30
第17図	20号墳南西部墳丘及び周溝断面図	31
第18図	墳丘北側断ち割り断面図	31
第19図	20号墳横穴式石室実測図	33
第20図	横穴式石室石材番号割り当て図	34
第21図	横穴式石室内畦断面図	35
第22図	横穴式石室玄室内玉類出土位置図	36
第23図	横穴式石室床面遺物及び石材出土位置図	37

第24図	横穴式石室基底石据付け穴検出状況平面図	38
第25図	石組遺構 S X 50実測図	39
第26図	石組遺構 S X 50遺物出土状況図	40
第27図	B 地区検出遺構図	41
第28図	B 地区北壁・東壁断面図	42
第29図	柱列 S A 35平・断面図及び土器埋納柱穴 S P 14検出状況図	42
第30図	掘立柱建物 S B 40平・断面図	43
第31図	横穴式石室玄室及び羨道部出土土器実測図	45
第32図	横穴式石室玄室及び羨道部出土金属器実測図	46
第33図	横穴式石室玄室出土金属器実測図	47
第34図	横穴式石室玄室出土玉類実測図 1	48
第35図	横穴式石室玄室出土玉類実測図 2	49
第36図	横穴式石室埋土出土土器実測図	51
第37図	横穴式石室埋土出土鉄製品実測図	52
第38図	墳丘上及び周溝内出土遺物実測図 1	53
第39図	墳丘上及び周溝内出土遺物実測図 2	54
第40図	墳丘上及び周溝内出土遺物実測図 3	55
第41図	墳丘盛土内出土遺物実測図	56
第42図	石組遺構 S X 50出土遺物実測図 1	56
第43図	石組遺構 S X 50出土遺物実測図 2	57
第44図	石組遺構 S X 50出土遺物実測図 3	58
第45図	B 地区出土遺物実測図	58
第46図	20号墳構築過程の復元案	61
第47図	埋葬状況の復元図	62
第48図	法貴峠古墳群内の横穴式石室と石室規模の比較	63
3. 木津川河床遺跡第42次調査発掘調査報告		
第 1 図	八幡市と遺跡の位置	79
第 2 図	周辺地質分布図	80
第 3 図	周辺遺跡分布図	82
第 4 図	洛南浄化センターでの過年度調査	83
第 5 図	グリッドの設定	85
第 6 図	調査区壁面土層断面図	86
第 7 図	第 1 面遺構平面図	88
第 8 図	第 2 面遺構平面図	89
第 9 図	ピット S P 09と南北溝 S D 11平・断面図	91

第10図	曲隆 S X05南斜面での遺物出土状況図	91
第11図	出土遺物実測図	93
第12図	周辺の地震履歴	94

付 表 目 次

1. 川北遺跡第4次発掘調査報告		
付表1	出土土器・土製品観察表	10
付表2	出土金属器観察表	10
2. 法貴峠20号墳第2次発掘調査報告		
付表1	法貴峠古墳群一覧	17
付表2	石室石材重量計測表	34
付表3	出土土器観察表	65
付表4	出土金属器観察表	74
付表5	出土玉類観察表	76
3. 木津川河床遺跡第42次発掘調査報告		
付表	出土土器観察表	98

図 版 目 次

巻頭図版1	川北遺跡第4次 川北遺跡全景(北から)
巻頭図版2	法貴峠20号墳 法貴峠20号墳全景(上が北西)

1. 川北遺跡第4次

図版第1	(1) 川北遺跡遠景(南東から)
	(2) 1区全景(右が北)
図版第2	(1) 2～5区全景(右が北)
	(2) 6～10区全景(右が北)
図版第3	(1) 1区近景(北から)
	(2) 2～5区近景(南から)
	(3) 2区全景(右が北)

- 図版第4 (1) 3区全景(右が北)
 (2) 4区全景(右が北)
 (3) 5区全景(右が北)
- 図版第5 (1) 6区全景(右が北)
 (2) 7区全景(右が北)
 (3) 8区全景(右が北)
- 図版第6 (1) 9区全景(右が北)
 (2) 10区全景(右が北)
 (3) 2区断ち割り(北から)
- 図版第7 (1) 3区断ち割り(南から)
 (2) 4区断ち割り(南から)
 (3) 5区断ち割り(北から)
- 図版第8 (1) 7区断ち割り(南から)
 (2) 9区断ち割り(南西から)
 (3) 10区断ち割り(南から)

2. 法貴峠20号墳第2次

- 図版第1 (1) 20号墳遠景(北東から)背後丘陵に法貴峠古墳群が分布
 (2) 20号墳遠景(南東から)
 (3) 20号墳遠景(北西から)
- 図版第2 (1) 調査地全景(上が北東)
 (2) 20号墳調査前状況(西から)
 (3) 20号墳石室調査前状況(南西から)
- 図版第3 (1) 20号墳表土直下礫層検出状況(西から)
 (2) 20号墳礫層内遺物出土状況(南から)
 (3) 20号墳墳丘残存部検出状況(北西から)
- 図版第4 (1) 20号墳墳丘内列石検出状況(南東から)
 (2) 20号墳墳丘内列石検出状況(北東から)
- 図版第5 (1) 20号墳墳丘内列石検出状況(北東から)
 (2) 20号墳墳丘内列石検出状況(北西から)
- 図版第6 (1) 20号墳墳丘内列石検出状況(北から)
 (2) 20号墳羨道部列石検出状況(南東から)
 (3) 20号墳羨道部東側墳丘断ち割り断面(南東から)
- 図版第7 (1) 20号墳北東側墳丘断ち割り断面(北西から)
 (2) 20号墳北西側墳丘断ち割り断面(北東から)

- 図版第8 (1) 20号墳南西側墳丘断ち割り断面(南東から)
(2) 20号墳南西側墳丘断ち割り断面墳丘裾付近(南西から)
(3) 20号墳北側断ち割り断面(東から)
- 図版第9 (1) 20号墳石室上部検出状況(南西から)
(2) 20号墳石室上部玄室左側壁検出状況(南西から)
(3) 20号墳石室上部奥壁検出状況(南東から)
- 図版第10 (1) 20号墳石室上部玄室東隅角検出状況(南西から)
(2) 20号墳石室上部袖部検出状況(北西から)
(3) 20号墳石室主軸畦断面(南西から)
- 図版第11 (1) 20号墳石室東西畦断面(南東から)
(2) 20号墳玄室再利用時鉄釘等出土状況(南東から)
(3) 20号墳石室閉塞石検出状況遠景(南西から)
- 図版第12 (1) 20号墳玄室床面遺物出土状況(上が北東)
(2) 20号墳玄室床面遺物出土状況(南東から)
- 図版第13 (1) 20号墳玄室床面遺物出土状況近景(南西から)
(2) 20号墳玄室床面遺物出土状況近景(北東から)
(3) 20号墳玄室床面遺物出土状況近景(北西から)
- 図版第14 (1) 20号墳玄室須恵器(18・10)出土状況(北西から)
(2) 20号墳玄室鉄鏃出土状況(南西から)
(3) 20号墳玄室長頸鏃(40)出土状況(北東から)
(4) 20号墳玄室床面鉄鎌出土状況(南から)
(5) 20号墳玄室耳環出土状況(南から)
(6) 20号墳玄室床面碧玉製管玉出土状況(西から)
(7) 20号墳玄室床面水晶製切子玉出土状況(南東から)
(8) 20号墳羨道床面遺物出土状況(西から)
- 図版第15 (1) 20号墳玄室棺台検出状況(南東から)
(2) 20号墳石室検出状況全景(南から)
(3) 20号墳石室検出状況全景(南東から)
- 図版第16 (1) 20号墳玄室奥壁検出状況(南東から)
(2) 20号墳玄室左側壁検出状況(南西から)
(3) 20号墳玄室右側壁検出状況(北東から)
- 図版第17 (1) 20号墳玄室床面敷石検出状況(南東から)
(2) 20号墳袖部・羨道検出状況(北西から)
(3) 20号墳石室羨道左側壁検出状況(南西から)
- 図版第18 (1) 20号墳玄室床面敷石断面(南西から)

- (2) 20号墳玄室敷石直下整地層検出状況(北東から)
(3) 20号墳玄室敷石直下整地層断ち割り断面(南西から)
- 図版第19 (1) 20号墳石室羨道下整地層断ち割り断面(南から)
(2) 20号墳完掘状況全景(西から)
(3) 20号墳石室玄室基底石据付け穴完掘状況(南東から)
- 図版第20 (1) 石組遺構 S X 50検出状況(北から)
(2) 石組遺構 S X 50掘削状況(南西から)
(3) 石組遺構 S X 50完掘状況(南西から)
- 図版第21 (1) 石組遺構 S X 50床面遺物出土状況(南西から)
(2) 石組遺構 S X 50床面遺物出土状況(南東から)
- 図版第22 (1) 石組遺構 S X 50床面土師器皿出土状況(南から)
(2) 石組遺構 S X 50完掘状況(南東から)
(3) 石組遺構 S X 50完掘状況(北西から)
- 図版第23 (1) 石組遺構 S X 50完掘状況(北東から)
(2) 石組遺構 S X 50完掘状況(南東から)
(3) 石組遺構 S X 50床面石材検出状況(南東から)
- 図版第24 (1) 20号墳・B地区完掘状況遠景(西から)
(2) 20号墳・B地区完掘状況遠景(上が東)
(3) B地区北壁面断面(南西から)
- 図版第25 (1) B地区北東壁面断面(北西から)
(2) B地区掘立柱建物 S B 40・柱列 S A 35完掘状況(上が北)
(3) B地区柱列 S A 35・S P 14遺物出土状況(北から)
- 図版第26 出土遺物 1 20号墳出土遺物 1
- 図版第27 出土遺物 2 20号墳出土遺物 2
- 図版第28 出土遺物 3 20号墳出土遺物 3
- 図版第29 出土遺物 4 20号墳出土遺物 4
- 図版第30 (1) 出土遺物 5 20号墳出土遺物 5
(2) 出土遺物 6 20号墳出土遺物 6
- 図版第31 出土遺物 7 20号墳出土遺物 7
- 図版第32 出土遺物 8 20号墳出土遺物 8
- 図版第33 出土遺物 9 20号墳出土遺物 9
- 図版第34 出土遺物 10 20号墳出土遺物 10
- 図版第35 出土遺物 11 20号墳出土遺物 11・石組遺構 S X 50出土遺物 1・B地区出土遺物
- 図版第36 出土遺物 12 石組遺構 S X 50出土遺物 2

3. 木津川河床遺跡第42次

図版第1 東西部第2面全景(北東から)

左奥が鳩ヶ峰、手前は京阪電車8000系と浄化センター消化タンク

図版第2 (1)南北部第1面全景(北西から)

(2)東西部第1面全景と砂脈の状況(西から)

図版第3 (1)第1面S X03(奥)とS X04(手前)(北西から)

(2)第1面東西溝S D01(奥)と東西溝S D02(手前)(北西から)

(3)南北部第1面全景(東から)

図版第4 (1)南北部第2面全景(北から)

(2)東西部第2面全景(南東から)

図版第5 (1)南北部第2面全景(南から)

(2)南北部西壁土層断面(北東から)

(3)東西部南壁土層断面(北西から)

図版第6 (1)S P09土層断面(南から)

(2)南北溝S D11および曲隆S X07検出状況(北東から)

(3)南北溝S D11北半部土層断面(北から)

(4)南北溝S D11南半部(北)土層断面(北から)

(5)南北溝S D11南半部(南)土層断面(北から)

(6)曲隆S X05の高まり(南から)

(7)曲隆S X07の高まり(南から)

(8)西壁で整地層第10・11層を切る砂脈(矢印)の状況(東から)

図版第7 (1)東西部第2面での砂脈の状況(東から)

(2)曲隆S X05断ち割り断面(南東から)

(3)曲隆S X05断ち割り断面(東から)

図版第8 (1)曲隆S X07断ち割り断面(北東から)

(2)曲隆S X07断ち割り断面(東から)

(3)曲隆S X07断ち割り断面(北西から)

図版第9 (1)出土遺物1

(2)出土遺物2

図版第10 出土遺物3

1. 川北遺跡第4次発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は大砂利川緊急自然災害防止対策(河川)事業に伴い、京都府中丹西土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地に隣接する大砂利川は流下能力が低く、台風等の大規模な降雨による家屋等への浸水被害が生じたことから、洪水を安全に流下させることを目的とした築堤、河道拡幅、河床掘削等の整備計画に伴う発掘調査である。現地調査にあたっては、京都府教育委員会、福知山市教育委員会、福知山市地域振興部をはじめ、各関係機関のご指導・ご協力をいただいた。また、京都府中丹西土木事務所、川北自治会ならびに調査に参加して下さった作業員・整理員の方々には、調査・報告を通じて多大なご協力をいただいた。なお、調査に係る経費は、全額が京都府中丹西土木事務所が負担した。

〔調査体制等〕

〈現地調査〉

調査責任者 調査課長 小池 寛

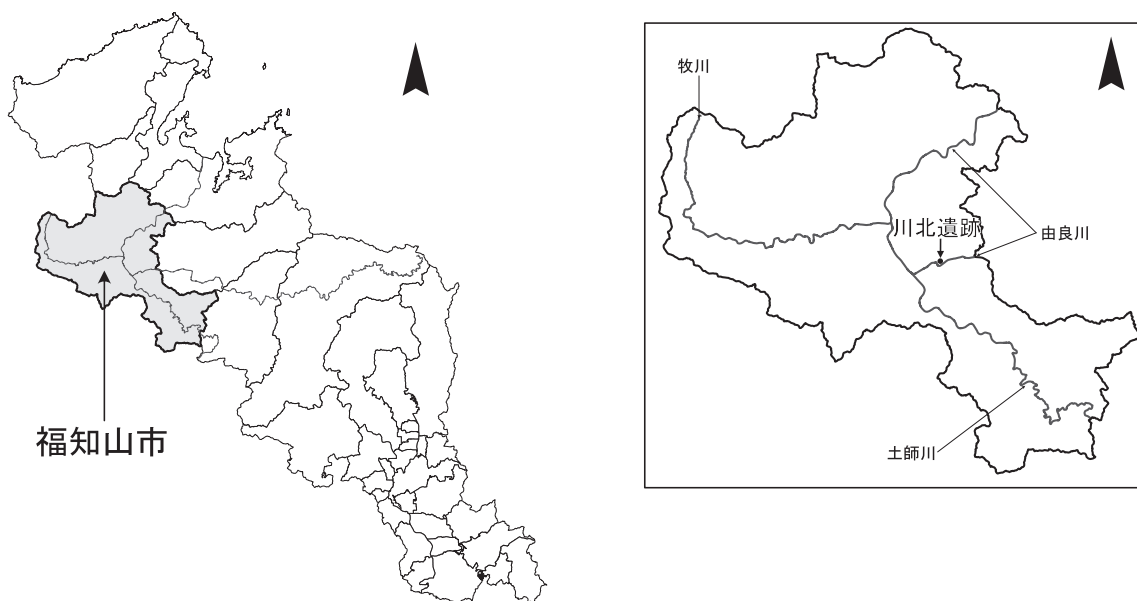
調査担当者 調査課課長補佐兼調査第4係長 中川和哉

同 調査第4係主任 面 将道

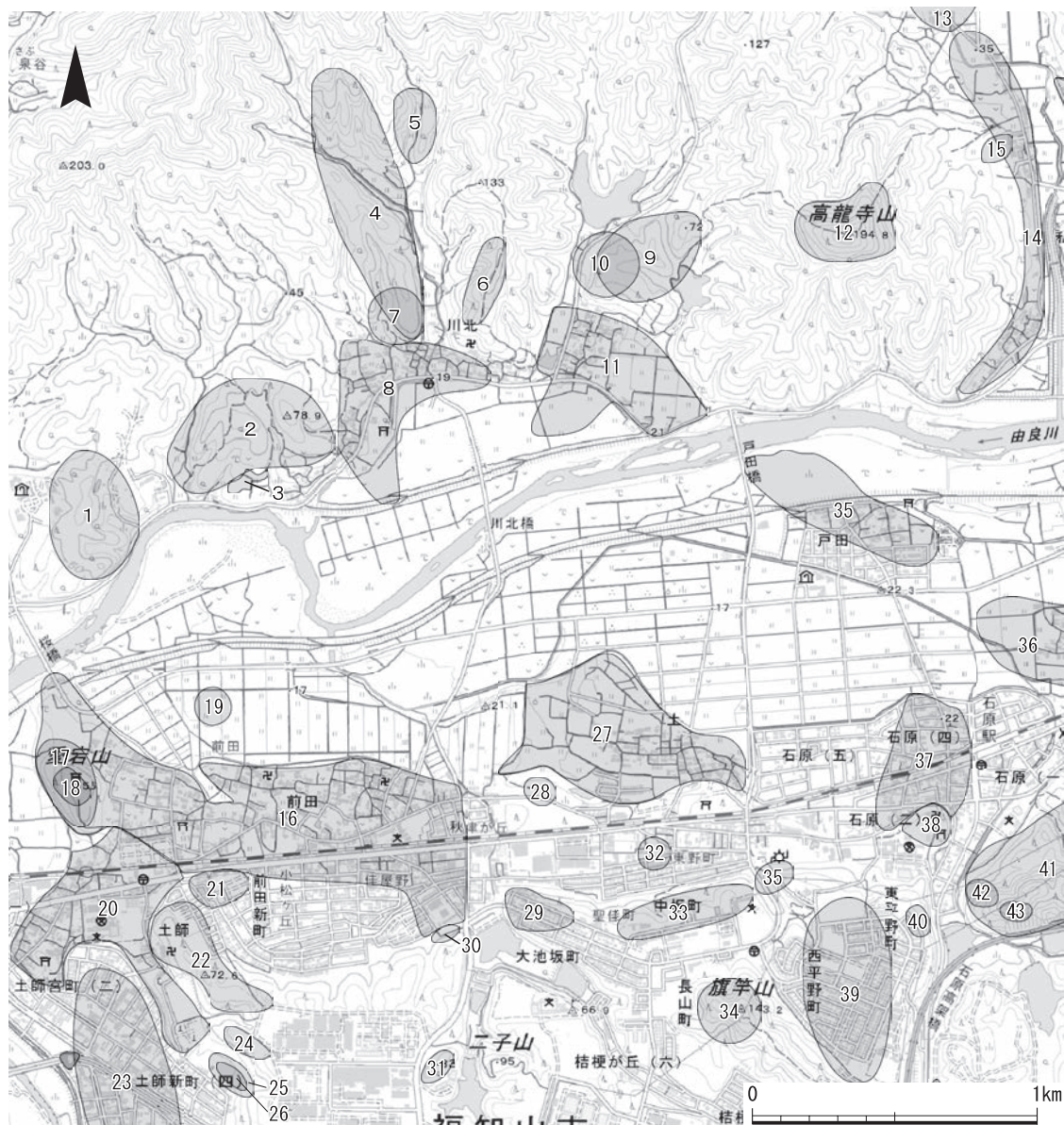
調 査 場 所 福知山市字川北

現地調査期間 令和6年11月11日～令和7年1月24日

調査面積 800m²



第1図 調査地の位置



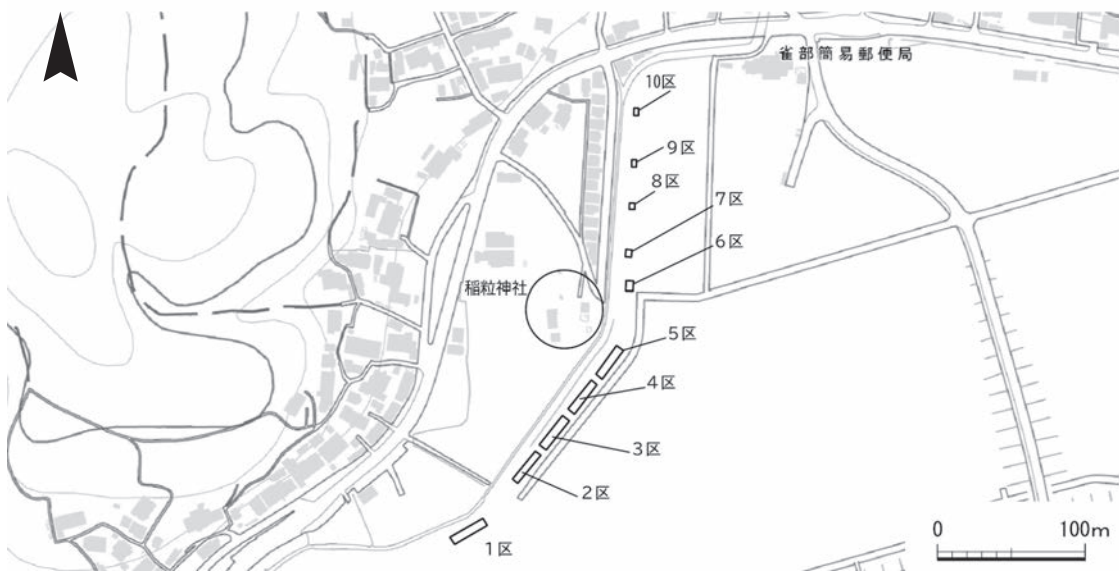
- 1 東山古墳群、2 大光山古墳群、3 段ノ田遺跡(伝東禅寺跡)、4 大砂レ古墳群、5 寺山古墳群、6 頼光寺古墳群、
- 7 川北山ヶ市城跡、8 川北遺跡、9 上村山古墳群、10 上村城跡、11 上ヶ市遺跡、12 高蓮寺城跡、13 報恩寺遺跡、
- 14 奉安塚古墳群、15 立石遺跡、16 前田遺跡、17 愛宕山遺跡、18 愛宕山城跡、19 前田坪内遺跡、20 土師遺跡、
- 21 宝蔵山古墳群、22 ゲシ山古墳群、23 土師新町遺跡、24 南町遺跡、25 土師新城跡、26 土師新城跡下層遺跡、
- 27 土遺跡、28 下野古墳群、29 中坂古墳群、30 ハケ谷古墓群、31 二子山古墳群、32 下野遺跡、33 大池坂古墳群、
- 34 旗竿山城跡、35 仏山古墳群、36 戸田遺跡、37 石原遺跡、38 石原城跡(洞玄寺)、39 上野平遺跡、40 池尻古墳群
- 41 スクモ城跡、42 スクモ西古墳群、43 スクモ古墳群、

第2図 川北遺跡と周辺の遺跡(国土地理院「福知山東部」に加筆)

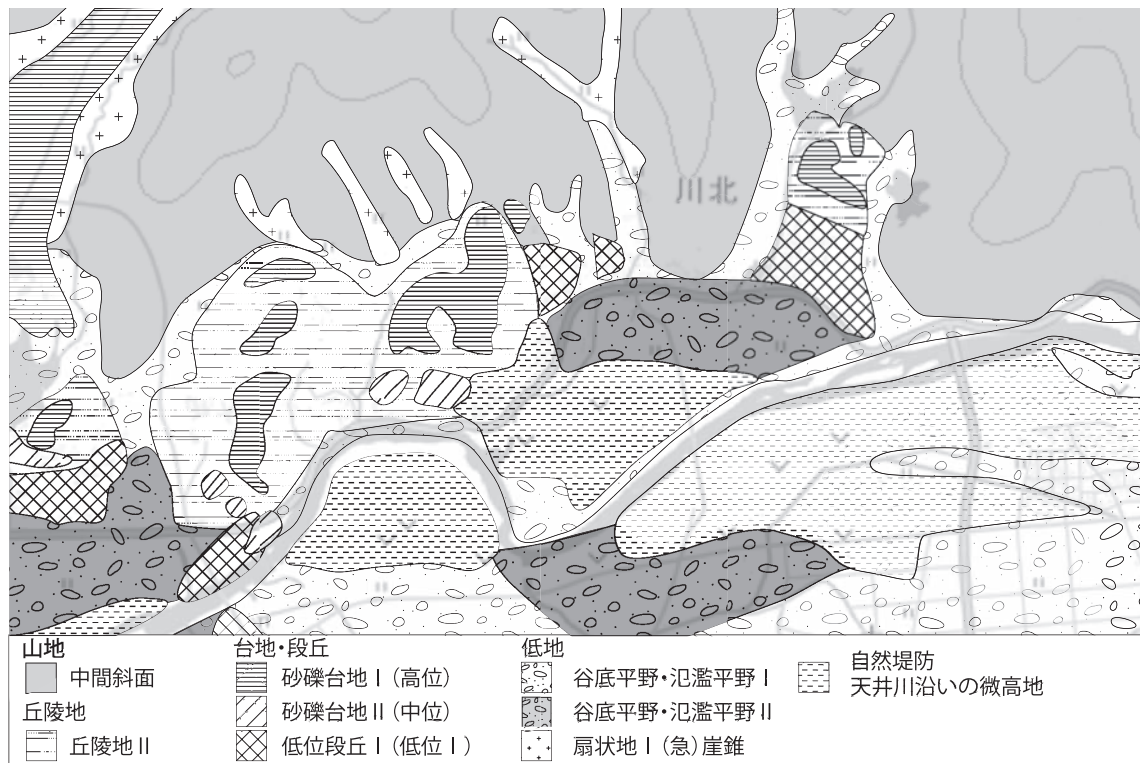
2. 位置と環境

1) 地理的環境

川北遺跡の所在する福知山市は、丹波地方の北西部に位置する。東は綾部市、西は兵庫県朝来市、南は京丹波町、北は宮津市と接し、断層盆地である福知山盆地を中心に市域が広がる。本地域は由良川中流域にあたり、市内で土師川、牧川と合流し、日本海へと流下する。遺跡は、由良川右岸の山地から続く標高約30mの丘陵地、砂礫台地および、標高約20mの自然堤防と、氾濫平



第3図 調査区配置図



第4図 川北遺跡周辺の地形区分図(1/25,000)

(京都府『土地分類基本調査』「福知山、但馬竹田、篠山」をトレース)

野にかけて立地する。第1次調査では、台地上に鎮座する稲粒神社の南側で、弥生時代後期から中世にかけての土器片が出土したことが報告され、台地上が主な居住空間とされていたことが推察できる。

2) 歴史的環境

遺跡周辺での調査事例として、弥生時代終末期の周溝墓、古墳時代後期の円筒埴輪、奈良時代から平安時代にかけての在地領主の居館跡と考えられる掘立柱建物跡群が確認された上ヶ市遺

跡、古墳時代後期の馬具や多くの鉄製品が出土した奉安塚古墳が挙げられる。このうち、上ヶ市遺跡は川北遺跡の台地部とほぼ同一面に立地している点は注目すべきであろう。後背の山地には、大砂利古墳群、寺山古墳群、大光山古墳群など数多くの古墳が分布するが、発掘調査の履歴がないため、詳細は不明である。

3. 調査の経緯と方法

今回の発掘調査は、大砂利川緊急自然災害防止対策(河川)事業による福知山市字川北に所在する大砂利川への台風等の大規模な降雨による洪水対策としての築堤、河道拡幅、河床掘削等の整備に伴い、京都府中丹西土木事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、標高約20mの平野部に位置し、現在の川北区の集落が所在する標高約30mの台地裾部から由良川に向かう平野部にかけて、東西幅約15m・南北長約550mの範囲に、平面直角座標系Ⅵ系(EPSG:6677)をもちいて任意に10箇所の調査区を設定し、調査を実施した。表土掘削には重機を使用し、重機掘削後、人力による精査にて遺物・遺構の有無を確認しながら調査をおこなった。調査の終盤は小型無人航空機による写真撮影を実施した。遺物整理、遺跡状況の検討、報告書作成作業は現地調査と並行して進め、年度内に全ての作業を終了した。

4. 調査概要

(1) 1区の調査

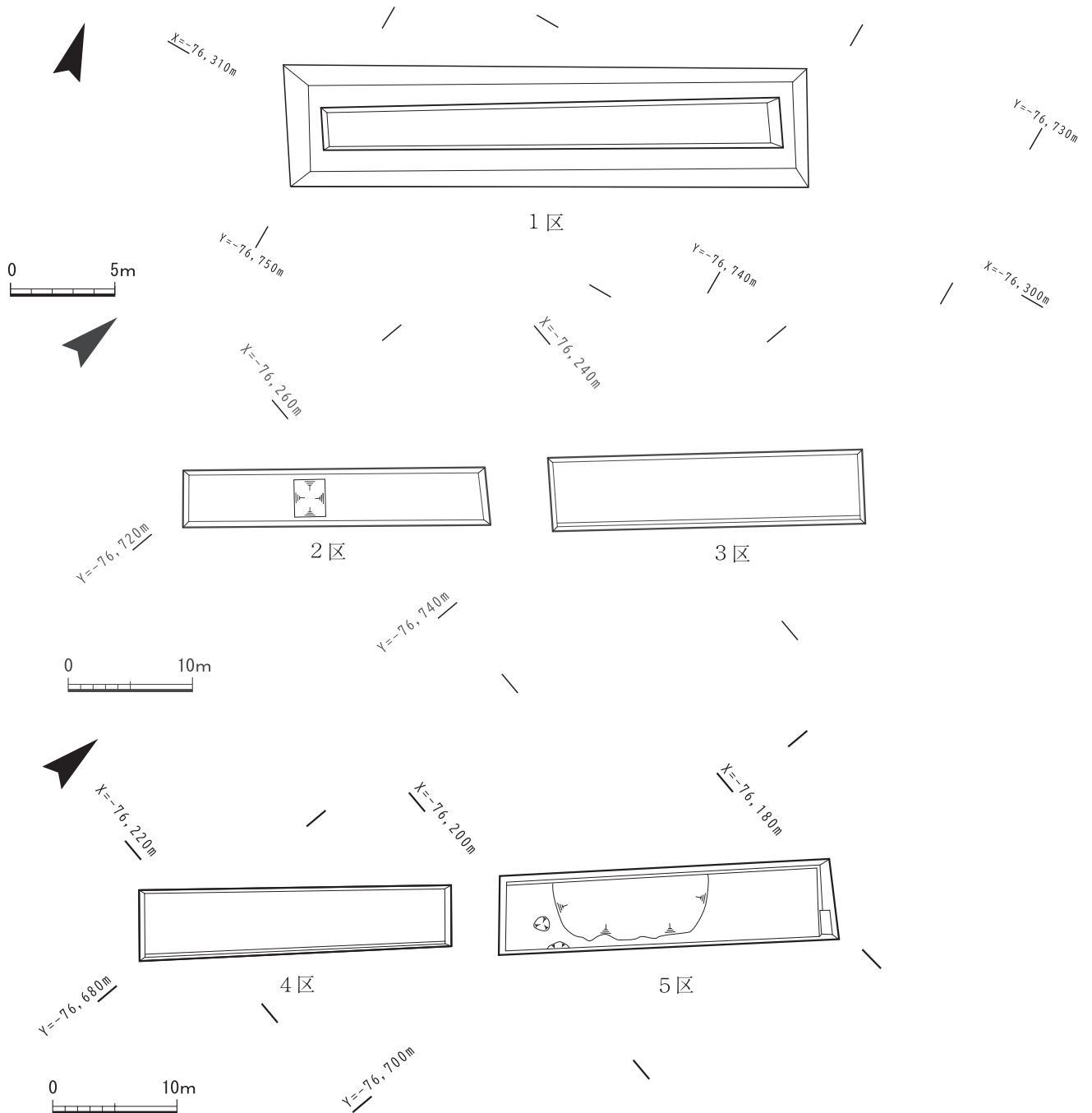
1区は本調査の南端部、大砂利川河口部から約300mほど上流側に位置する。長辺約25m・短辺約6mを測る長方形を呈する調査区である。掘削深度は約2.6mを測る。厚さ約0.2mの表土から、炭化物をわずかに含む褐色極細砂を含むシルト、暗褐色極細粒砂を含むシルト、クサリ礫をわずかに含むにぶい黄橙色極細粒砂を含むシルト、クサリ礫をわずかに含むにぶい黄褐色極細粒砂、灰黄色極細粒砂を含む細粒砂、灰白色極細粒砂を含むシルト、暗褐色細粒砂を含む極細粒砂、円礫をわずかに含むにぶい黄褐色細粒砂と続く。5層と6層、8層と9層の層境は茶褐色に変色し、マンガン粒が多く含まれる。4層より土錘(第8図4)が出土したが、帰属時期は不明である。なお、遺構は確認できなかった。

(2) 2区の調査

2区は稲粒神社の約100m南側に位置する。長辺約25m・短辺約4.4mを測る長方形を呈する調査区である。掘削深度は約2mを測る。厚さ約0.3mの表土から、炭化物をわずかに含む褐色極細砂を含むシルト、暗褐色極細粒砂を含むシルト、にぶい黄橙色極細粒砂を含むシルト、灰黄色極細粒砂、暗褐色細粒砂を含む極細粒砂、小礫～中礫を多く含む暗灰黄色中粒砂を含む粗粒砂と続く。3層と4層、4層と5層の層境は茶褐色に変色し、マンガン粒が多く含まれる。遺物の出土および遺構は確認できなかった。

(3) 3区の調査

3区は2区の北東側約5mに位置する。長辺約25m・短辺約6mを測る長方形を呈する調査区

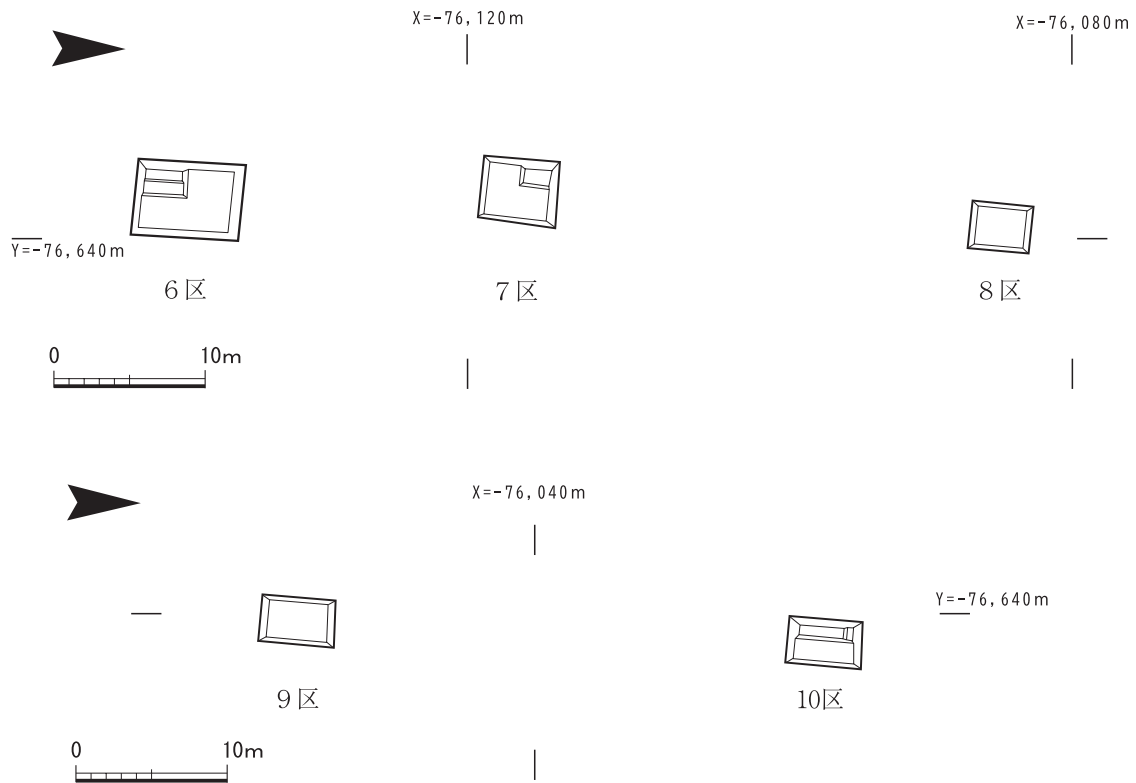


第5図 1～5区平面図

である。掘削深度は約1.9mを測る。厚さ約0.3mの表土から、炭化物をわずかに含む褐色極細砂を含むシルト、暗褐色極細粒砂を含むシルト、にぶい黄橙色極細粒砂を含むシルト、灰黄色極細粒砂、暗褐色細粒砂を含む極細粒砂、小礫～中礫を多く含む暗灰黄色中粒砂を含む粗粒砂と続く。3層と4層、4層と5層の層境は茶褐色に変色し、マンガン粒が多く含まれる。遺物の出土および遺構は確認できなかった。

(4) 4区の調査

4区は3区の北東側約5mに位置する。長辺約26m・短辺約5mを測る長方形を呈する調査区である。掘削深度は約2.4mを測る。厚さ約0.3mの表土から、炭化物をわずかに含む褐色極細砂



第6図 6～10区平面図

を含むシルト、暗褐色極細粒砂を含むシルト、にぶい黄橙色極細粒砂を含むシルト、灰黄色極細粒砂、暗褐色細粒砂を含む極細粒砂、小礫～中礫を多く含む暗灰黄色中粒砂を含む粗粒砂と続く。3層と4層、4層と5層の層境は茶褐色に変色し、マンガン粒が多く含まれる。遺物の出土および遺構は確認できなかった。

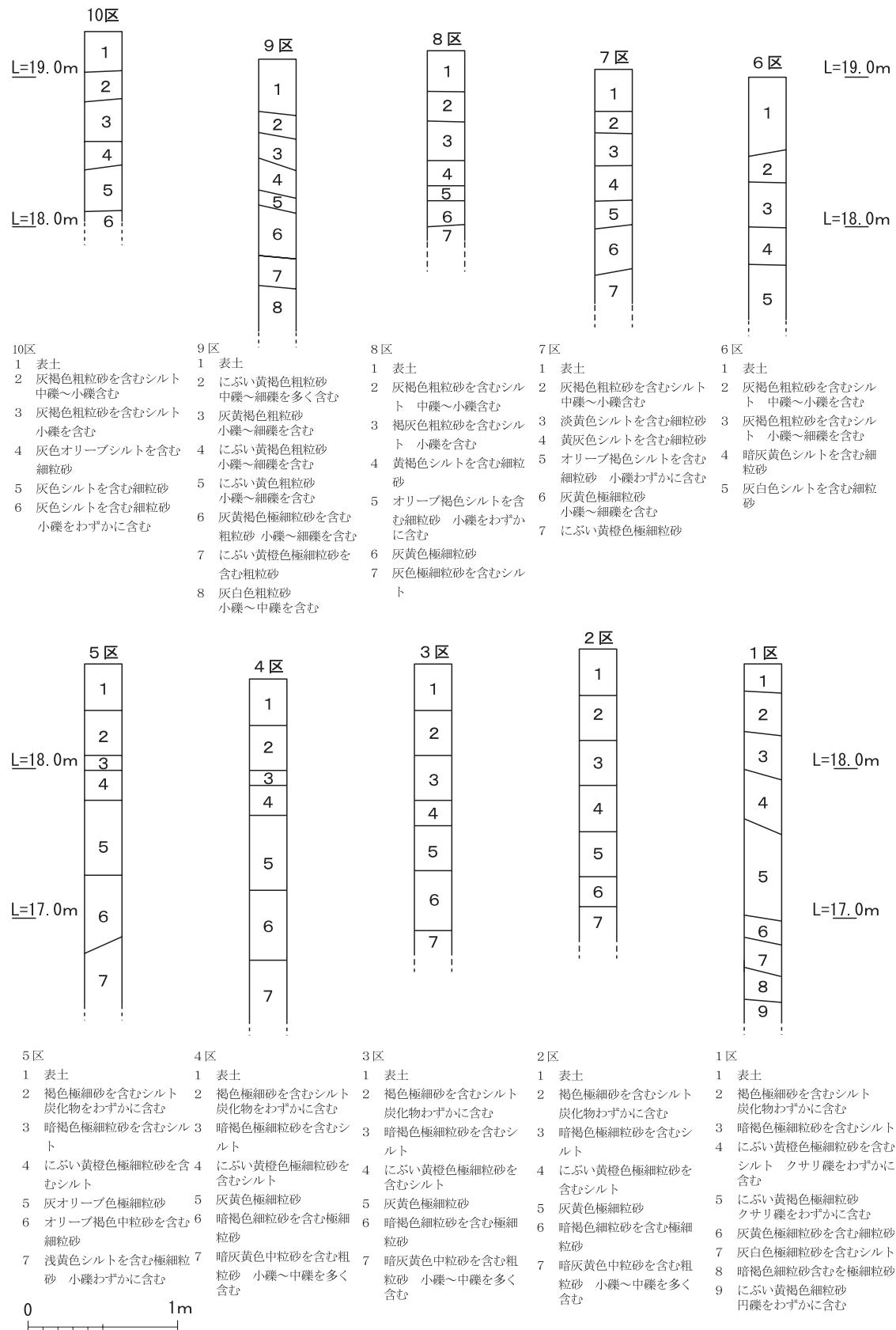
(5) 5区の調査

5区は4区の北東側約5mに位置する。長辺約25m・短辺約6.4mを測る長方形を呈する調査区である。掘削深度は約2.3mを測る。厚さ約0.3mの表土より、炭化物をわずかに含む褐色極細粒砂を含むシルト、暗褐色極細粒砂を含むシルト、にぶい黄橙色極細粒砂を含むシルト、灰オリーブ色極細粒砂、オリーブ褐色中粒砂を含む細粒砂、小礫をわずかに含む浅黄色シルトを含む極細粒砂と続く。3層と4層、6層と7層の層境は茶褐色に変色し、マンガン粒が多く含まれる。遺物の出土および遺構は確認できなかった。

(6) 6区の調査

6区は5区の北側約40mに位置する。長辺約7.2m・短辺約5mを測る長方形を呈する調査区である。掘削深度は約1.7mを測る。厚さ約0.5mの表土より、中礫～小礫を含む灰褐色粗粒砂を含むシルト、小礫～細礫を含む灰褐色粗粒砂を含むシルト、暗灰黄色シルトを含む細粒砂、灰白色シルトを含む細粒砂と続く。3層と4層の層境は茶褐色に変色し、マンガン粒が多く含まれる。遺物の出土および遺構は確認できなかった。

(7) 7区の調査



第7図 土層柱状図

7区は6区の北側約16mに位置する。長辺約4m・短辺約5.2mを測る長方形を呈する調査区である。掘削深度は約1.8mを測る。厚さ約0.3mの表土より、中礫～小礫を含む灰褐色粗粒砂を含むシルト、淡黄色シルトを含む細粒砂、黄灰色シルトを含む細粒砂、小礫をわずかに含むオリーブ褐色シルトを含む細粒砂、小礫～細礫を含む灰黄色極細粒砂、にぶい黄橙色極細粒砂と続く。2層と3層の層境は茶褐色に変色し、マンガン粒が多く含まれる。遺物の出土および遺構は確認できなかった。

(8) 8区の調査

8区は7区の北側約27mに位置する。長辺約4.2m・短辺約3.1mを測る長方形を呈する調査区である。掘削深度は約1.5mを測る。厚さ約0.3mの表土より、中礫～小礫を含む灰褐色粗粒砂を含むシルト、小礫を含む褐灰色粗粒砂を含むシルト、黄褐色シルトを含む細粒砂、小礫をわずかに含むオリーブ褐色シルトを含む細粒砂、灰黄色極細粒砂、灰色極細粒砂を含むシルトと続く。3層と4層の層境にマンガン粒を多く含む褐色帯が確認できた。遺物の出土および遺構は確認できなかった。

(9) 9区の調査

9区は8区の北側約24mに位置する。長辺約5m・短辺約3mを測る長方形を呈する調査区である。掘削深度は約1.9mを測る。厚さ約0.4mの表土より、中礫～細礫を多く含むにぶい黄褐色粗粒砂、小礫～細礫を含む灰黄褐色粗粒砂、小礫～細礫を含むにぶい黄褐色粗粒砂、小礫～細礫を含むにぶい黄色粗粒砂、小礫～細礫を含む灰黄褐色極細粒砂を含む粗粒砂、にぶい黄橙色極細粒砂を含む粗粒砂、小礫～中礫を含む灰白色粗粒砂と続く。3層と4層の層境は茶褐色に変色し、マンガン粒が多く含まれる。また、3層から5層にかけて6層由来と考えられる偽礫が含まれる。遺物の出土および遺構は確認できなかった。

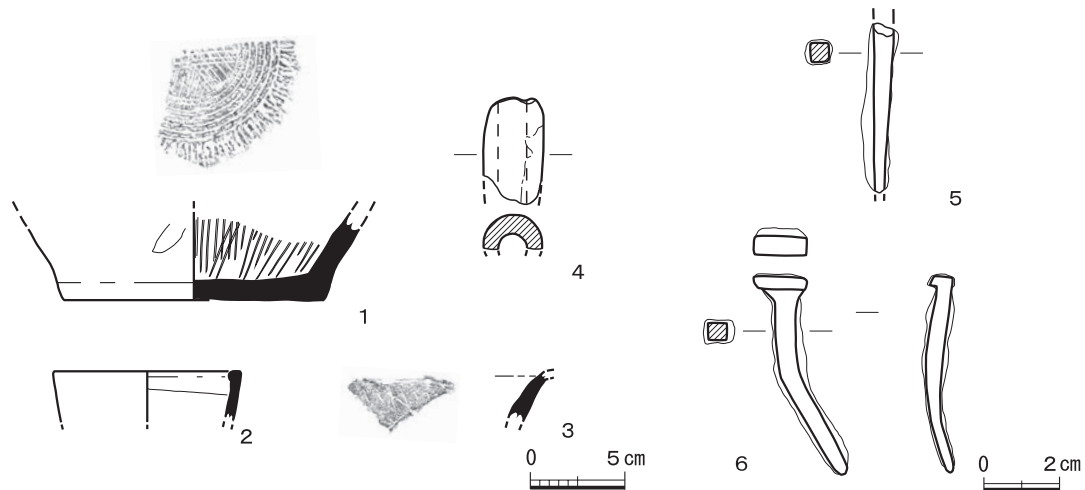
(10) 10区の調査

10区は9区の北側約30mに位置する。長辺約5m・短辺約3mを測る長方形を呈する調査区である。掘削深度は約1.4mを測る。厚さ約0.3mの表土より、中礫～小礫を含む灰褐色粗粒砂を含むシルト、小礫を含む灰褐色粗粒砂を含むシルト、灰色オリーブシルトを含む細粒砂、灰色シルトを含む細粒砂、小礫をわずかに含む灰色シルトを含む細粒砂と続く。3層と4層の層境にマンガン粒を多く含む顕著な褐色帯が確認できた。遺物の出土および遺構は確認できなかった。

5. 出土遺物

本調査で出土した遺物は、コンテナ1箱程度である。遺物は重機による表土掘削の際に出土したものが大部分を占めているが、南側の調査区を中心に、出土状況を確認できた遺物が出土している。本項では、出土位置が判明している5点と周辺遺跡の性格を考える一助となりうる1点について報告する。

1は9区周辺に排水溝を重機によって掘削した際に出土した丹波焼の播鉢である。底部のみが残存し、残存部の器高は4.6cm、復元できた底部径14.4cmを測る。焼成は硬緻で、胎土は密である。



第8図 出土遺物実測図

底部付近まで施釉され、指頭圧痕が確認できる。見込みにも摺目が施されることから、帰属時期は近世と考えられる。

2は4区より出土した磁器である。口縁部に近い部分の小片のため、器高や底径は不明である。復元口径は9cmを測る。焼成は硬緻で、胎土は精良である。見込み部分は露胎している。胎土が精良であることから、中国産の青磁と考えられる。帰属時期は中世後期である可能性が高い。

3は排土より回収した須恵器の細片である。出土位置・層位は不明であるが、後背山地に詳細の不明な古墳群が多数所在することから、周辺遺跡の理解をするために必要な資料として報告する。残存長2.6cm、口径は復元できない。焼成は硬緻で、胎土は密で0.5mm程度の砂粒を含む。小片であることから、器種同定は困難だが、壺の頸部であると考えられる。波状の櫛描文が施され、器壁が薄いことから、古墳時代中期に帰属すると考えられる。よく磨滅していることから、後背山地より風雨等の浸食作用によって本遺跡内にもたらされたのであろう。

4は調査区1の4層出土の土錘である。現存長6.6cm・最大径3.2cmを測る。残存率は2分の1程度で、焼成は良好で、全面にナデを施す。内面に黒斑が認められる。帰属時期は不明である。

5は調査区3出土の鉄釘である。残存長4.5cm、幅0.5cm、厚さ0.5cmを測る。軸の断面形状が方形を呈することから、和釘であると考えられる。帰属時期は近世以降と考えられる。

6は調査区5出土の鉄釘である。長さ5.4cm、幅0.5cm、厚さ0.5cmを測る。軸の断面形状が方形を呈し、釘頭の形状から和釘の替折釘であると考えられ、帰属時期は近世以降である。

6. まとめ

今回の調査では、調査対象地内で明確な遺構を確認することはできなかった。各調査区における堆積物は、いずれも水成の堆積相を呈し、稲粒神社を境として、南側(1～5区)と北側(6～10区)で粒度が異なっている。地形区分図によれば、1～5区は自然堤防・天井川沿いの微高地、6～10区は谷底平野・氾濫平野にあたる。2～4区にかけて観察できる礫層が由良川に向かって高まり、1区と5区で確認できないことから、この礫層が自然堤防の基底であり、南側の調査区

で観察できた細粒の堆積物は、由良川に起源を持つ可能性が高いことが指摘できる。北側にあたる6～10区では、南側と基質がよく似通うものの、小礫や中礫がよく含まれる点や、粗粒砂が多く混入する点において明らかに異なっている。北側の堆積物に含まれる粗粒堆積物は、9区でごく粗い堆積物が確認できたことから、現在の大砂利川のように後背山地から南行する河川によって運搬されたものと考えられ、南北における地形形成の過程が異なることを確認することができた。土地の利用については、考察する材料となる遺物がごく限られるが、南から北へと向かうにつれて遺物の帰属年代が新しくなる傾向が読み取れる。南側では中世～近世、北側では近世の遺物のみが出土していることから、北側の利用は近世以降に開始されたと考えられよう。北側の土地利用の開始が遅くなった理由としては、南側にある自然堤防によって、遺跡周辺の山麓から流下する河川が由良川と合流することなく滞水し続ける、水はけの悪い土地であったためと考えられる。一方、稲粒神社が鎮座する台地上にあたる南側は、既往の成果と今回の調査成果を踏まえると、弥生時代以降、居住に適していた環境であることが、遺物の出土によって指摘でき、川北遺跡の中心部は、自然堤防・天井川沿いの微高地あるいは西側に展開する丘陵地などに求めることができるだろう。

(面 将道)

参考文献

福知山市教育委員会2017 『川北遺跡』(福知山市文化財調査報告書63)

福知山市教育委員会2018 『川北遺跡(第2次調査)』(福知山市文化財調査報告書67)

京都府教育庁指導部文化財保護課2020『京都府埋蔵文化財調査報告書』2020

付表1 出土土器・土製品観察表

() 復元値 [] 残存値

番号	種類	器種	出土地点	口 径 (cm)	器 高 (cm)	底 径 (cm)	残存率	色 調	胎 土	備 考
1	陶器	擂鉢	9区周辺 重機掘削 排水溝	-	[4.6]	[14.4]	3/12	外面体部：赤褐 (10R5/3) 外面底 部：にぶい黄橙 (10YR5/3) 内面： 灰 (N6/0)	密(4mmの 白色砂粒、2 mm以下の白、 黒、茶色砂粒)	丹波焼 か
2	磁器	香炉	4区 床面精査	(9.0)	-	-	1/12 以下	施釉：明緑灰 (7.5GY7/1) 器肉：白 (N9/0) 露胎部：にぶい黄 橙 (10YR7/2)	精良(0.5mm 以下の黒、白 微砂粒)	
3	須恵器	壺か	排土	-	[2.6]	-	-	外面：暗灰 (N3/0) 内面：灰白 (2.5Y7/1)	密(0.5mm以 下の白、黒、 茶色細粒)	古墳時 代中期 か
4	土製品	土錘	1区4層下 面	最大 長：6.6		最大 径：3.2	3/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	密(4mm大 の白、黒色砂 粒、1.5mm以 下の白、黒色 砂粒)	

付表2 出土金属器観察表

[] 残存値

番号	種 類	器 種	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)
5	鉄製品	釘	3区床面精査	[4.5]	0.5	0.5
6	鉄製品	釘	5区東半精査	5.4	0.5	0.5

2. 法貴峠20号墳第2次発掘調査報告

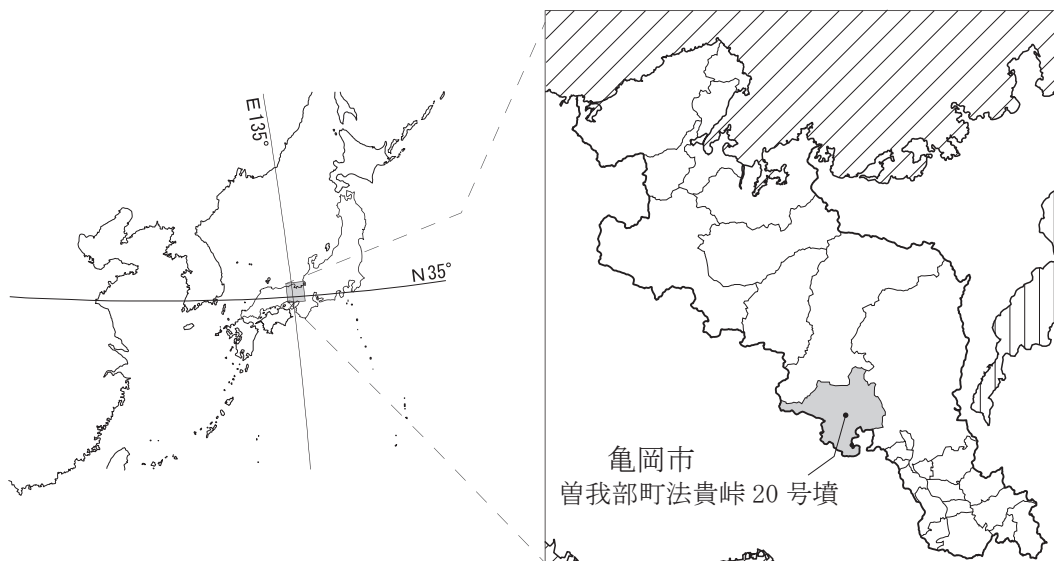
1. はじめに

京都府中部に位置する亀岡市では、桂川右岸の比較的緩やかな傾斜地を利用して、水稻を中心とした土地利用型農業の経営が行われてきた。しかしながら、農地の多くが狭小で不整形であることや、近年の機械の大型化に伴い道路の整備、用水等の整備が必要な状況である。また、農業従事者の高齢化等の様々な問題が顕在化し、耕作放棄地も散見されるなど、農業生産基盤の脆弱化が進んでいる。このため、一級河川桂川右岸に位置する亀岡中部地区の農地において、平成26年度から農林水産省近畿農政局亀岡中部農地整備事業所により、土地利用の計画的再編・担い手への農地利用集積を進めるための区画整理を行い、農業経営の合理化と構造改善を図る国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」事業が行われてきた。

曾我部工区での発掘調査は平成30年度より着手し、春日部遺跡、金生寺遺跡、犬飼遺跡、與能遺跡の調査を継続して行っている。令和2年度には、本書で報告する法貴峠20号墳のほか金生寺遺跡、春日部遺跡、犬飼遺跡で発掘調査を行った。これらの遺跡については、京都府教育委員会による現地踏査、亀岡市教育委員会の小規模調査などを経て、農林水産省近畿農政局と京都府教育委員会の協議が行われ、発掘調査について当調査研究センターが依頼を受けたものである。

令和2年度の曾我部工区での調査にあたっては、曾我部町、蔭田野町、吉川町、東別院町、西別院町、本梅町、東本梅町、宮前町、畑野町、大井町、千代川町、亀岡西部の各自治会に御高配を賜るとともに、多くの地元の方々にご参加いただいた。また、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会に指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

なお、調査に係る経費は、農林水産省近畿農政局が全額負担した。



第1図 調査地の位置

本文は、調査担当者である荒木と調査第1係長の森島が執筆した。

〔調査体制等〕

＜現地調査＞

現地調査責任者 調査課長 小池 寛
現地調査担当者 調査課調査第1係長 村田和弘
同 調査第1係副主査 引原茂治
調査第1係調査員 山本 梓
調査第1係調査員 荒木瀬奈
調査第2係調査員 三好博喜

調 査 場 所 亀岡市曾我部町中中小路・一ノ井出

現 地 調 査 期 間 令和2年6月2日～令和2年12月23日

調 査 面 積 1,444㎡

＜令和6年度整理作業＞

整理作業責任者 調査課長 小池 寛
整理作業担当者 調査課調査第3係長 細川康晴
同 調査第1係主任 荒木瀬奈
整理作業期間 令和6年4月1日～令和7年3月31日

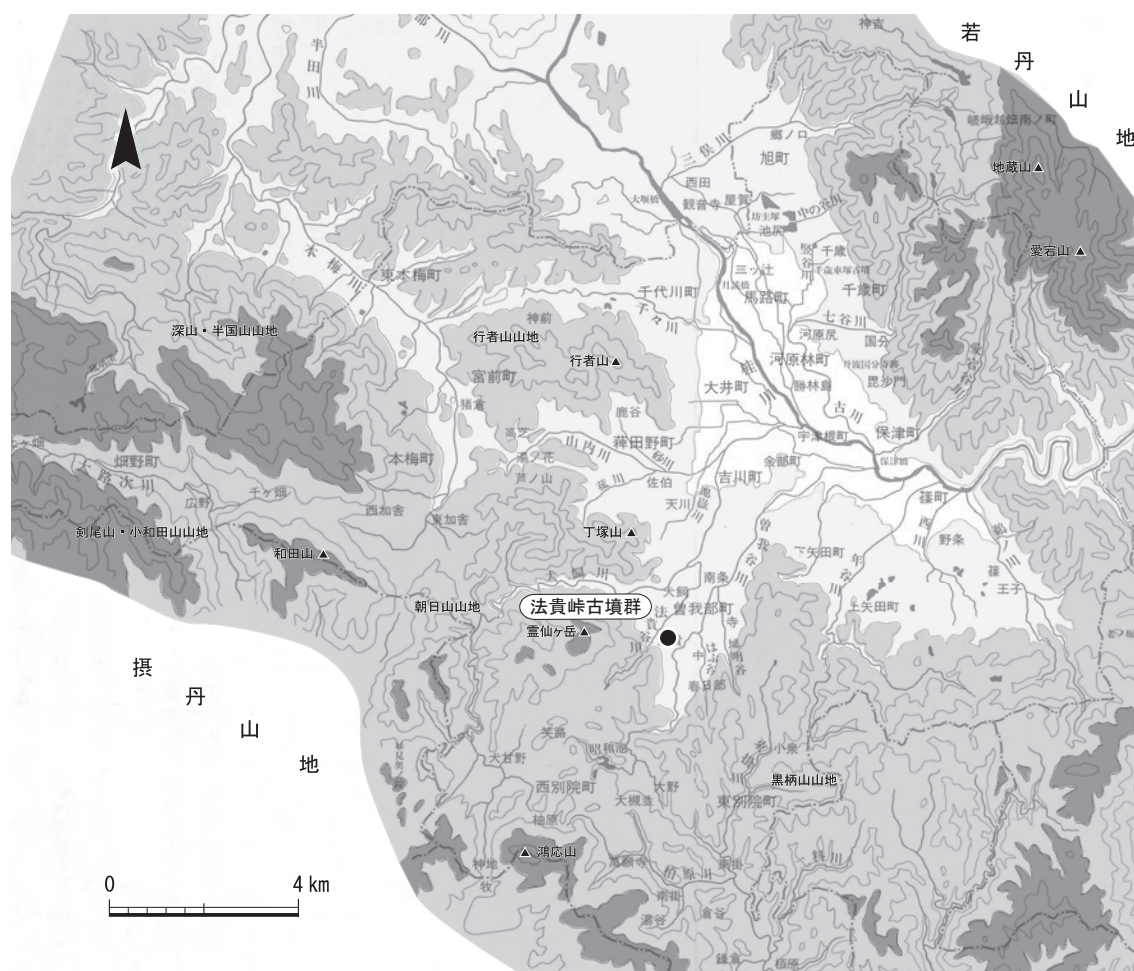
2. 位置と環境

1) 地理的環境(第2図)

亀岡市は、京都府のほぼ中央に位置し、西側と南側が大きく突出した四角形状を呈している。面積約222.84㎡で、東西約24.6km、南北約20.5kmの広さを持つ。北は南丹市、東は京都市、南及び西は大阪府高槻市・茨木市・豊能郡能勢町・同豊能町に接する。

法貴峠古墳群の所在する亀岡市曾我部町は亀岡盆地の南西端にあたる。大堰川(桂川)の支流である犬飼川・法貴谷川・曾我谷川が形成する扇状地が広がり、周辺を丹波帯と呼ばれる泥質岩、砂岩、チャートを主とした堆積岩で、一部に石灰岩を含む山地が取り囲む。扇状地は、緩く北に低く傾いた平らな地形と、山麓に見られる急斜面の扇状地が複合した合成扇状地と考えられる。法貴峠古墳群が立地する扇状地西側は、霊仙ヶ岳から供給された砂岩、粘板岩、花崗岩、石英閃緑岩、その風化物である真砂土からなる。

また、曾我部町には大阪方面各所へと通じる交通路が2本あり、現在でも交通量が多い。法貴峠古墳群近隣には旧摂丹街道である国道423号線が通っており、亀岡市西別院町、大阪府能勢町を経て池田市に通じる。法貴谷川を挟んで東側には、旧茨木街道である府道407号線が通り、亀岡市東別院町を経て大阪府茨木市に至る。これらの道は、近世に整備された、亀山城下から峠や谷筋を通過して摂津方面に向かう道であり、前者は関明神越道、後者は鳥居嶺道として『五畿内志』



第 2 図 亀岡盆地の地形

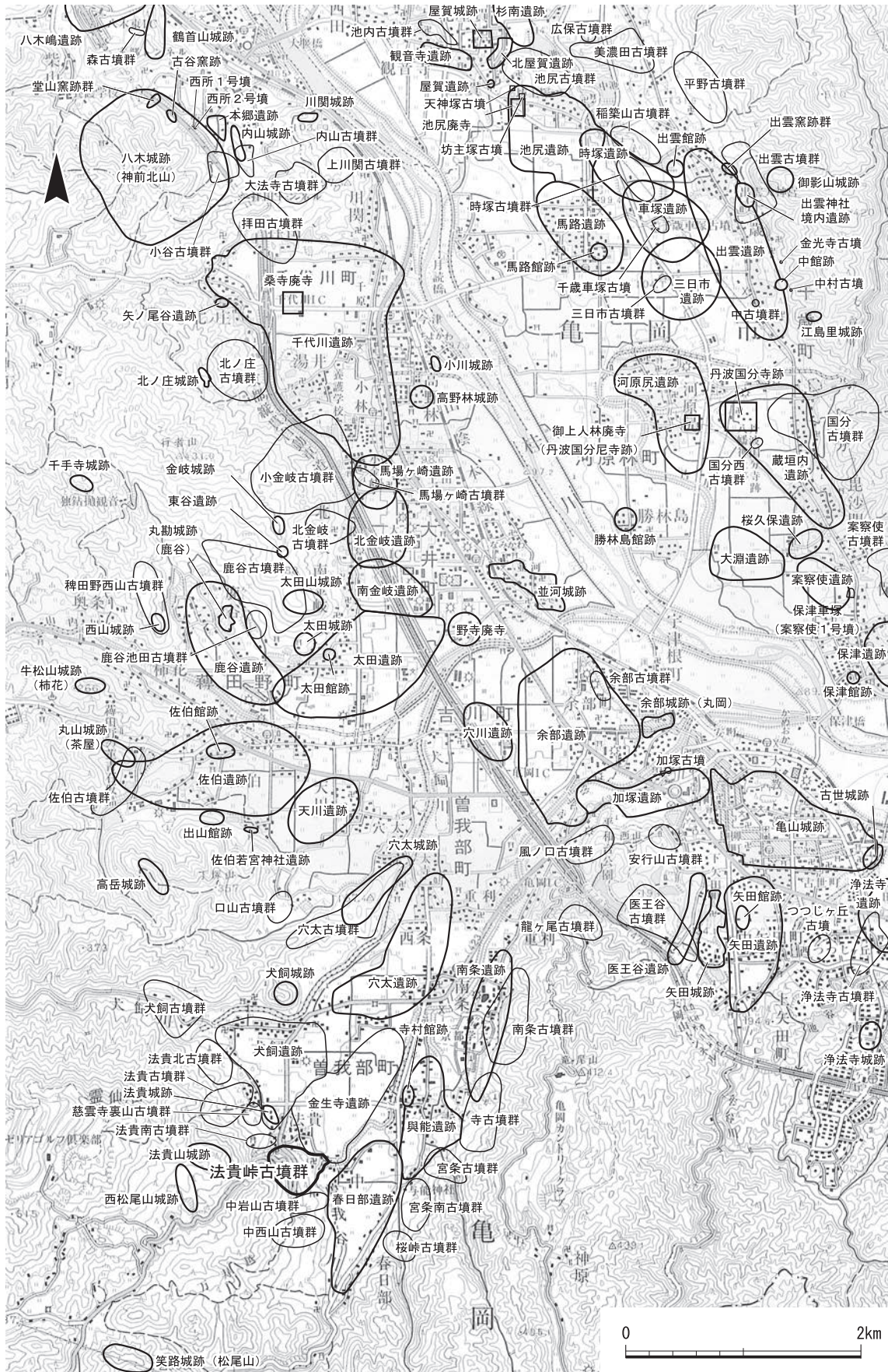
にもみえる。近世には法貴村など一部の村が高槻藩領であった時期もあり、丹波の中でもとりわけ摂津との関係が深い地域である。

2) 歴史的環境 (第 3 図)

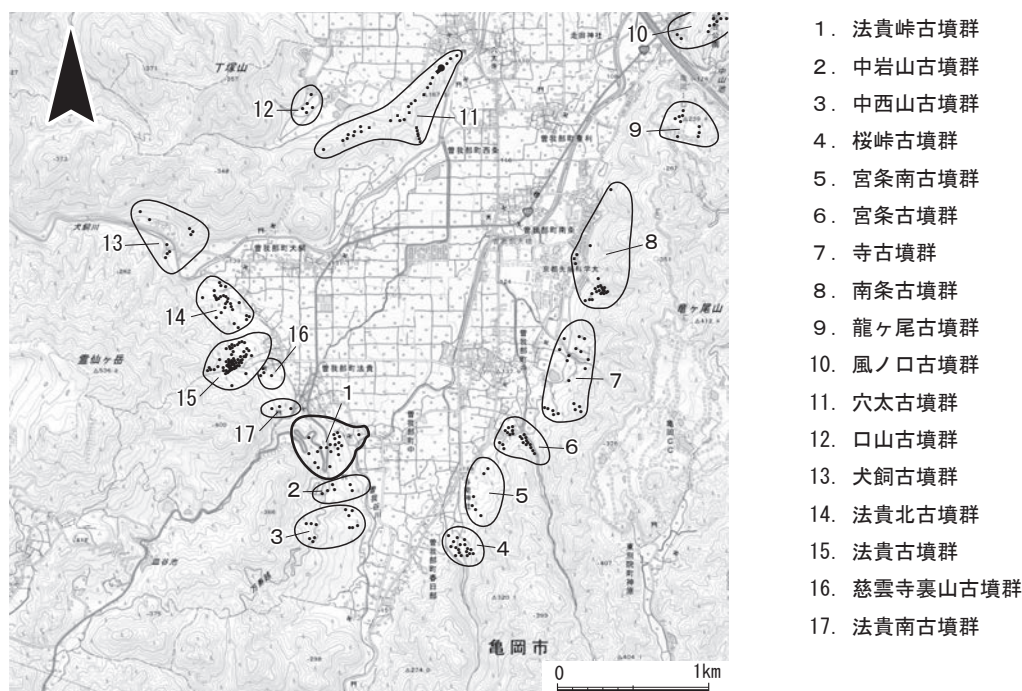
今回報告する法貴峠古墳群が所在する曾我部町域の遺跡の様相を中心に述べる。

曾我部町では、令和 6 年度時点で弥生時代以前の明確な遺構は確認されていないものの、犬飼遺跡にて、弥生時代中期後葉～後期のものとみられる有孔磨製石鏃が出土している。また、正式な報告は今後行う予定であるが、金生寺遺跡の遺跡範囲北部で令和 3 年度に行われた第 10 次調査地にて、窪地状地形から縄文時代後期の土器が出土している。これらの遺物から、今後、弥生時代以前の遺構の検出が期待される。

曾我部町を取り囲む丘陵上には、多数の古墳・古墳状隆起が分布することが知られており (第 4 図)、亀岡盆地内でも、西部の鹿谷古墳群や小金岐古墳群などが分布する行者山山麓部に次ぐ密集状況である。古墳以外の遺跡の状況は不明瞭であったものの、近年の発掘調査の成果により、竪穴建物や溝状遺構等の存在が確認されている。時期の判明する遺構は古墳時代前期後半からで、犬飼遺跡で解析谷から前期後半～中期前半の護岸遺構や溝状遺構等が検出されている。また、犬



第3図 周辺遺跡分布図(国土地理院1/50,000 京都西南部・京都西北部)



第 4 図 亀岡市曽我部町古墳分布図(1/50,000)

飼遺跡と金生寺遺跡で大規模な井堰や水路が存在したことが明らかになっており、この時期に同地域の開発が進展したと考えられる。なお、現状では明確に前期に比定できる古墳は見つかっていないものの、犬飼遺跡で川西編年Ⅱ期の前期後半～中期初頭の埴輪片が少量出土しているほか、穴太古墳群で筒形銅器が採集されている。中期では、春日部遺跡にて中期中頃の竪穴建物が確認されている。この時期の古墳としては、穴太古墳群で、5 世紀後半の須恵器・円筒埴輪が採集されている 12 号墳や、5 世紀末葉の竪穴式石室を持つ 16 号墳、曽我部町東部の南条に分布する 5 世紀後半～末の方墳である南条 3 号墳が挙げられる。後期になると、春日部遺跡で竈を持つ竪穴建物が複数検出されている。丘陵部には前述のように多くの古墳が築造されており、発掘調査が行われたものは、法貴峠 20 号墳のほかに、桜峠 18 号墳、中西山(春日部) 1 号墳があり、いずれも後期後半以降に比定できる。更に、近年、法貴北古墳群・法貴古墳群にて多数の複数の横穴式石室を持つ古墳が調査されている。

飛鳥時代は、古墳時代と比較して盆地全体で集落の形成がやや低調であり、曽我部町内でも当該時期に属する遺構は多くないものの、犬飼遺跡で検出された開析谷にて、木材を集積した遺構があり、近隣に木材加工に関わる施設の存在が想定される。また、丘陵部の古墳の中では、南条 4 号墳では無袖式横穴式石室から 7 世紀前半頃の遺物が出土している。近年調査された法貴北 5 号墳からは、飛鳥時代の遺物が出土しており、この時期の追葬が確認できる。

古代の亀岡盆地内では複数の古代寺院が知られており、曽我部町では、白鳳寺院とされる與野廃寺の存在が想定されている。近隣には、延喜式内社である與野神社があり、その御旅所付近で、開墾時に本薬師寺系の軒丸瓦 1 点と軒平瓦 2 点が採取されている。また、付近には礎石が残されている。

奈良時代では、犬飼遺跡で掘立柱建物が複数検出されている。また、金生寺遺跡では、条里地

割に関係する畦畔が確認されており、畦畔に伴う耕作土層からは奈良時代後半の遺物が出土している。また、南条火葬墓群の1号墓は8世紀後半頃のものと考えられる。

平安時代になると、春日部遺跡にて、平安時代後期の方形区画溝の一部と、その内側から掘立柱建物や柵列が検出されている。なお、近年の調査によって、区画溝の外にも、平安時代前期～末に渡る掘立柱建物が複数確認されている。

中世前期には、近年の調査により、金生寺遺跡や犬飼遺跡の複数地点で、掘立柱建物や井戸、墓域等の遺構とそれに伴う多くの遺物が確認されている。金生寺遺跡4・5次調査では、12～13世紀前半の掘立柱建物・井戸・溝状遺構が確認されている。南条火葬墓群でも、13世紀後半～14世紀前半のものが確認されている。

当該時期では、犬飼遺跡にて確認された13世紀後葉～14世紀前葉の堀で囲まれた居館が特筆される。この堀は2条確認されており、いずれも幅約8m、深さ約2mを測る大規模なものである。堀の内側の2つの区画から掘立柱建物や土橋などが検出されている。居館は14世紀前葉で機能を終え、堀は15世紀代まで維持管理が行われた後、埋め戻され、耕地化した部分と基幹水路として踏襲された部分に分かれる。なお、前述したいずれの遺跡も14世紀前半には遺構が確認できなくなり、中世後期頃には現状の集落に近い位置に居住域が形成されていた可能性が高い。

曾我部町内で確認されている中世城館としては、酒井氏が城主と伝わる法貴館跡や、亀岡盆地内でも屈指の縄張りを持つ法貴山城、周辺に「城ヶ裏」や「垣内」などの城館関連地名を残す寺村館跡、『丹波志桑田記』に、上原(福智)氏が応永元(1467)年より居住したとされる犬飼城跡などがある。

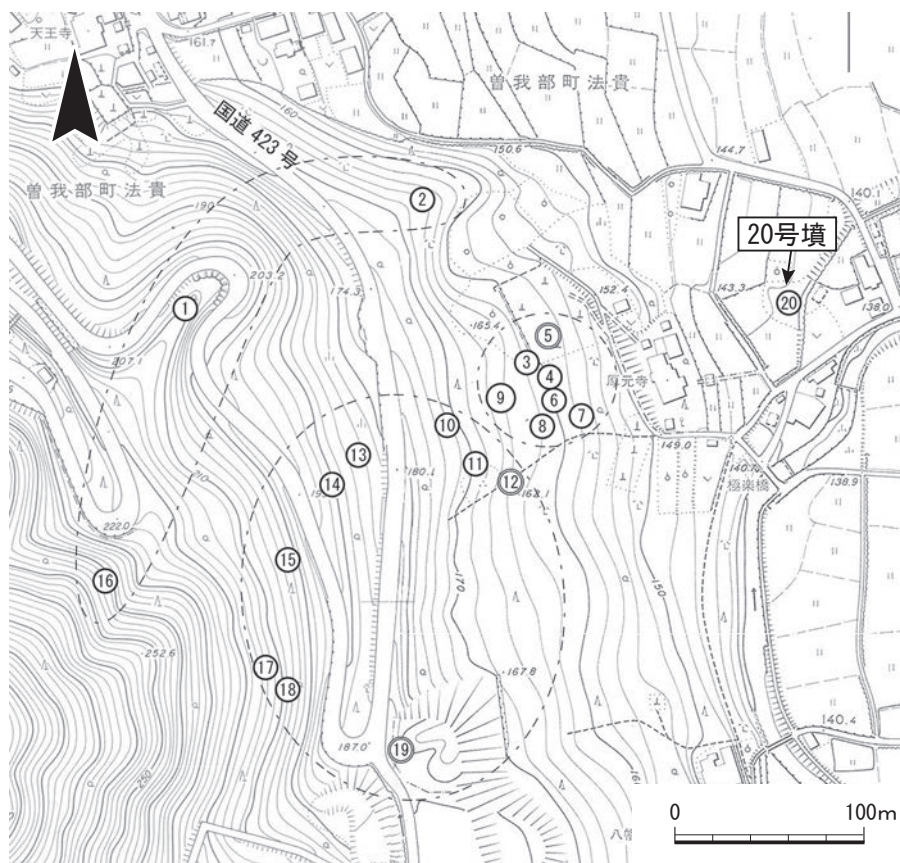
天正3(1575)年には、明智光秀による丹波国攻略が開始され、天正5(1577)年には亀山城を築城した。犬飼城も天正10(1582)年に落城している。天正8(1580)年には光秀は丹波29万石に封せられ、亀山城を整備するなど近世の城下町の礎を築いた。^(注1)

3)法貴峠古墳群の概要

今回報告する法貴峠20号墳を含む法貴峠古墳群は、曾我部町西部の霊仙ヶ岳東麓に位置する丘陵斜面に分布する。この付近の丘陵斜面は平野部側に向けて僅かに突出しており、周辺の古墳群よりもやや平野部からの視認が良好であったと予想され、谷間に密集する法貴古墳群等とは対照的な立地となる。

これまでに、亀岡市教育委員会・京都府教育委員会・龍谷大学考古学研究会によって分布調査や墳丘・石室の測量調査が行われている。^(注2) 当報告では、龍谷大学考古学研究会が令和4年に発表した成果を基に古墳一覧を作成した(付表1)。この成果によると、古墳の数は20基とされているものの、5・12・19号墳は現状では確認できない。また、1・2・9号墳については、現状の石室実測図が作成されている。^(注3)

今回調査を行った20号墳は、法貴峠古墳群の山麓に分布する古墳から約120m離れており、標高も14mほど差がある。当古墳群では20号墳以外に発掘調査されたものはなく、京都府教育委員会が行った1次調査と当報告を合わせて、初めての全面発掘調査成果となる。



第 5 図 法貴峠古墳群分布図(1/4,000、龍谷大学考古学研究会2022に加筆)

付表 1 法貴峠古墳群一覧(龍谷大学考古学研究会2022を参考)

古墳名	墳形	規模 (m)		埋葬施設		出土遺物	残存状況	備考 (現状)
		径	高さ	構造	開口 方向			
1	円	13.6	4.3	横穴式石室 (両袖)			完存	
2	円	15	3	横穴式石室 (両袖)	南東		完存	
3	円	10	2 以上	横穴式石室	東	須恵器 (甕・有蓋 高杯)	完存か	
4	円	9	1 以上	横穴式石室	南東		全壊	
5							消滅か	
6	円	14.5	3.5	横穴式石室	南東		半壊	
7	円 or 方	11	1.5 以上		南東 か		完存か	
8	円	11	2 以上	横穴式石室	南東		全壊	
9	円	19	4.8	横穴式石室 (両袖)	南東		半壊	
10	円	16	3.5 以上		南東		半壊か	
11	円	12	2.5			須恵器	完存か	
12							消滅か	
13		12		横穴式石室			半壊か	
14							不明	確認できない
15	円	7.1	3				半壊	
16	円	9.3	1.7				完存か	
17	円	16	4	横穴式石室			半壊	
18	円	10.2	3.1	横穴式石室			完存か	
19							消滅か	
20	円	13	2.5	横穴式石室 (両袖)	南東	当報告	消滅	当報告

3. 調査の経緯と方法

1) 調査の経緯

法貴峠20号墳は、平成27年度より開始された国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」における埋蔵文化財の発掘調査に伴う現地協議の際に新規で確認された。その後、京都府教育委員会により、平成31年1月28日から2月28日の間測量調査が実施された。次いで令和元年10月1日から12月20日にかけて範囲確認調査(第1次調査)が行われ、墳丘が部分的に残存することが確認され、20号墳とされた。^(注4) 上記の調査成果を受けて、令和2年度に当調査研究センターが20号墳とその周辺の本調査を行った。

なお、調査中に近隣の地元住民の方々から伺った話によれば、昭和の頃には、墳丘上に祠が設置されていたとのことである。角礫が多数集積されている状況は把握されていたものの、古墳という認識はなかったと考えられる。

2) 調査の概略

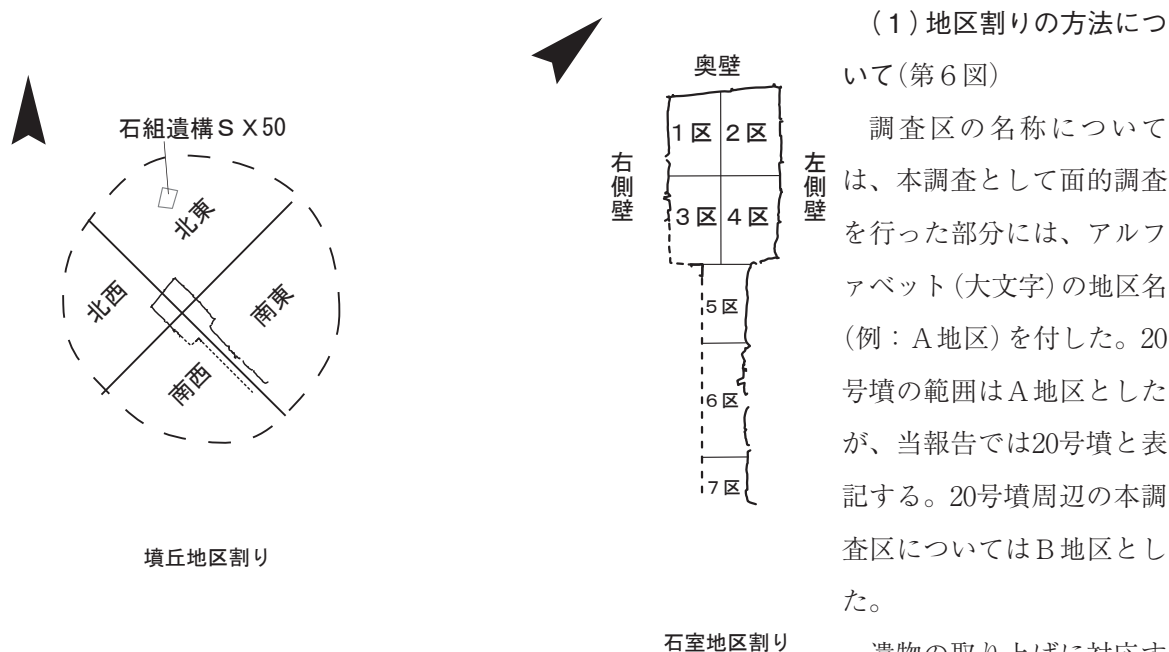
現地調査 令和2年度に、20号墳とその北側を中心とする周辺の田畑として使用されていた平地部を本調査区(B地区)として全面調査を行った。

調査期間は令和2年6月2日～令和2年12月23日で、調査面積は合計1,444㎡である。

整理報告作業 令和5～6年度にかけて整理報告作業を行った。出土遺物については、台帳登録、洗浄作業を行い、その後注記・接合作業を行った。その作業と並行し、報告書に掲載する出土遺物の選別及び実測作業、写真撮影等を行った。また、鉄製品については理化学処理を行った。

当報告で使用した遺構図は、現地で作成したもののほか、空中写真撮影を基に作図した平面図や、オルソ写真を基に作図した平・立面図を使用した。

3) 調査の方法



第6図 20号墳墳丘並びに石室地区割

(1) 地区割りの方法について(第6図)

調査区の名称については、本調査として面的調査を行った部分には、アルファベット(大文字)の地区名(例：A地区)を付した。20号墳の範囲はA地区としたが、当報告では20号墳と表記する。20号墳周辺の本調査区についてはB地区とした。

遺物の取り上げに対応する地区割りについては、20

号墳と B 地区で区別して設定した。

20号墳は石室主軸を基に、墳丘は北東・北西・南東・南西の 4 区、横穴式石室は 7 区に区分した。なお、石室の各部名称についても横穴式石室研究会が整理した用語に従う。^(注5)

B 地区については、平面直角座標系を利用した 5 m のグリッドを設定した。X・Y の座標値のうち、整数値の下 2 桁が 00 となる線を基準に 100 m 四方の中グリッドを設定し、これを東西と南北でそれぞれ 20 等分した。VI 系平面直角座標系は北東角を起点としており、南と西へ向かって X・Y の絶対値が増加する。この点を考慮して、南北方向は北から h～w、東西方向は東から 6～15 として、各グリッドの名称は h 9、h10 などとする。

(2) 遺構番号について

それぞれの遺構番号の頭には遺構の性格を示す略号を付した。略号は調査の進展に伴って変更することもあったが、遺構番号は変更しないようにした。本書で使った略号は以下のとおりである。

S A：柱列、S B：掘立柱建物、S P：柱穴・ピット、S X：そのほかの遺構

4. 20 号 墳 丘 の 調 査

1) 調査前の状況

調査前は、20号墳全体が竹藪となっており、北・西・南側は田畑で、東～南東側の現状の地形は、約 2 m の高低差がある急峻な崖状の急斜面となっている。急斜面の下には形成時期不明の平坦面があり、その東側に現況の水路が走る。墳丘南西部の約 4 分の 1 は、削平されている。墳丘周辺は耕作地として利用されており、著しく改変を受けていた。

20号墳は、北東に向かって傾斜する丘陵裾付近の標高約 142 m 付近に位置しており、同古墳群の他の古墳が分布する丘陵斜面部とは約 120 m 離れた地点に立地している。同古墳群中では一番平野部に近く、法貴谷川等が形成する平野部の広範囲が見渡せる。また、東側には亀岡盆地と北摂を行き来する際の交通路が位置しており、通行する際に視認できたと予想する。

20号墳は曾我谷川等が形成する段丘の縁辺に辿り、地形の変換部分に位置すると考えられる。

平成 30～令和元年にかけて京都府教育委員会が作成した調査前の墳丘測量図(第 8 図)によると墳丘の大きさは、径約 13 m の円墳と予想されていた。

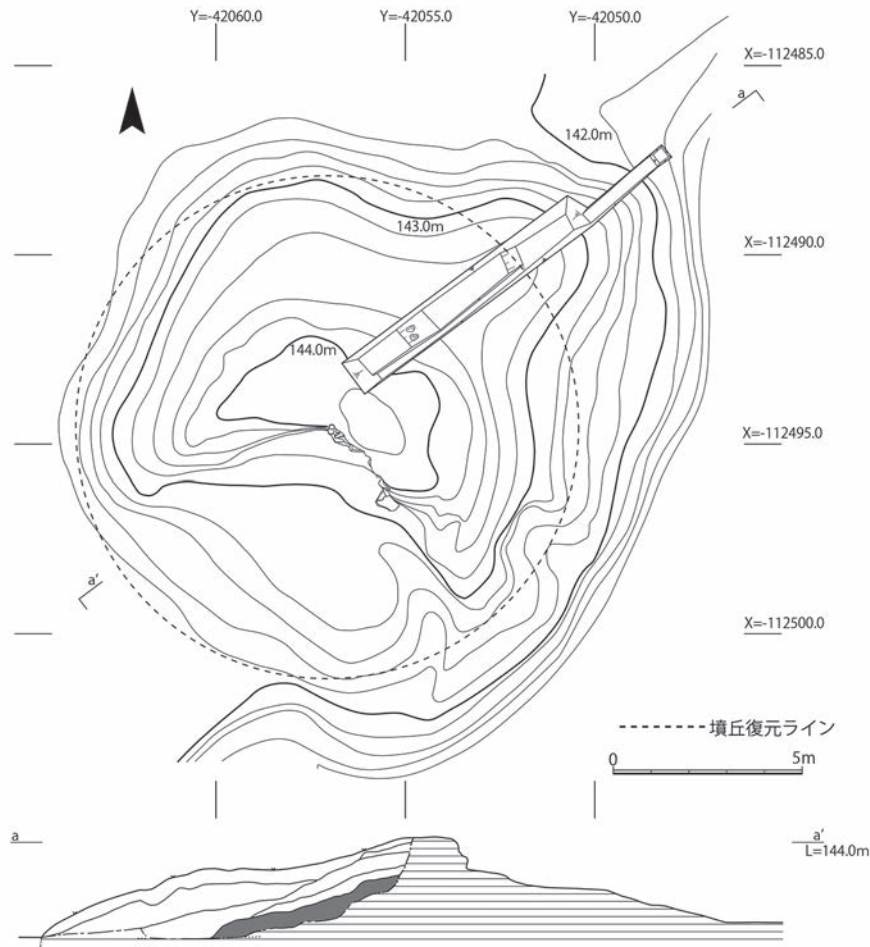
2) 中近世の遺構

竹を伐採し、草刈りを終えて表土を確認した時点で、複数の角礫が散乱している状況が認められた。この段階で、墳丘南西側では、横穴式石室の石室構築石材が 2 段ほど確認できた。表土を除去すると、主に墳丘北半部を中心に、0.2～0.5 m 大の角礫が集積している状況を検出した(第 9 図)。断面観察から墳丘残存部まで約 0.2～0.4 m ほど堆積している。また、角礫検出と同一面で、墳丘北側で後述する 13 世紀前半の石組遺構 S X 50 を検出した。

角礫の位置等には規則性はなく、角礫間に土砂や遺物が混入することから、無作為に集積されたと考える。石種は石室石材や石組遺構 S X 50 と同じく砂岩が多く、少量のチャート等が認めら



第7図 20号墳調査地及びB地区平面図(S=1/400)



第 8 図 20号墳調査前測量図(出典：京都府教育委員会2021)

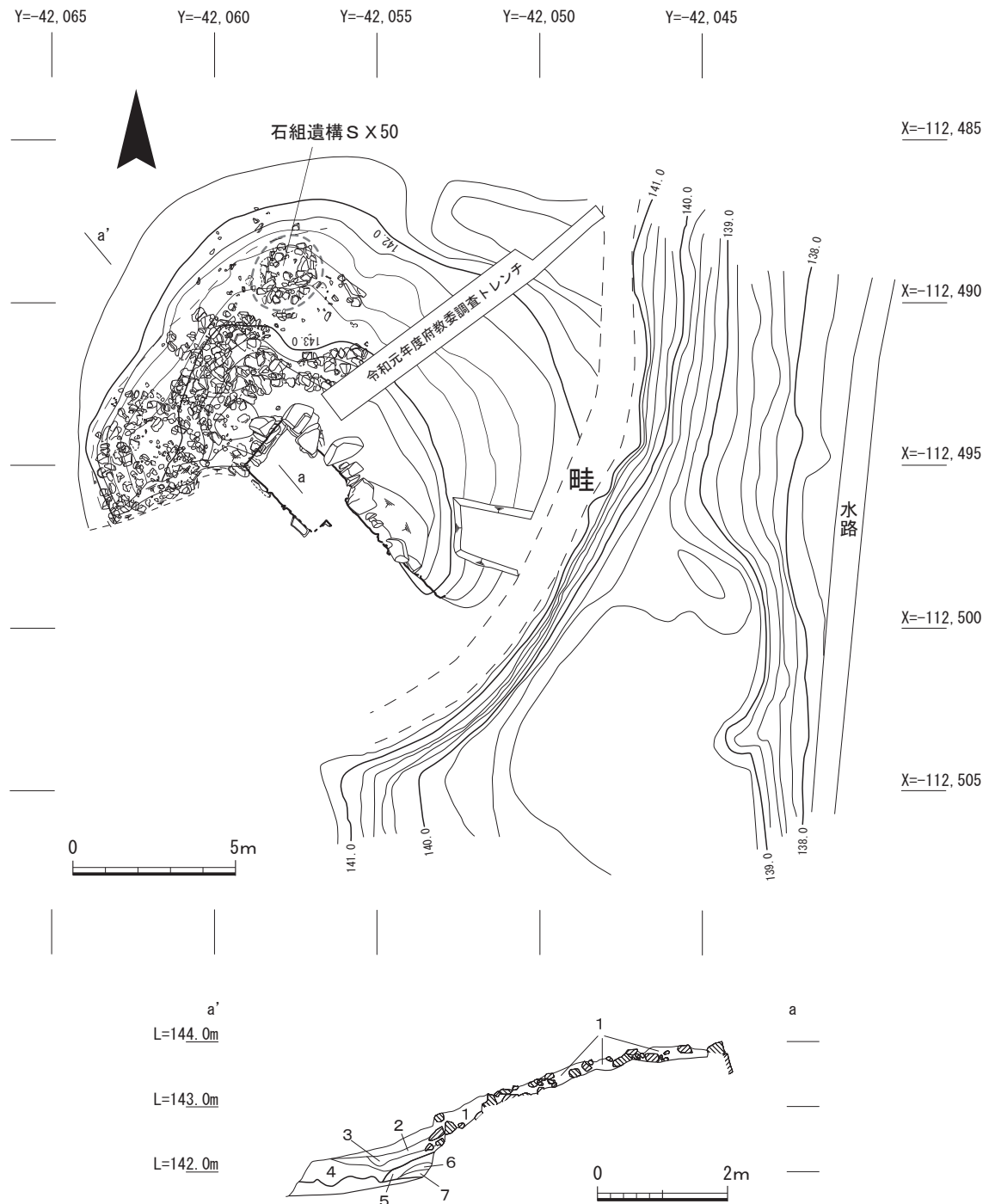
(注6) れる。これらの石材は北側のB地区の土石流中にも多く含まれており、周辺で採取可能な石材と考えられる。ただ、角礫の中には、20号墳築造に伴うものも存在する可能性がある。後述するように、20号墳の墳丘内には列石が複数設置されているほか、盛土中には、列石以外の単独で分布する石材も複数確認している。築造当初から墳丘盛土中や墳丘内列石として埋設されていた角礫が、後世に移動されて再堆積されたものが含まれることは想定できるものの、判別はできなかった。北側とは対照的に、南東側の羨道・開口部付近では、表土を除去した段階で後述する羨道側の列石の上部付近が露出していた。

角礫の検出・除去中には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶磁器・土人形等が出土した。遺物の時期は古墳時代前期後半～近世にわたり、古墳築造以降、複数回に渡り墳丘・石室が削平・攪乱されたと考えられる。

3) 墳丘盛土

角礫と古墳時代前期後半～近世の遺物を含む層を除去すると、残存する墳丘盛土と角礫を石垣状に積み上げた墳丘内列石を複数箇所を確認した。残存する墳丘盛土の判定は、古墳時代以降の遺物が出土するか否かで判断した。

残存部検出段階で、玄室周辺に位置する2段の列石の内、下段の列石や羨道部付近の列石まで



1. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細粒砂、径5～15cm大の礫多いく表土>
2. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 細粒砂<中近世の盛土>
3. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 細粒砂～中粒砂<中近世の盛土>
4. 暗灰黄色 (2.5Y 4/2) 細粒砂<中近世の盛土>
5. 黒褐色 (7.5YR 2/2) 細粒砂に、にぶい褐色 (7.5YR 5/4) 細粒砂を粒状に20%含む、やや粘性・縮まりありく墳丘盛土か>
6. 黒褐色 (10YR 3/1) 細粒砂に、にぶい褐色 (7.5YR 5/4) 細粒砂を粒状に30～40%含む、やや粘性あり・やや縮まりなく墳丘盛土か>
7. にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 極細～細粒砂に、灰褐色 (7.5YR 4/2) 細粒砂を粒状に20%含むく墳丘盛土か>

第9図 20号墳中近世遺構平・断面図(平面：S=1/200、断面：S=1/100)

古墳時代～近世の遺物を含む土が堆積しており、少なくとも石組遺構 S X50 が構築される 13 世紀前半頃には既にこれらの列石は露出していたと考える。ただし、玄室奥壁後方付近に位置する上段の列石については、部分的に最下段付近の石材を覆うように、墳丘盛土のなおい黄褐色細粒砂を含む黒褐色細粒砂土が 0.15m ほど残存しており、墳丘内に埋設されていたと判断した。

なお、墳丘の南西から南にかけては著しく削平・改変を受けており、石室基底石付近を除き築造当初の盛土は残存していない。

4) 墳丘構造

墳丘残存部の記録後、上段の墳丘内列石を覆う墳丘盛土を除去し、墳丘内列石を全て検出した状態で記録を行った(第11図)。その後、横穴式石室内の調査・記録が終了した時点で、墳丘の断ち割りと石室の解体を行った。20号墳の墳丘は、盛土・墳丘内列石・そのほか石材で構成されており、墳丘内には自然堆積層の利用は認められない。

墳丘盛土は複数の層に区分できるものの、全体的に黒ボク土に類似するような粘性・締まりのない土である。墳丘の残存状況の良い北西(奥壁背後)側、北東(玄室左側壁背後)側と羨道左側壁背後の断面を中心に各層を下部から概観する(第14～17図)。まず、古墳築造前に自然堆積層を削平し、黒褐色細粒砂を含むなおい黄褐・明黄褐色細粒砂土で全体を整地する(第14図54～56層など)。厚さは平野側の北東側で若干厚くなり、約0.25mを測る。次に、整地層の上から玄室の基底石据付け穴を掘削する。基底石据付け穴の埋土には、基底石裏込め土と近似する黒褐色細粒砂に明黄褐色細粒砂を粒状に含むやや締まりのある土が用いられる(第14図53層など)。なお、羨道基底石の据付け穴は確認できない。基底石を据え付ける段階と前後して、周辺に明黄褐色・黒～黒褐色細粒砂土を基底石よりやや上辺りまで盛土する(第14図33～52層など)。そして、断面ではこの土を掘り込み、内部に基底石裏込め土となる黄～明黄褐色細粒砂を含む黒～黒褐色細粒砂土を充填する(第14図23～26層など)。基底石裏込め土は墳丘の他の盛土と比較してやや粘性・締まりがある。基底石裏込め土付近は、断面のみでは、石室掘形のように見えるものの、実際に当初から掘形状に掘られたのか、すり鉢状に窪ませていたものが裏込め土充填時に掘形状に整形されたのかは定かではない。また、北東側断面では、前述の裏込め土の背後に暗褐色細粒砂土が堆積しており、二重の掘形状を呈する(第14図27～32層)。この部分の意図・機能については明確にできない。そのほかに、北西側断面では、墳丘裾付近にて自然堆積層と類似する白い石を含む土が堆積する(第15図25～31層)。この部分は完掘時でも自然堆積層が他の部分よりも幅 2 m ほどで墳丘側に 1 m ほど入り込んでいる状況を確認した。この部分についても現時点では機能は明確にはできず、墳丘盛土の一部としておく。

基底石と裏込め土を設置後、2～3段目の石室石材を設置し、その裏込めとして黒～黒褐色・明黄褐色細粒砂土が設置される(第14図13～22層など)。また、北西側断面ではこの段階で石室石材から約2.7m離れた地点に下段列石が設置される。これより上部となる3段目以降の石室石材設置とその裏込めとして黒褐色～なおい黄褐色極細～細粒砂土が設置され(第14図1～12層など)、更に上段列石・羨道部側列石が設置される。天井石周辺は欠損しており、詳細な状況は不

明である。羨道部では、基底石据付け穴・裏込め土は確認できず、床面の上に基底石を設置している。断面では基底石の斜め下付近に石室掘形状の部分(第16図11～13層)があり、この部分まで羨道床面の整地層が広がる可能性がある。また、南西側は著しく削平・攪乱されており、墳丘構造は不明である。

5) 墳丘内列石

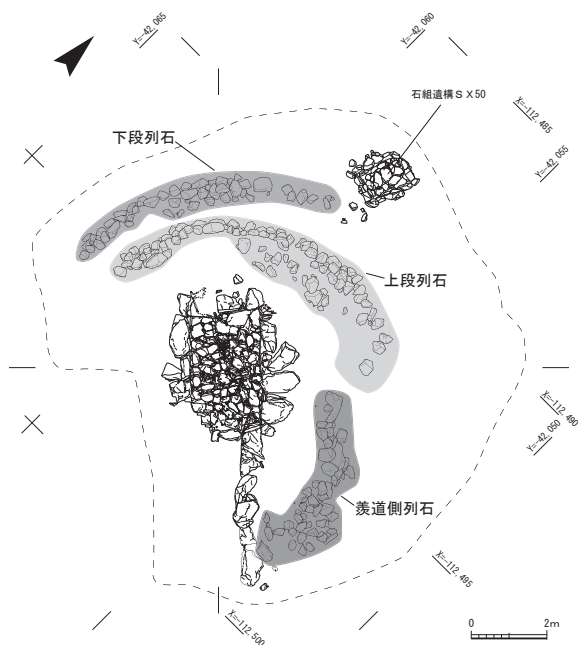
墳丘内列石は列石間に土を含んでいる部分や、石材の位置や面が揃っていないものも多く、埋設当時の状態を保っているか否かの判断は困難であった。第12・13図に墳丘内列石の平面図と、石室主軸を基準にした4方向からの立面図を掲載する。

細部を見ていくと、位置や積み方がやや異なっており、当報告では第10図に示した3つの区分を用いる。石室玄室周辺の盛土内に配置される列石の内、玄室から約2.2m離れており、標高142.5m以上に分布するものを上段列石、その外側に位置し、玄室から約2.7m離れており、標高142.5m付近に分布するものを下段列石、羨道から袖部付近の盛土中に分布するものを羨道側列石とした。墳丘内列石の分布状況は、墳丘北西部の石室奥壁背後から南東部の羨道部まで断続的に分布しており、いずれも全周していたのか、部分的な施工であったのか明確にできない。また、玄室付近の上段列石と下段列石は階段状に設置されているのではなく、上段列石の最下部付近と下段列石の最上部は、標高的にそれぞれ重複する部分が認められる。

列石を構成する石材の法量は0.2～0.6mを測る。石種は砂岩・チャート・凝灰岩が確認できる。

墳丘内列石の機能としては、墳丘盛土の土留め以外にも、配置位置や構造、盛土との関係などによって、部分ごとに個別の機能も合わせもっていると考ええる。以下に、上・下段列石、羨道側列石の構造・機能を確認する。

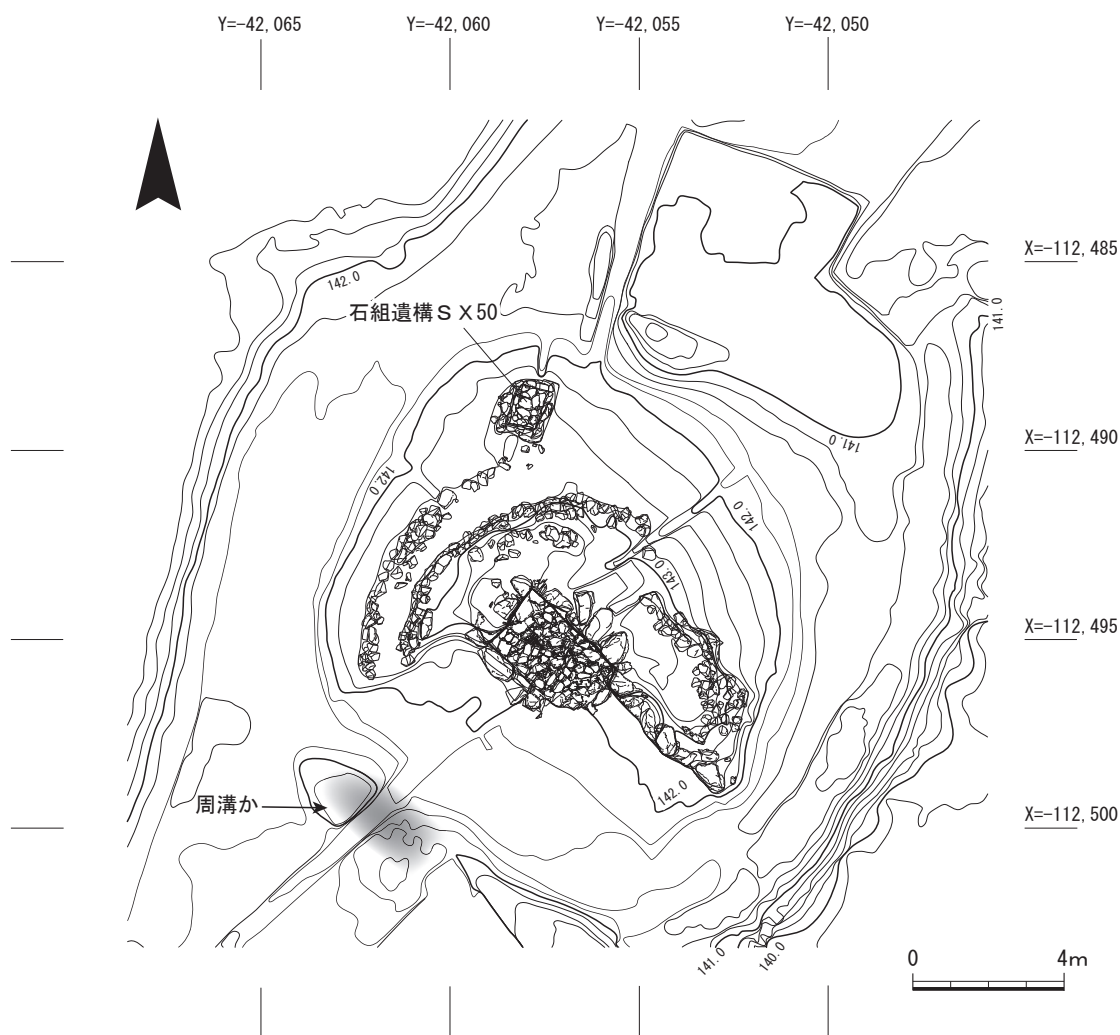
上段列石の位置は、玄室奥壁背後付近から左側壁付近までに分布しており、平面形は横穴式石



第10図 20号墳墳丘内列石の区分図

室主軸に沿うように弧を描く。構造としては石材2～4段分確認できる。傾斜角度は55～60°ほどを測る。石材間は隙間なく段状に積み上げられており、下段・羨道側列石より丁寧な施工である。特に奥壁背後は各段の区別も明確である。奥壁と左側壁の隅角付近では、更に上下に2分できる可能性もあるものの、設置角度や機能的には共通・連続すると考えられることから、当報告では区分しない。機能としては石室上半部石材の裏込めと考える。

下段列石の位置は、奥壁背後付近に分布しており、更に下方に墳丘盛土が続くことから墳丘内に埋設されていたと判断する。平面形は不明瞭であるものの、ほぼ正円形になりそうである。



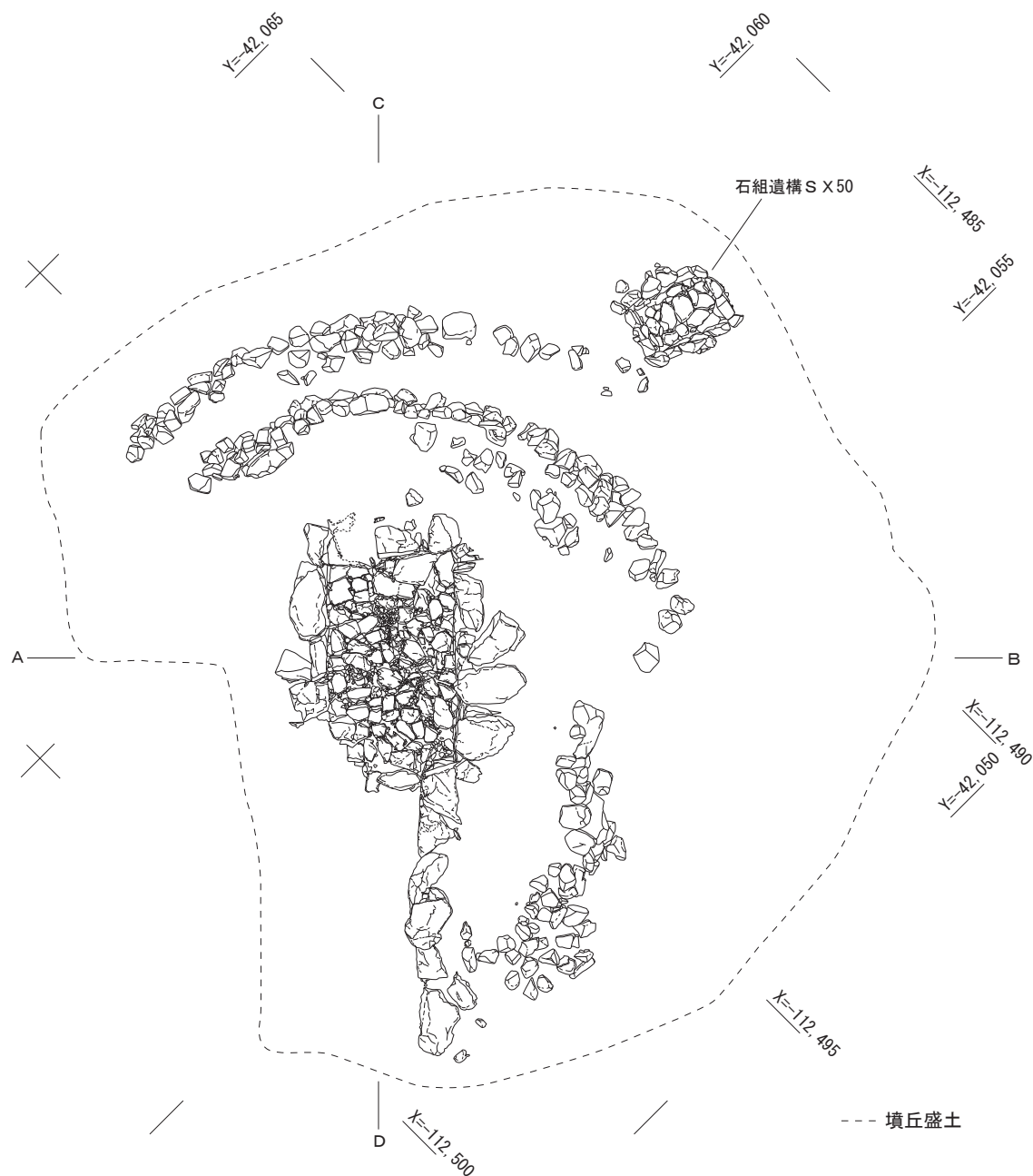
第11図 20号墳墳丘測量図(墳丘内列石検出時)(S = 1/200)

構造を見ると、残存部分では2段分確認できる。傾斜角度は40°ほどで、隙間なく段状に積み上げられていそうなものの、上段と比較して各段の区分が不明瞭であり、傾斜もやや緩やかとなる。機能としては、石室下半部の裏込めのほか、盛土はこの付近でやや水平に整えられることから墳丘下半部の補強・地盤強化の機能も持つと考える。

羨道側列石の位置は、墳丘東・南東側の羨道から袖部付近に分布する。袖部付近の背後の積み方は上段列石と類似する。上段列石との間には石材が欠損しているが、当初から設置されなかったのかは判断できない。玄室付近の上・下段列石と比較して、石材間に土が混入しており、明瞭に段・列をなすように積み上げられておらず、貼り付けているような印象を受ける。また、使用石材自体もやや小形のものが主体である。機能としては、羨道部の石材の裏込めや羨道・開口部側の土留めが考えられる。

6) 墳丘内列石以外の墳丘内の石材

墳丘盛土内には列石以外にも0.15～0.6m大の石材が単独で分布するものが数点認められる。これらの全てに明確な機能があるとは言い難いものの、主に石室石材周辺で確認できることから、小形のものは石室石材設置時の高さ調整や、裏込めの補強的な機能が想定できるほか、小嶋篤氏



第12図 20号墳墳丘石材平面図(1/100)

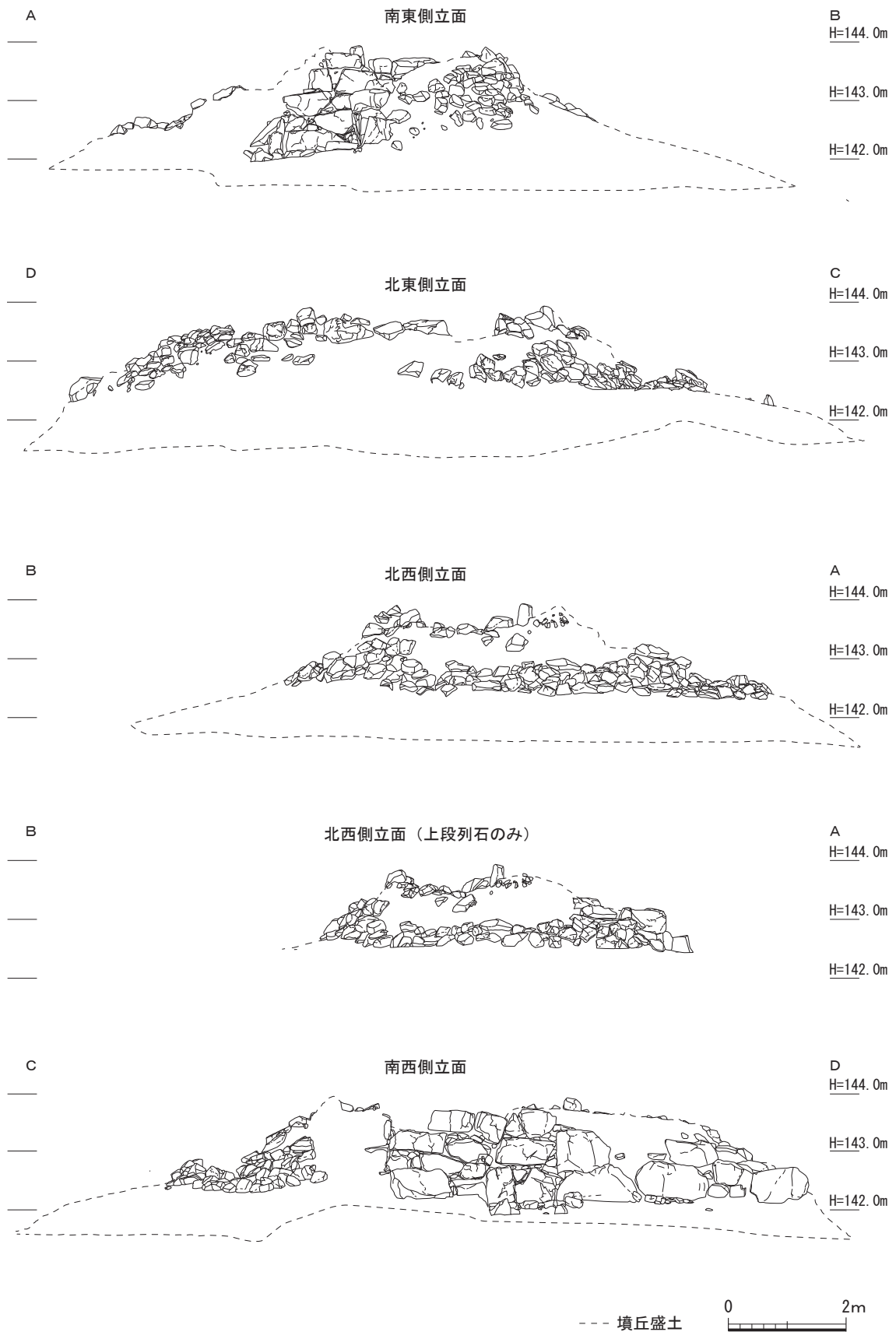
の研究を参考にすると、石室石材や墳丘内列石の候補として搬入されたものの、最終的には使用されずに留め置かれた可能性が考えられる。^(注7)

7) 墳丘盛土内の遺物の出土状況

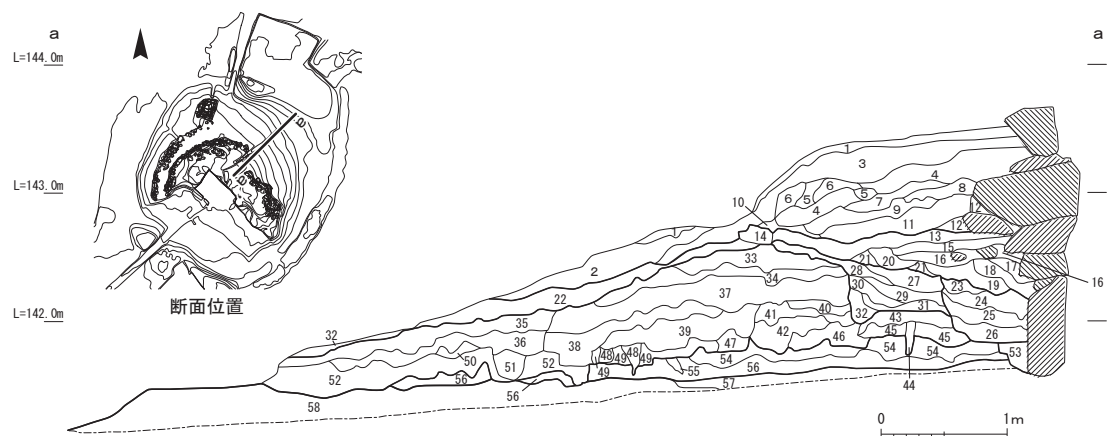
墳丘盛土内からは、古墳時代前期後半から中期前半頃の土師器片が極少量出土した(第41図236～238)。いずれも一部であり、20号墳の築造時期以前のものであることから、混入と考える。周辺の金生寺遺跡や春日部遺跡の調査で同時期の遺構・遺物が確認されており、これらの遺跡近辺から墳丘盛土となる土を調達した可能性がある。

8) 外表施設・周溝について

20号墳南西部裾付近にて、周溝の可能性のある溝状遺構を断面で確認した(第17図)。上部は後



第13図 20号墳墳丘石材立面図(1/100)



1～12：3段目から上部の石室石材の裏込め土

1. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、粘性・締まりなし
2. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂～細粒砂、にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 細粒砂を粒状に極少量含む、やや締まりなし
3. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂～細粒砂、にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 細粒砂を粒状に極少量含む、粘性・締まりなし
4. 黒褐色 (10YR 3/2) 極細粒砂～細粒砂、にぶい黄褐色 (10YR 6/4) 細粒砂をやや多く含む
5. 黒褐色 (10YR 2/2) 細粒砂、粘性・締まりなし
6. 黒褐色 (10YR 2/2) 細粒砂、黄褐色 (10YR 5/6) 細粒砂を斑状に含む、粘性なし・やや締まりあり
7. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、炭化物を極少量含む、粘性なし・やや締まりあり
8. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に多く含む
9. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 細粒砂、粘性なし・やや締まりあり
10. 黒褐色 (10YR 2/2) 細粒砂
11. 黒褐色 (10YR 3/1) 細粒砂、粘性・締まりなし
12. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 7/6) 細粒砂を粒状に極少量含む、粘性・締まりなし

13～22：2・3段目石室石材の裏込め土

13. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 7/6) 細粒砂を粒状に極少量含む、炭化物を少量含む、粘性なし・やや締まりあり
14. 黒褐色 (10YR 2/2) 細粒砂、橙色 (7.5YR 6/6) 細粒砂を斑状に含む、粘性・締まりなし
15. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 7/6) 細粒砂を粒状に少量含む
16. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 細粒砂、炭化物を少量含む
17. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 細粒砂、炭化物ごく少量、明黄褐色 (10YR 7/6) 細粒砂ごく少量、粘性なし・締まりなし
18. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 細粒砂、炭化物ごく少量、明黄褐色 (10YR 7/6) 細粒砂ごく少量、粘性なし・やや締まりあり
19. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に含む、粘性なし・締まりあり
20. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 7/6) 細粒砂を粒～斑状に多く含む
21. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、粘性・締まりなし
22. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、炭化物、にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細粒砂を極少量含む、炭化物含む

23～26：玄室基底石の裏込め土

23. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に少量含む、やや締まりあり
24. 明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂をブロック状に含む、粘性なし・やや締まりあり
25. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に少量含む、炭化物を極少量含む
26. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に少量含む

27～32：石室堀形埋土か

27. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、粘性・締まりなし
28. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に少量含む
29. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、炭化物を極少量含む、粘性・締まりなし
30. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂をやや多く含む
31. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に極少量含む
32. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂に粒状にやや多く含む

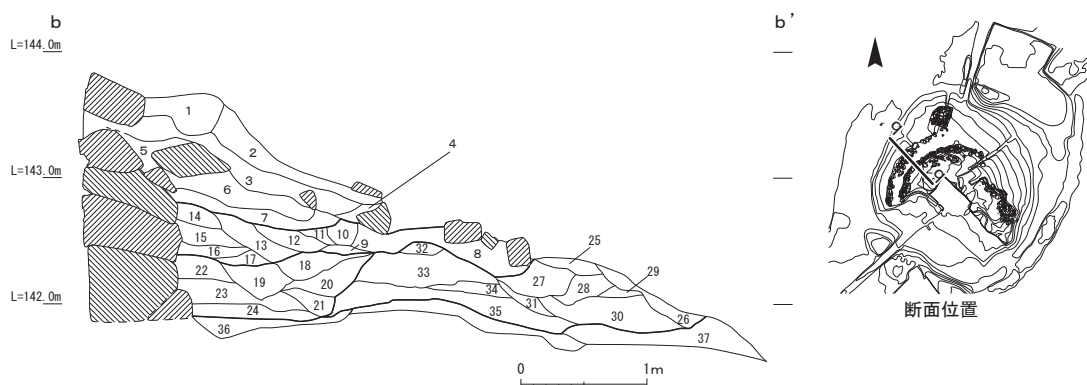
33～52：墳丘下部盛土

33. 明黄褐色 (10YR 6/8) 細粒砂、黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂を斑状に含む、粘性・締まりなし
34. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 細粒砂、粘性・締まりなし
35. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 細粒砂を粒状に極少量含む、粘性・締まりなし
36. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 細粒砂を粒状に少量含む
37. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、粘性なし・わずかに締まりあり
38. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に少量含む
39. 黒褐色 (10YR 3/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂をブロック状に含む、やや締まりあり

第14図 20号墳墳丘北東側断面図 (S = 1/60)

第14図の土層名の続き

40. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、粘性・締まりなし
41. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、橙色 (7.5YR 6/6) 細粒砂を斑状に極少量含む
42. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂をブロック状に含む
43. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、橙色 (7.5YR 6/6) 細粒砂を斑状に極少量含む、炭化物を極少量含む、わずかに締まりあり
44. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、下半部に明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に含む
45. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、橙色 (7.5YR 6/6) 細粒砂を斑状に少量含む
46. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状に含む
47. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂をブロック状に多く含む
48. 黒褐色 (10YR 3/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状に含む
49. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に少量含む
50. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、粘性・締まりなし
51. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂斑状ブロック状に含む
52. 黒褐色 (10YR 3/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に含む、粘性・締まりなし
- 53. 玄室基底石据付け穴埋土**
53. 黒褐色 (10YR 3/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状に含む、粘性なし・やや締まりあり
- 54～56：築造時の整地層**
54. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細粒砂、上半部に黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂を含む
55. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、にぶい橙色 (7.5YR 6/4) 細粒砂を粒状に極少量含む、粘性・締まりなし
56. 明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂、上部に灰黄褐色 (10YR 4/2) 細粒砂を極少量含む、粘性・締まりなし
- 57・58：自然堆積層**
57. 明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂、粘性・締まりなし
58. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細粒砂、径 1～10cm 大の白・灰色の礫を含む

**1～7：3段目から上部の玄室石材の裏込め土（上段列石設置）**

1. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 細粒砂、根を多く含む、粘性・締まりなし
2. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 細粒砂、粘性・締まりなし
3. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 極細粒砂～細粒砂、粘性・締まりなし
4. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 細粒砂、粘性・締まりなし
5. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、粘性・締まりなし
6. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、粘性なし・やや締まりあり
7. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、炭化物ごく少量含む、粘性・締まりなし

8～17：2・3段目の玄室石材の裏込め土（下段列石設置）

8. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、黄褐色 (10YR 5/6) 細粒砂を粒状に極少量含む
9. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、黄褐色 (10YR 5/6) 細粒砂を粒状に少量含む
10. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 極細粒砂～細粒砂、黄褐色 (10YR 5/6) 細粒砂を粒状に極少量含む
11. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、黄褐色 (10YR 5/6) 細粒砂を粒状に極少量含む
12. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、粘性なし・やや締まりあり
13. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状に含む、粘性・締まりなし
14. 黒褐色 (10YR 3/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状に含む、粘性なし・やや締まりあり
15. 黒褐色 (10YR 3/1) 細粒砂、締まりあり
16. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、粘性なし・締まりあり
17. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、褐色 (10YR 4/4) 細粒砂を粒状に含む、粘性なし・やや締まりあり

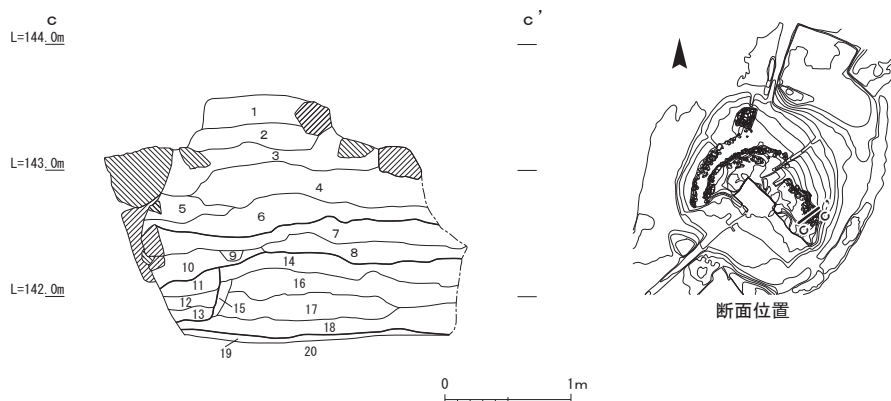
18～24：玄室基底石の裏込め土

18. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に少量含む、炭化物を極少量含む、やや締まりあり
19. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に少量含む、やや締まりあり
20. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に少量含む、やや締まりあり
21. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に極少量含む、

第15図 20号墳丘北西側断面図 (S = 1/60)

第15図の土層名の続き

22. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状に多く含む、やや締まりあり
23. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂の粒状にやや多く含む、締まりあり
24. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、炭化物少量、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂粒～斑状、粘性なし・締まりあり
- 25～31：墳丘下部盛土か**
25. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、粘性・締まりなし
26. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状に少量含む、粘性・締まりなし
27. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、炭化物を極少量含む、締まりあり
28. 明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂、径2～4cm大の白い石を極少量含む、粘性なし・締まりあり
29. 明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂、径3～5cm大の白い石を含む、粘性なし・締まりあり
30. 明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂、黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂を粒状に極少量含む、径2～10cm大の白・灰色の石含む、粘性なし・締まりあり
31. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、粘性なし・締まりあり
- 32～35：墳丘下部盛土**
32. 黒褐色 (10YR 2/2) 細粒砂、やや締まりあり
33. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、やや締まりあり
34. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂
35. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状に含む、粘性なし・やや締まりあり
- 36：玄室基底石据付け穴埋土**
36. 明黄褐色 (10YR 7/6) 細粒砂、径5～20cm大の角礫を含む、粘性・締まりなし
- 37：築造時の整地層**
37. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細粒砂を斑状に含む、径1～10cm大の白・灰色の礫を含む、締まりあり



1～6：2段目から上部の石室石材裏込め土（羨道側列石設置）

1. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 細粒砂、粘性・締まりなし
2. 暗褐色 (10YR 3/3) 細粒砂、粘性・締まりなし
3. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、粘性・締まりなし
4. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に少量含む
5. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 細粒砂を極少量含む、粘性・締まりなし
6. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に極少量含む、粘性・締まりなし

7～10：2段目石室石材の裏込め土

7. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、黄褐色 (10YR 5/6) 細粒砂を粒状に極少量含む
8. 明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂、粘性・締まりなし
9. 黒色 (10YR 2/1) 細粒砂、黄褐色 (10YR 5/6) 細粒砂のブロックを含む、やや締まりあり
10. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂

11～13：石室堀形埋土 or 羨道部床面整地層か

11. 黒褐色 (7.5YR 2/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に含む、粘性・締まりなし
12. 黒褐色 (7.5YR 2/2) 細粒砂
13. 黒褐色 (7.5YR 2/2) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に極少量含む

14～18：墳丘下部盛土

14. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状に含む、粘性・締まりなし
15. 黒褐色 (7.5YR 3/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を粒状に極少量含む、締まりなし
16. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂
17. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状に少量含む
18. 黒色 (7.5YR 2/1) 細粒砂、明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂を斑状にやや多く含む

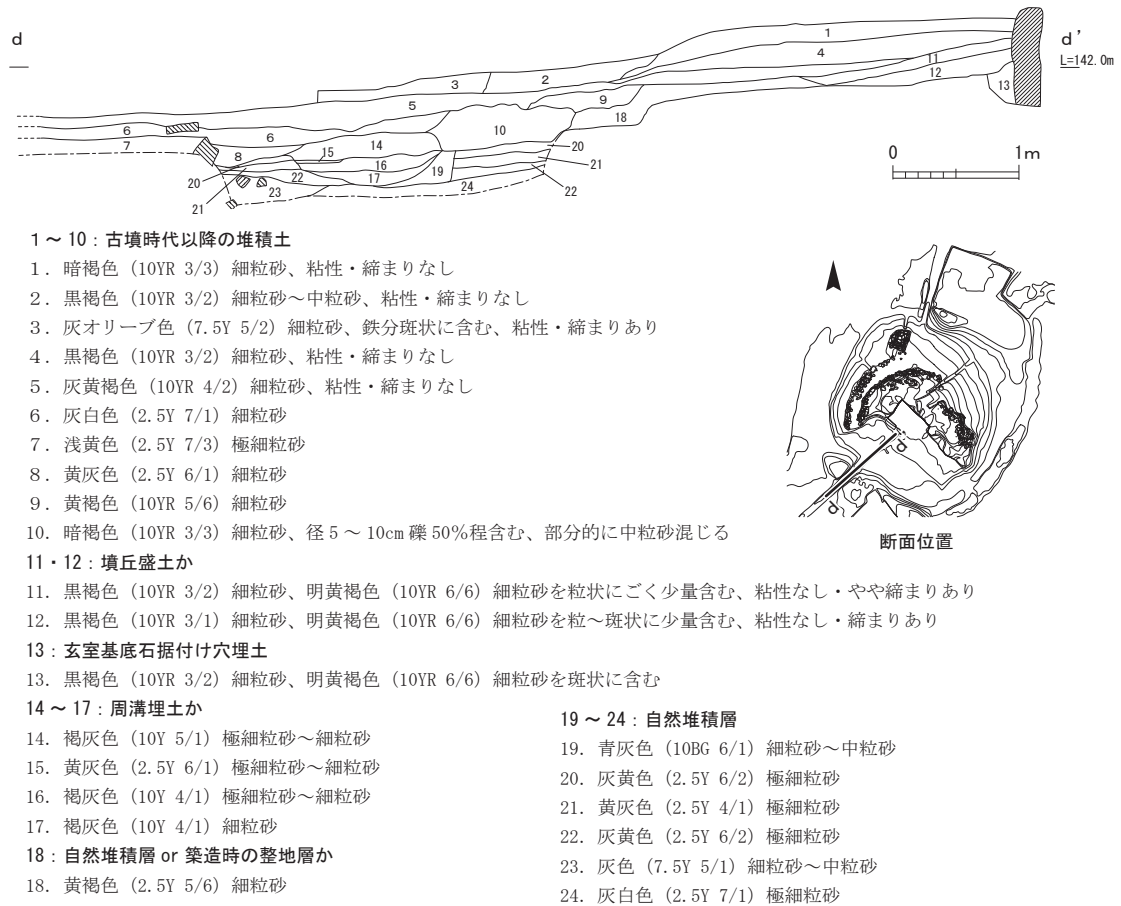
19：築造時の整地層

19. 明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂、やや粘性・締まりあり

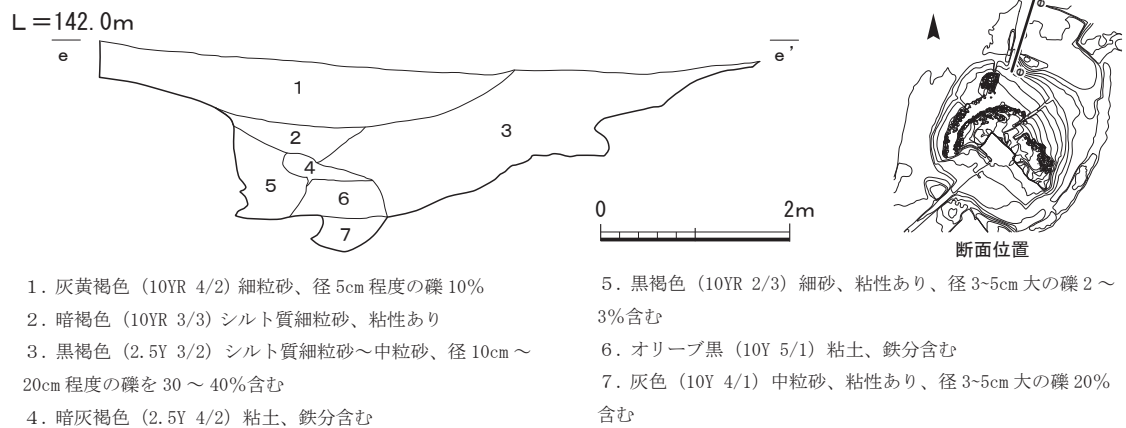
20：自然堆積層

20. 明黄褐色 (10YR 6/6) 細粒砂、径1～3cm大の礫を少量含む、わずかに粘性あり・やや締まりあり

第16図 20号墳羨道部付近墳丘断面図 (S = 1/60)



第17図 20号墳南西部墳丘及び周溝断面（S = 1/60）



第18図 墳丘北側断ち割り断面図（S = 1/80）

世の削平・攪乱を受けており不明瞭であるが、幅約1.3m、同深さ0.4mを測る。断面は半円形状となる。全周するか否かの確認の為、墳丘北側にて断ち割りを行った(第18図)が、周溝は確認できず、幅約5.7m、深さ約2.0mの谷状に落ち込み、土石流などが堆積する。埋土からは土師器・須恵器の細片が数点出土したのみであり、形成時期は不明である。また、南西部の周溝確認部分より南側についても、東に向かって谷状に落ち込む。不明瞭な部分も多いものの、部分的な周溝の可能性があり、全周する痕跡は確認できない。周溝内からの出土遺物には、20号墳の玄室床面出土土器と同時期の須恵器類が複数含まれるものの、周溝埋土掘削中に底部から浮いた状態で出

土しており、後世の削平・改変時に石室内から掻き出されたものと考えられる。なお、段築・葺石・埴輪等は確認できない。

9) 墳丘規模について

以上の成果から20号墳の墳丘規模についてまとめると、墳丘残存部から、墳形は円墳で、復元される墳丘規模は、およそ直径13mである。墳丘の高さは築造時の整地層底部から残存する石室石材最上段までで約2.5mを測る。

5. 20号墳埋葬施設の調査

南東方向に開口する両袖式横穴式石室1基を確認した。横穴式石室は、調査時の時点で半壊状態であり、特に右側壁は玄室奥壁付近の基底石2石を残して全て失われていた。その為、構造的に不安定と予想され、崩落防止と調査の安全対策の為に石室上部石材を石室床面到達以前に先行して取り外した。この中には、後世の改変等により、石室構築時に設置された位置から動いている可能性のあるものや、既に割れているものもあり、これらは石室の断面図には反映していない。掲載している石室実測図(第19図)は、先行して取り外した石材と床面到達時の石材を合成した。

1) 横穴式石室の構築状況

石室は全長(残存)約7.3m、玄室長約3.1m、同幅(残存)約1.9m、同高(残存)約2.1m、羨道長(残存)約4.2m、同幅(残存)約0.9m、同高約1.0mを測る。

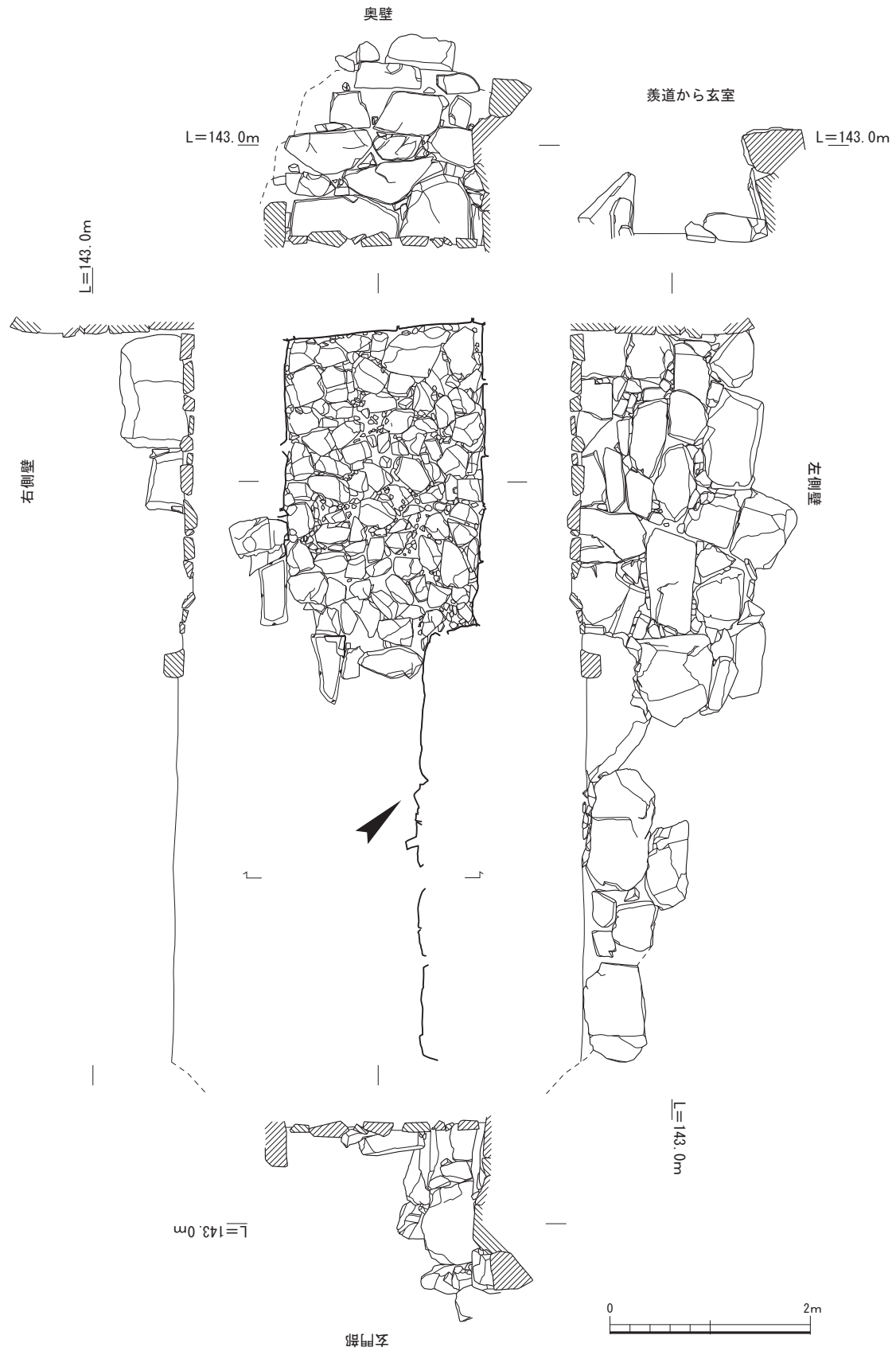
右袖部の石材は失われているものの、石材抜き取り痕と抜き取り痕の中に僅かに残る石材の断片から、両袖式と判断した。玄室平面形は、奥壁右側が僅かに内側に入っていることから歪んでおり、当初からのものか土圧の影響か判別できない。開口部付近も削平により欠損している。石室石材の残存状況は、玄室奥壁が6段、玄室左側壁が5段、同右側壁が基底石2石、左袖部が3段、羨道左側壁が2段ほど残存する。

石室主軸は北から約47°西に振り、南東方向に開口する。法貴峠古墳群の確認できる6基の古墳が、同様に南東方向に開口している。

石室の壁面構成を概観する。玄室は比較的残りの良い奥壁・左側壁を見ると、明確な目地は通らず、大形の石材の間を小形の石材を充填して調整しているものの、石材間に土が露出する部分が複数認められる。石材の設置状況を見ると、横方向に設置されているものが多く、基底石や4段目以上の石材で縦方向に設置されているものも認められる。左袖部は3段の石材が残存する。玄室の石材よりも大きな石材が使用され、段数等が袖部と玄室では連続しない。羨道部分は基底部と2段目の石材が1石のみの残存ではあるが、玄室よりも大きな石材が使用され、袖部と段数・目地が共通する可能性がある。

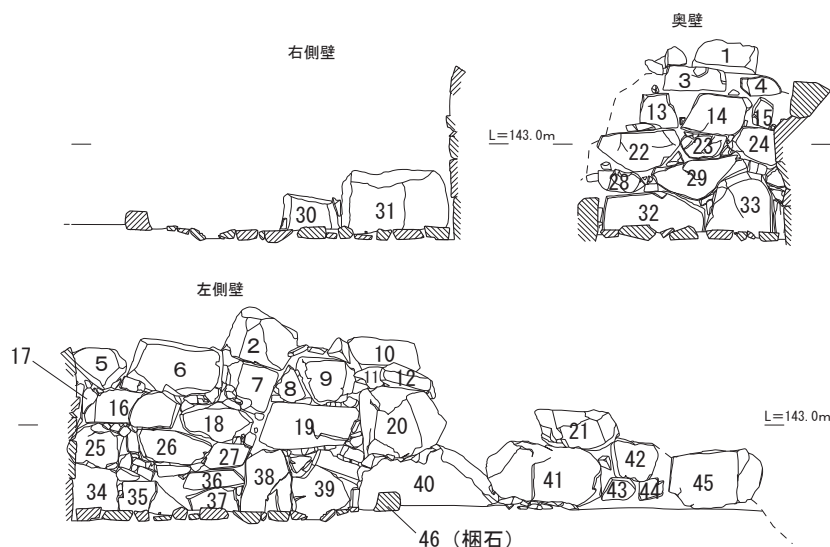
各石室石材の裏側の状況は、断面や解体時に観察できたものでは、上下の石材との設置面が不安定な石材も散見された。このため、各石室石材を設置する際には、間に裏込めの土の他に小形の石材を設置し、石材の設置位置や面の向きの調整を行ったものと確認できる。

玄室床面には角礫と小円礫で構成される敷石が施される。角礫の大きさは0.1~0.8mを測る。



第19図 20号墳横穴式石室実測図(1/60)

小円礫は角礫の間に充填するように配置されており、特に固定されている訳ではなく、触ったら容易に移動できる状態であった。玄室と羨道の床面の標高は142.1m付近を測る。敷石は、床面の形成以外にも、古墳築造時に、石室基底石設置の際の固定・補強の機能も担うと考える。



第20図 横穴式石室石材番号割り当て図

玄門部床面には梱石が設置され、玄室・羨道床面よりも0.2m突出する。

石室断面形については、残存部では顕著な持ち送りは認められない。他に、袖部が段積みであること、礫で閉塞していることなどから畿内型(系)石室の影響を受ける石室と考える。

2) 横穴式石室の石材

石室解体にあたっては、クレーン仕様のバックホウで石室石材を吊り上げて除去した。個々の石材を吊り上げた際に、バックホウの荷重計に大まかな数値が表示されており、計測可能な石材については表示された数値を記録した(第20図、附表2)。なお、既に亀裂が入って破損している石材、または吊り上げた際に破損しそうな石材については計測していない。

最大の重量は奥壁基底石(32番)の1,400kgである。1,000kgを超える石材は奥壁・玄室左側壁最上段(残存)・袖部・羨道の基底石の一部、袖部2段目に認められ、特に袖部付近にやや集中する。配置を見ると、大きく重い石材の間に小さい石材が設置される。最下段の基底石も大形の石材ばかりではなく、700kg以上の石材の間に500kg以下の小形の石材が設置される。また、上段であっ

附表2 石室石材重量計測表

番号	重さ	番号	重さ	番号	重さ	番号	重さ	番号	重さ	番号	重さ
1	500	9	500	17	60	25	300	33	700	41	1,100
2	1,000	10	400	18	400	26	70	34	800	42	200
3	×	11	×	19	800	27	100	35	400	43	80
4	100	12	400	20	1,200	28	200	36	90	44	60
5	800	13	200	21	400	29	400	37	150	45	400
6	1,100	14	400	22	300	30	200	38	900	46 (梱石)	60
7	600	15	40	23	100	31	800	39	1,200		
8	×	16	500	24	500	32	1,400	40	1,200		

重さの単位: kg ×は測定不能

ても下段の石材より重い1,000kgを超える石材が2石ある。

石室石材と床面の敷石には砂岩の自然石が使用されている。これらの石材は周辺の丹波帯に分布しており、調査地周辺の丘陵から採取したと考える。

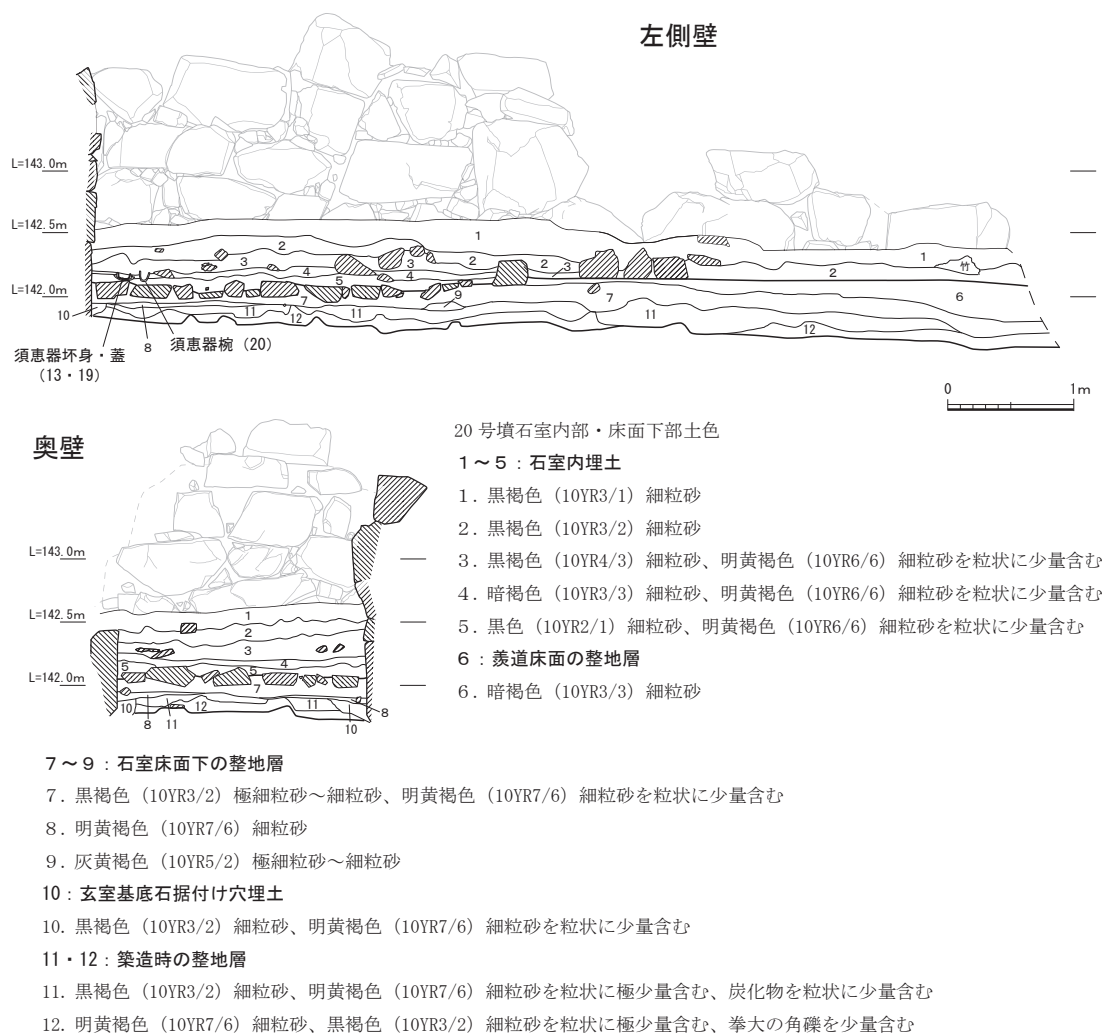
3) 横穴式石室内埋土

石室内の埋土は5層に区分した(第21図)。床面付近までの埋土中には、古墳時代～近世までの鉄釘や土師器・須恵器片等が含まれており、後世に複数回石室内に侵入されたかあるいは再利用された可能性がある。また、1・2層の標高142.4m付近で再利用時のものと考えられる鉄釘を複数確認した。並んで出土していないので、再利用後に更に改変されたと考えられる。3～5層は近似する。古墳時代の遺物は3層以下から多く出土するが、角礫も多く混入する。1層から上部には角礫を含む表土が場所により0.5～1.0m堆積する。

4) 横穴式石室内床面の状況

床面付近から須恵器、鉄製品、玉類、耳環などが出土した(第22・23図)。

奥壁付近と左袖部付近出土の須恵器は埋葬・追葬時の状態を留めている可能性がある。奥壁中央付近では、床面直上で杯身(13)の中に蓋(19)が逆さ状態で重ねられており、その南側に碗(20)



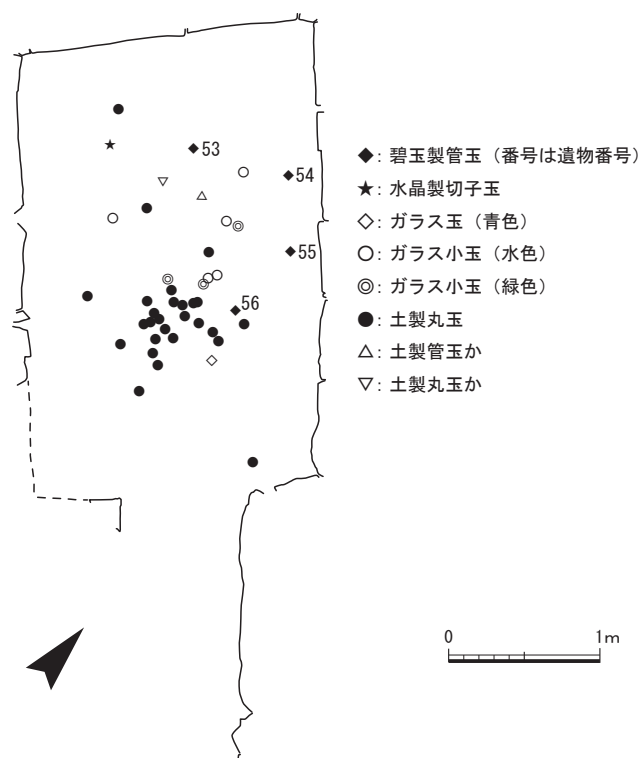
第21図 横穴式石室内畦断面図(S = 1/60)

が置かれているような状況で出土した。追葬時の片付けの際に設置されたと考える。さらに中央寄りには、同じく床面直上で逆さ状態の杯身(11)と、破損した杯蓋(3)が出土した。左袖部付近では、有蓋高杯2点・同蓋2点・杯蓋3点・杯身1点が出土した。特に、有蓋高杯2点は僅かに斜めに傾くが、置かれた状態を保っていた。有蓋高杯とセット関係になる蓋(15・16)は逆さ状態で周辺に散乱していた。また、有蓋高杯に近接した杯蓋・身(7・10)は、杯蓋(7)を取り上げた後に、その下から杯身(10)が逆さ状態で出土した。右側壁際では、杯蓋(6・8)と杯身(12)が横方向に落ち込むように出土したことから、これらは木棺の上に置かれていたものが、棺の腐敗に伴って落ち込んだ可能性が考えられる。そのほかに杯蓋(1・4・9)と有蓋高杯蓋(14)があり、1・2の杯蓋以外は逆さ状態で出土した。また、1・9は床面よりやや浮いて出土した。

鉄製品は玄室中央から奥壁付近に点在しており、いずれも床面付近から出土している。奥壁と右側壁付近では、37の長頸鏃を取り上げた下からほぼ同じ位置で40の長頸鏃が出土した。床面付近で鉄釘(46)が1点出土している。上層の1・2層で出土したものと類似しており、古墳時代以降のものの可能性がある。耳環は1点のみであり、床面から0.1mほど浮いた状況で出土した。

玉類は、出土位置が記録できたもの(第22図)は、石室中央付近に集中して出土しているものの、碧玉製管玉・水晶製切子玉も含めて床面からは浮いた状態で3層目以下から出土しており、原位置は留めない。

遺物以外では、棺台の可能性のある角礫が、上部に面を揃えて設置されていた。南東側の石材は動いているものの、棺台の設置状況等から、棺は少なくとも2基が玄室主軸に平行に設置されていた可能性が高い。



第22図 横穴式石室玄室内玉類出土位置図

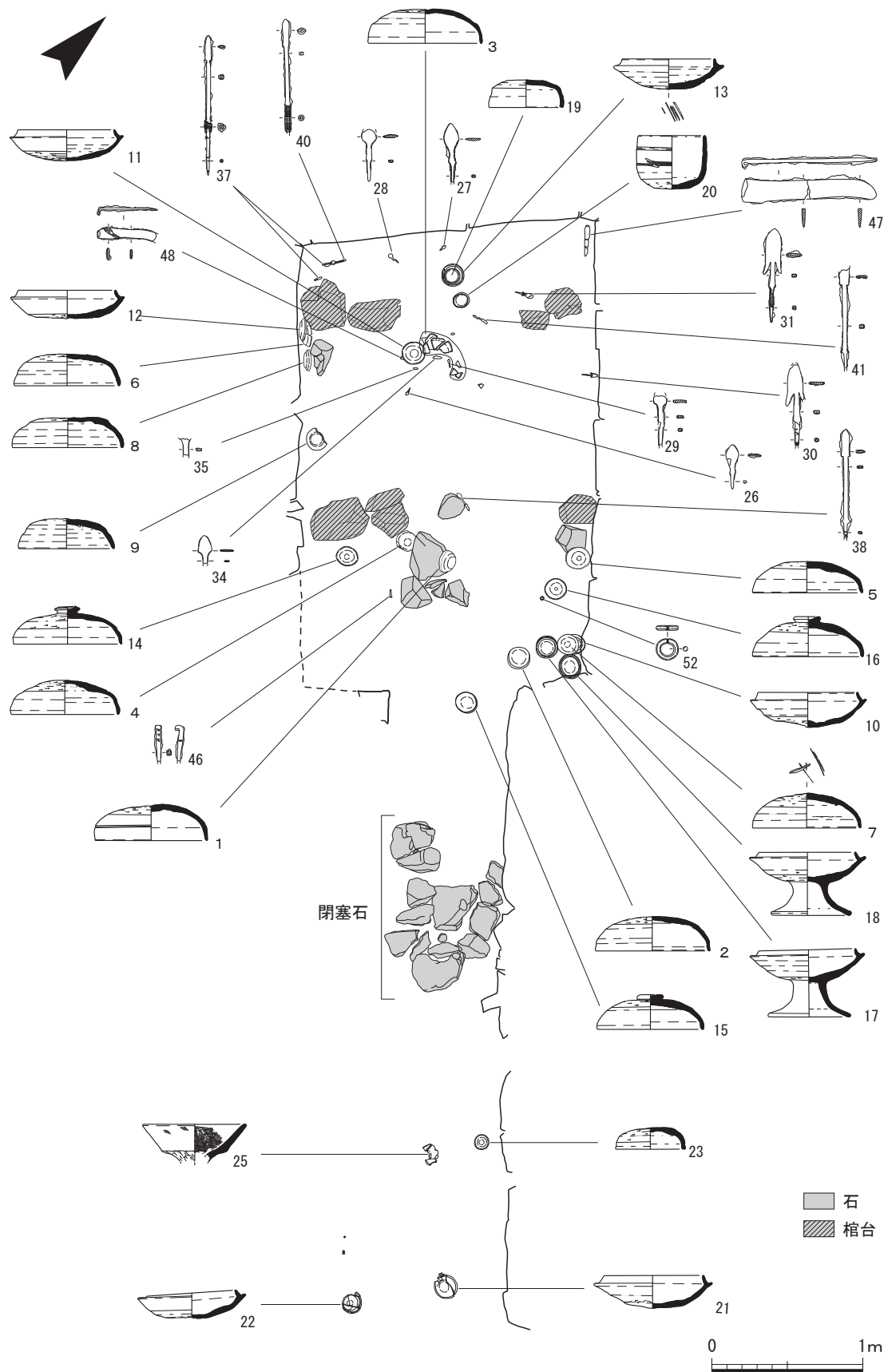
羨道床面では開口部付近で残存状況の良い土師器・須恵器が4点出土しているものの、後世の侵入により玄室内から移動されたのか、当初から羨道付近に置かれていたのかは判別できない。

5) 横穴式石室の閉塞状況

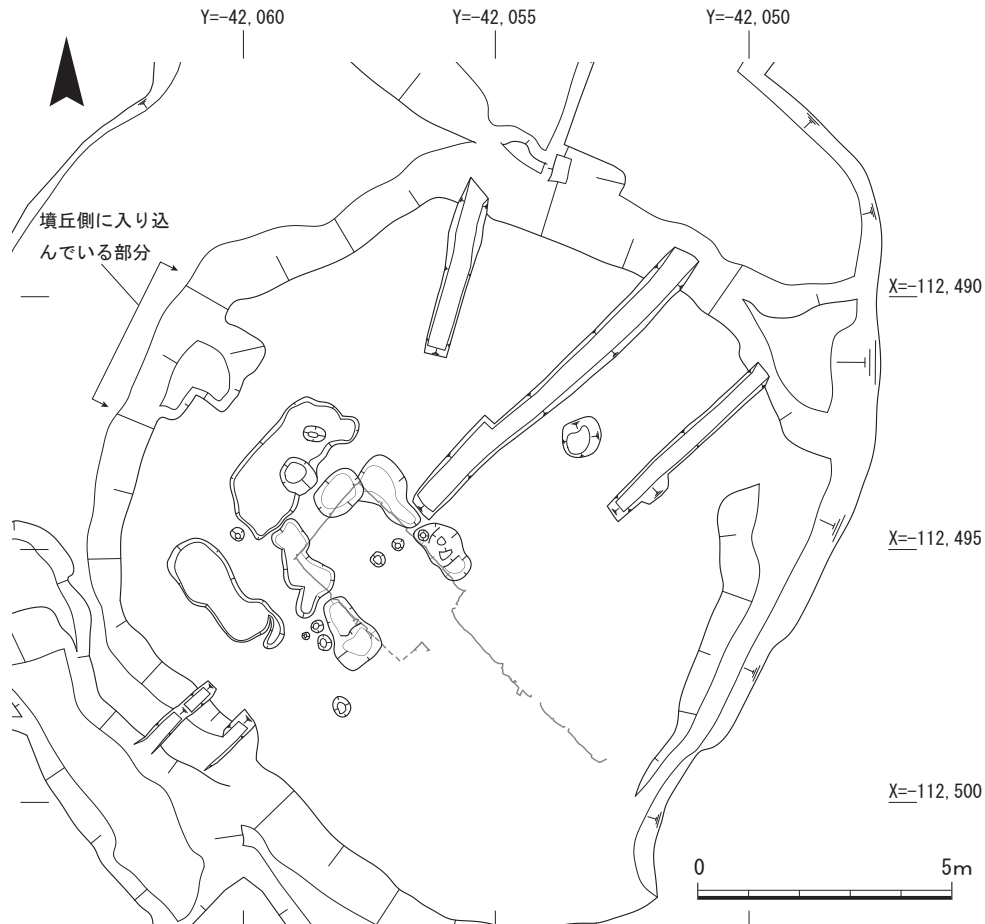
玄門部下の梱石より約1.0m開口部側の羨道床面には0.2～0.3m大の角礫が13点散乱しており、閉塞石の可能性がある。石種は砂岩である。

6) 横穴式石室下部構造

敷石の下部には整地層が数層堆積し、その下部にて自然堆積層を確認した。最下部の整地層は古墳築造開始時に施された整地層であり、この層を掘り込んで基底石据付け穴に基底石が設置される。そ



第23図 横穴式石室床面遺物及び石材出土位置図(S = 1/40)



第24図 横穴式石室基底石据付け穴検出状況平面図 (S = 1/150)

の後、玄室内では基底石据付け穴を覆うように別の整地層を施し、その上部に床面敷石を設置する。羨道部では、玄室とやや異なる整地層を施し、その上に暗褐色細粒砂土で床面を形成する。

石室解体後に玄室・玄門部の基底石据付け穴を平面で確認した。据付け穴は各基底石設置時に個別に掘削されたと考える。深さは断面位置で0.3m程度を測る。なお、排水溝及び排水施設などは確認できない。そのほかに、奥壁の基底石据付け穴の背後は自然堆積層が他の部分よりも約1m×2m程墳丘側に入り込んでいる状況を確認した。墳丘断面でもこの付近のみ周辺と異なる盛土(第15図25～31層)が確認でき、構築時の石材・部材等の搬入路の一部等の可能性がある。

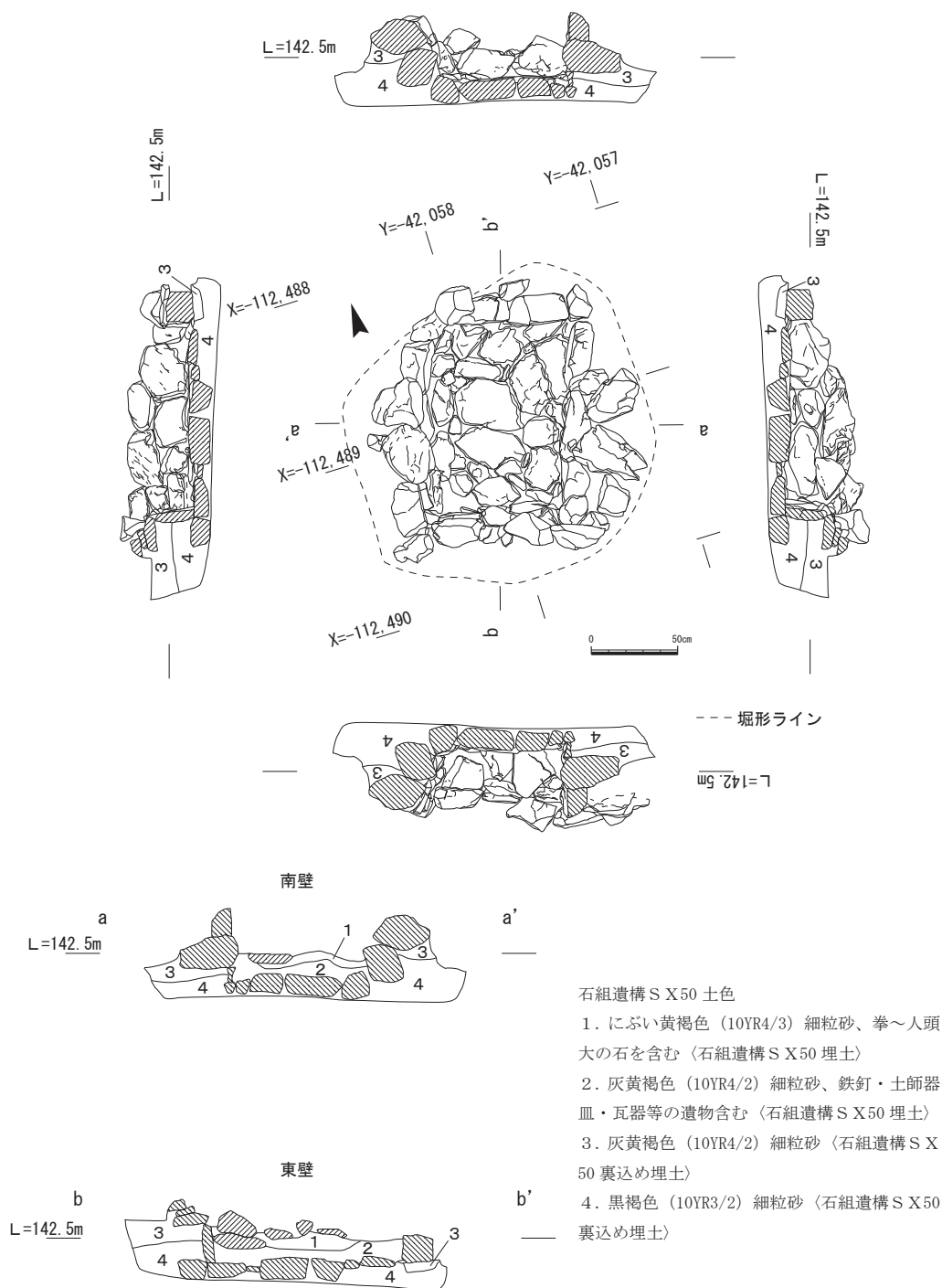
以上の成果を基に、まとめて20号墳の構築状況の復元と被葬者についての検討を行う。

6. 石組遺構及びB地区の調査

1) 石組遺構S X 50の調査

20号墳の調査前の墳丘測量図作成段階で、墳丘北側の標高約142.5m付近に南北約2m、東西約4mの平坦面が確認出来た。表土直下で古墳時代前期後半～近世の遺物を含む角礫の集積を確認した段階で、角礫を除去している最中に墳丘を掘削して築造された石組遺構を1基検出した。

平面形は南北に長い長方形であり、石組の内法で長軸約1.2m・短軸約0.8mを測る(第25図)。主軸は北に対して約18度東に振る。



第25図 石組遺構 S X50実測図 (S = 1/40)

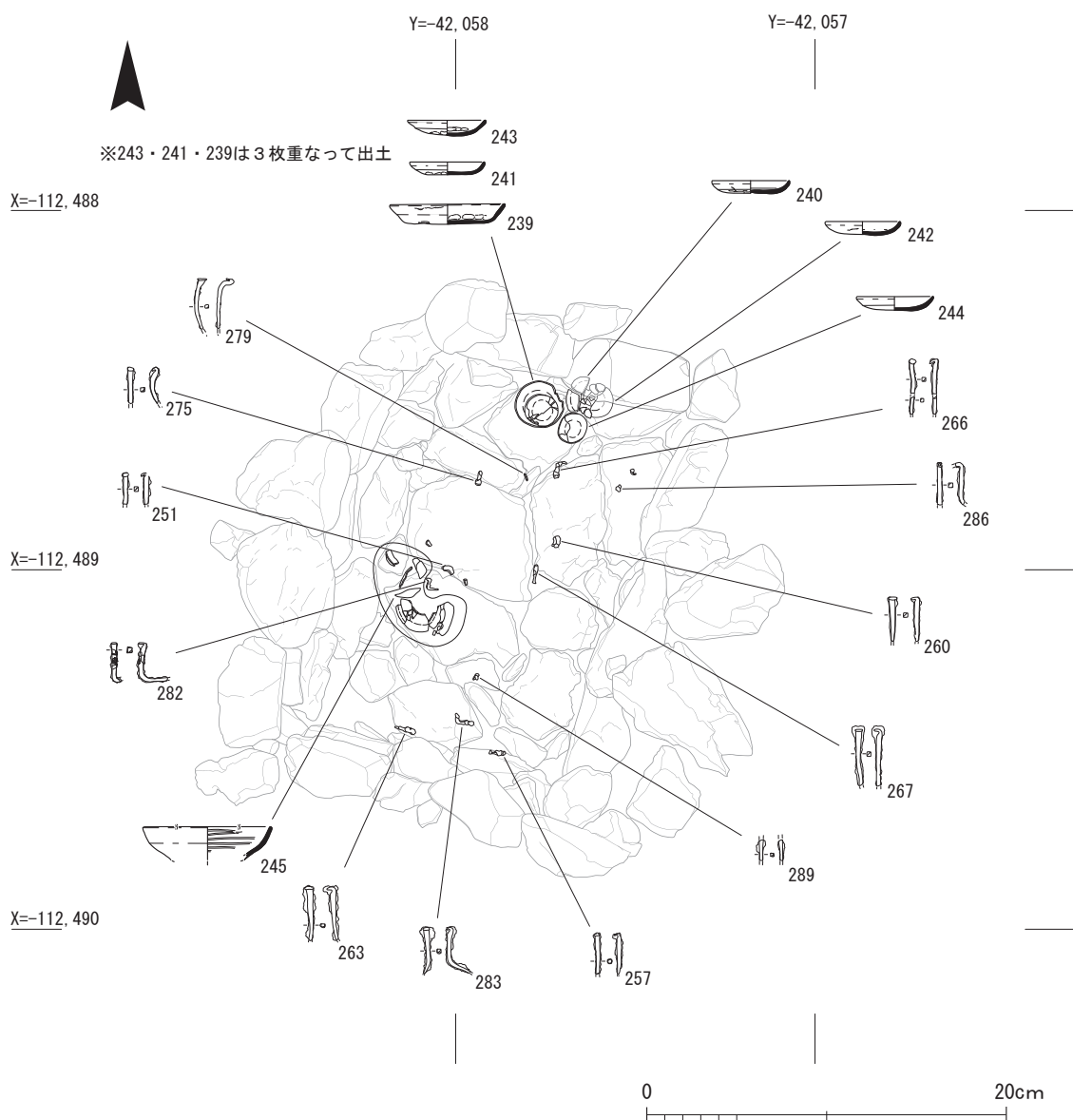
石組は約2段分残存する他、床面にも敷石が施される。検出時に近似する大きさの石材が散乱しており、本来は更に上段が存在したと想定する。石組の構造は、底部の敷石の上に最下段の石材が置かれ、その上部に2段目以降の石材を設置し裏込めの土を充填する。石材は南側の最下段に縦方向に設置したものが認められるものの、基本的には横方向に設置する。

石組の裏込め埋土は2層に区分できた。下層は墳丘盛土と近似する黒褐色細粒砂土であり、上層に石組の裏込め土となる灰黄褐色細粒砂土を設置する。石組内の埋土は2層に区分でき、いずれの層からも鉄釘が複数点出土した(第26図)。

石組遺構 S X50の構築過程を復元すると次のようになる。①20号墳の墳丘を掘削し平坦面を作る。②掘形を掘削する。③掘形底部に敷石を施す。④敷石の上に1段目の石材を設置する。⑤一段形成する毎に石材の裏に裏込めの土を設置する。

石組遺構 S X50に使用される石材の石種は砂岩が多く、チャートが少量確認できる。これらの石材は20号墳の墳丘内列石に使用されている石材と法量・種類ともに類似しており、墳丘内列石の石材を転用した可能性が高い。このことから、石組遺構 S X50の築造時には既に20号墳は墳丘内列石が露出するほどに崩壊しており、石室石材も持ち出されていたと考える。

石組内掘削中には鉄釘、土師器片、床面付近から鉄釘、完形の土師器皿、瓦器碗が出土した。土師器皿は北壁際で6枚が集中して出土した。大きさが2種類あり、243・241・239は3枚重なるように検出した。瓦器碗1点は伏せて設置されていた。鉄釘は並んでいる状況は確認できず、平面・出土レベルともに散在する状況が認められる。鉄釘の頭の数39点あるものの、鉄釘を使



第26図 石組遺構 S X50遺物出土状況図 (S = 1/20)

用したどのような構造物が存在したのかは不明である。

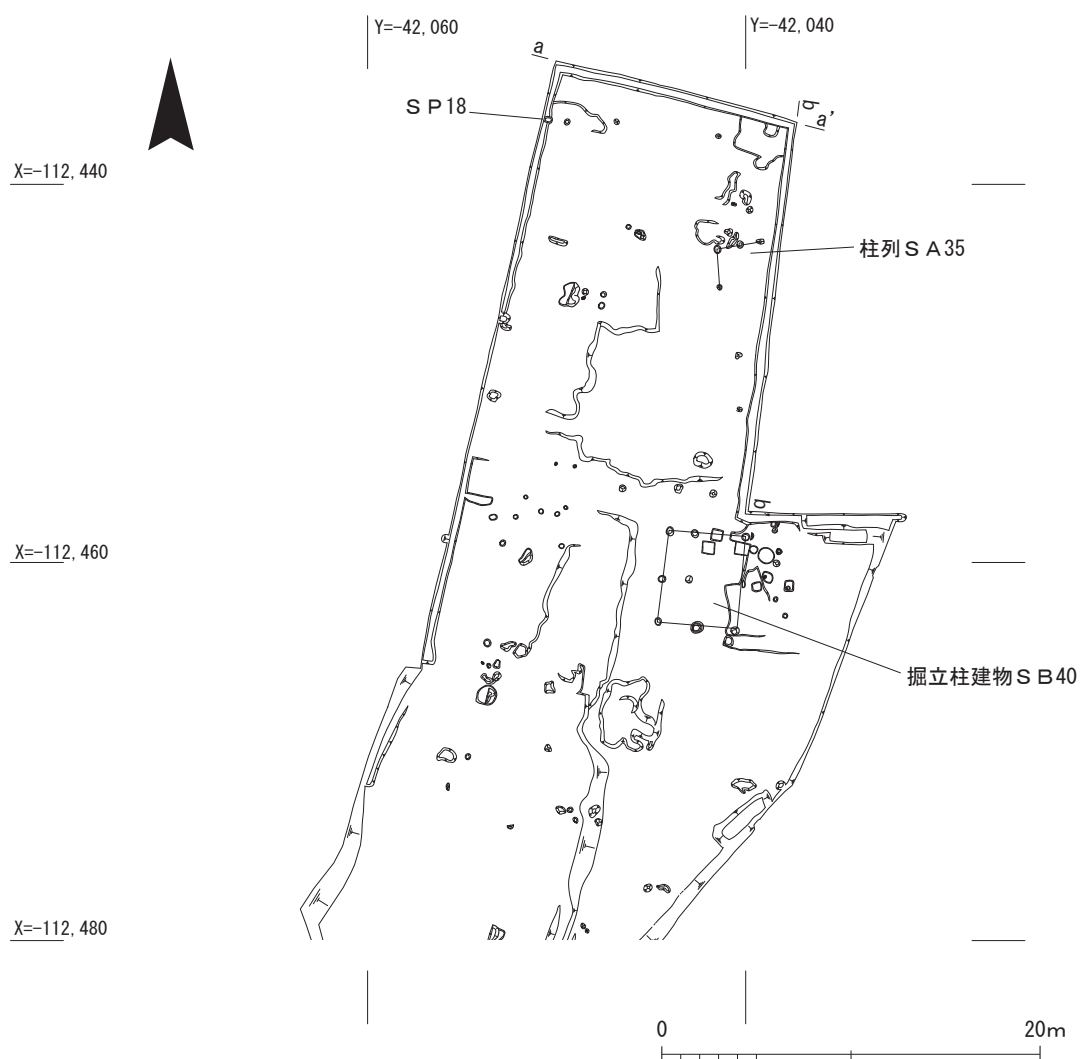
石組遺構 S X50は、出土遺物から13世紀前半の築造であり、遺物の出土状況等から墓の可能性が高い。

2) B地区の調査

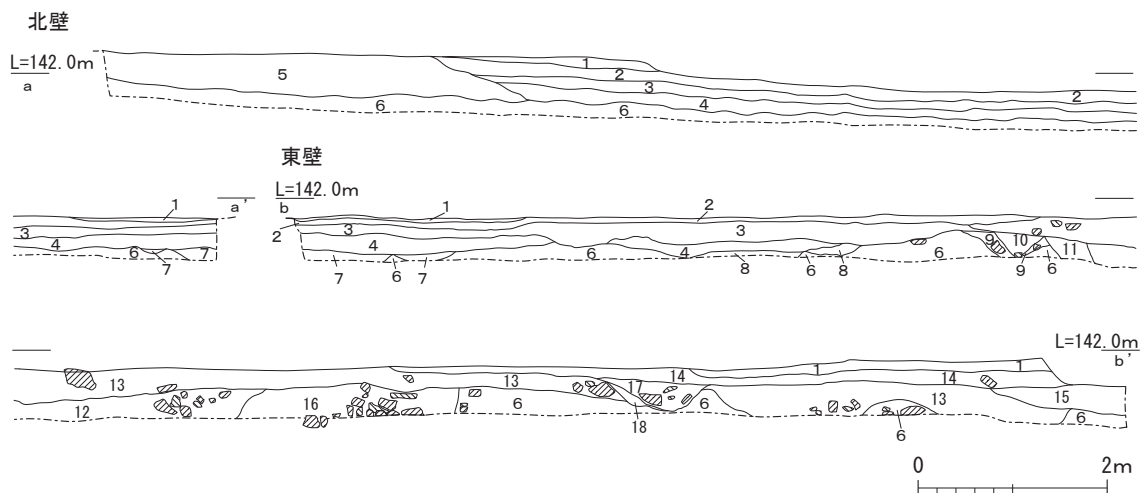
(1) 基本層序

20号墳北側の、標高約141.5m付近にて遺構面を確認した。表土、旧耕作土、土石流等の下に遺構面が分布し、更に下層には土石流等で構成される層が分布する。西側の丘陵からの土石流堆積が複数確認でき、土石流間の安定面上に遺構が分布する。全体的に遺構の深さは浅く、著しい削平を受けていると考えられる。精査時には、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器等の細片が遺物箱1箱分出土した。遺構面上では柱列、掘立柱建物、土坑・ピット等を20基前後確認した(第27図)。また、20号墳南側では、表土と旧耕作土の下の標高141.3m付近で自然堆積層を確認したが、遺構は確認できない。

(2) 検出遺構

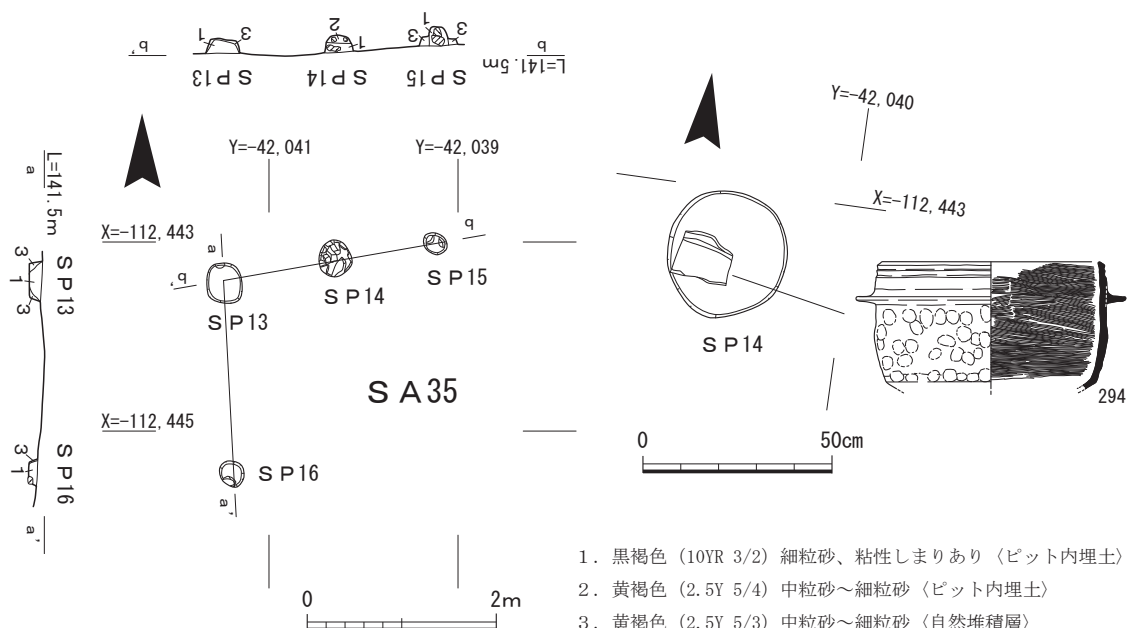


第27図 B地区検出遺構図



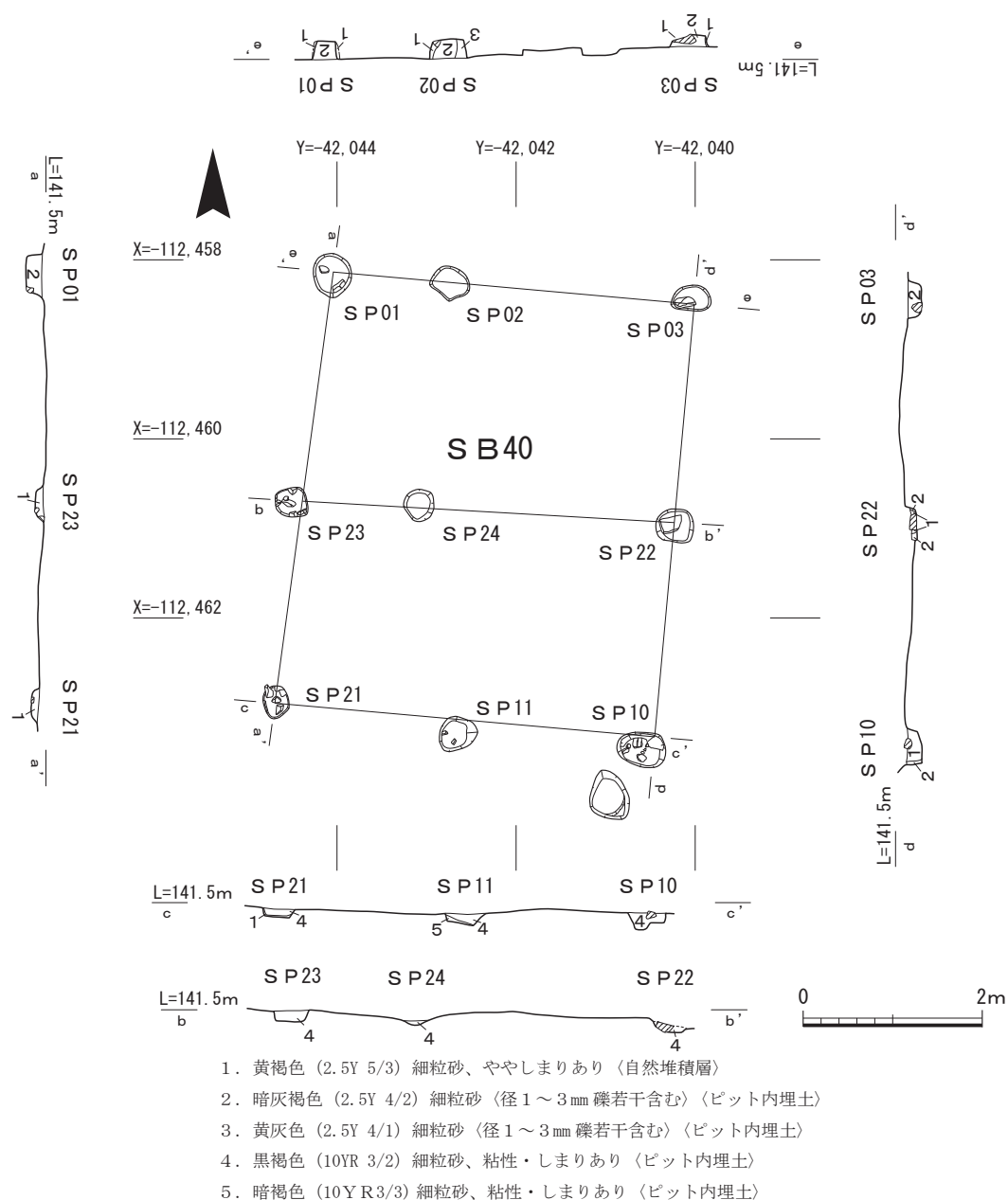
- | | |
|---|---|
| 1. 暗灰黄色 (2.5Y 4/12) 細粒砂 | 礫 70%程、径 10～20cm 礫 15%程含む) |
| 2. 黄灰色 (2.5Y 4/1) 細粒砂 (鉄若干量含む) | 13. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 細粒砂 (径 3～5cm 礫 20%程含む) |
| 3. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂 (径 3～5cm 礫 20%含む) | 14. 褐色 (10YR 4/4) 細粒砂、マンガン含む (径 1～3cm 礫 5%程含む) |
| 4. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 細粒砂 | 15. 灰黄褐色 (10YR 5/2) 細粒砂、マンガン含む (径 3～10cm 礫 20～30%含む) |
| 5. 褐色 (10YR 4/4) 細粒砂 (径 10～20cm 礫 80%含む) | 16. 黒褐色 (10YR 2/3) 細粒砂、粘性あり (径 10～30cm 礫 30%含む) |
| 6. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 細粒砂 | 17. 黒褐色 (10YR 2/2) 細粒砂、粘性あり やや締まりなし (径 10～20cm 礫 50%含む) |
| 7. 黒褐色 (7.5YR 3/2) 細粒砂、やや粘質性あり | 18. 黒褐色 (10YR 2/2) 中粒砂～細粒砂 |
| 8. 黒褐色 (7.5YR 3/2) 細粒砂 やや粘性あり | |
| 9. 暗褐色 (10YR 3/3) 細粒砂 (径 5～15cm 礫 20～30%含む) | |
| 10. 暗褐色 (7.5YR 3/3) 細粒砂 (径 3～5cm 礫 10%程含む) | |
| 11. 暗褐色 (10YR 3/3) 中粒砂～細粒砂 (径 5～15cm 礫 50%含む) | |
| 12. オリーブ褐色 (2.5Y 4/13) 中粒砂～細粒砂 (径 1～3cm | |

第28図 B地区北壁・東壁断面図



第29図 柱列 S A 35平・断面図及び土器埋納柱穴 S P 14検出状況図

1. 黒褐色 (10YR 3/2) 細粒砂、粘性しまりあり (ピット内埋土)
2. 黄褐色 (2.5Y 5/4) 中粒砂～細粒砂 (ピット内埋土)
3. 黄褐色 (2.5Y 5/3) 中粒砂～細粒砂 (自然堆積層)



第30図 掘立柱建物 S B 40 平・断面図

柱列 S A 35 (第29図) 調査地北部で部分的に確認した。北辺と西辺で柱穴となりうるピットを 4 基確認しているが、明確な柱痕は確認できない。また、ピットの間隔は 1～2.1m と一定ではない。ピットの平面形は円形で、径 0.25～0.35m、深さは 0.1～0.2m を測る。北辺中央の S P 14 からは、瓦質羽釜 (294) の破片が出土した。この瓦質羽釜の時期は 15 世紀末～16 世紀初頭頃と考えられる。

掘立柱建物 S B 40 (第30図) 調査地北東部で検出した。建物の主軸は北から 10° ほど東に振る。南北 2 間 (約 5m) ・東西 2 間 (約 3m) を測る側柱建物の可能性がある。各柱穴の間隔は 1.0～2.8m と幅がある。柱穴は平面円・楕円形であり、径 0.3～0.4m、深さ 0.15～0.2m を測る。柱痕は確認できない。

ピットSP18 調査区北西端の排水溝掘削時に検出した。平・断面は不整楕円形で長軸0.4m・深さは0.1mを測る。埋土は黒褐色細粒砂土1層で柱痕も確認できず遺構とも言い難いものの、埋土中から土師器皿(292)が出土した。

上記のほかに、調査区北側を中心に平・断面不整形の土坑・ピットが十数基分布する。いずれも深さ0.1～0.3mと浅く、遺物は出土していない。

7. 出土遺物

出土した遺物は、整理箱にして40箱である。この内、294点を図化した。個々の遺物の法量等の基本的な情報は、巻末の観察表(付表3～5)に記述しており、そちらを参照していただきたい。

1)横穴式石室玄室内及び羨道部出土遺物(第31～35図)

玄室床面付近から須恵器、土師器、鉄製品、玉類等が出土した。

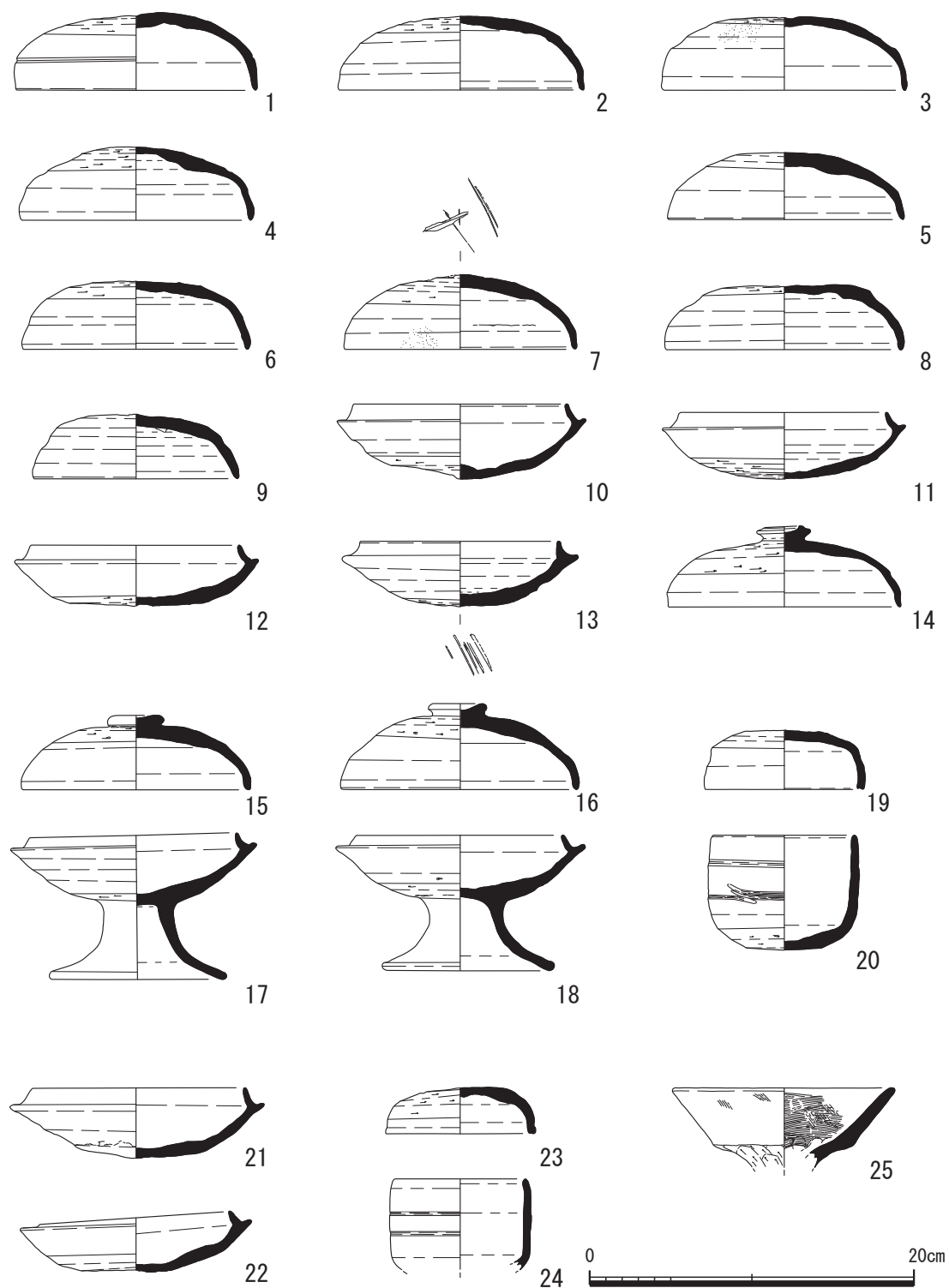
(1)土器

須恵器には杯蓋、杯身、有蓋高杯、碗、蓋が、土師器には高杯がある。

1から20は、玄室内から出土した。1から9は杯蓋である。1と9は床面より僅かに浮いて出土した。1～8は口径13.9～15.0cm、器高4.1～4.8cmを測る。天井部のヘラケズリの範囲は2分の1程度である。口縁端部は丸く収めるが、2の端部内面には稜線が認められる。天井部と口縁部の境界は不明瞭なものが多いが、1は明瞭な稜線が認められる。7の天井部にはロクロから切り離した際の工具痕が明瞭に残る。4と8の表面には焼成時の火轆が認められる。10～13は、杯身である。10は底部が突出し安定しない。11の色調は灰白色を呈し、器高や調整が精緻である。13は底部に工具による切離しの痕跡が残る。杯蓋・杯身は色調・胎土・焼成にばらつきがあり、明確なセット関係は不明である。灰～灰白色の色調をもつもの(1・2・11)は丁寧なヘラケズリを施し、器壁を整えている。2と11は出土位置は離れるが、色調・胎土が近似しており、セット関係となる可能性が高い。対照的に僅かに暗い暗灰色の色調をもつもの(7・10・13)はヘラケズリがやや粗く、工具痕が残されたままで雑な印象を受ける。出土位置からは、玄室右側壁付近でまとまって出土した8と12については、法量と色調が近似することから、セット関係となる可能性が高い。左袖部で重なって出土した7・10は粗いヘラケズリと色調が近似するが、口縁部の法量が異なる。

17・18は、有蓋高杯である。いずれも玄室左袖部付近から出土した。ともに法量・色調・胎土・焼成が近似する。少し離れた部分から出土した蓋(15・16)と色調・胎土が近似しており、15と18はややかみ合わず、セット関係としては、15と17、16と18の組合せになると考える。また、15～18の4点の色調は1・2・11の杯蓋・杯身と類似する灰白色であり、丁寧な調整で器壁も整っている。14は有蓋高杯の蓋であるが、つまみの端部には外傾する面を形成し、中央を正円形に窪ませる。天井部のヘラケズリの範囲は半分よりも広い。-

20は、碗である。玄室奥壁寄りの中央付近にて、床面直上で直立して出土した。体部には沈線が2条施され、上部の沈線は収束部分がずれる。底部は平坦に整えられる。羨道から出土した24

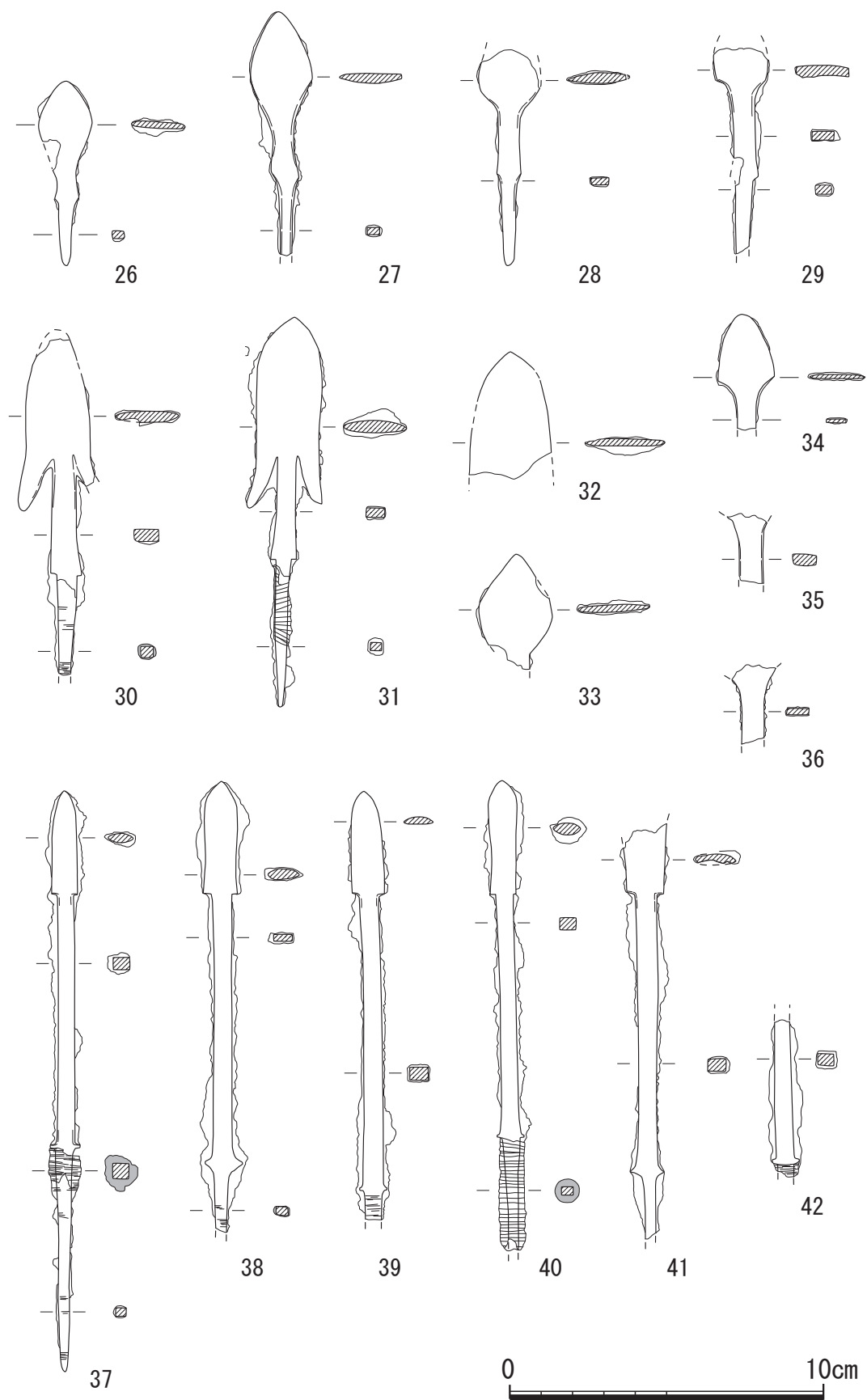


第31図 横穴式石室玄室及び羨道部出土土器実測図

と法量が近似しており、沈線を 2 条施す点も共通するが、沈線間の幅や口縁端部の形状が異なる。

19は、直径9.8cmの小形の蓋である。20の碗の近隣で、13の杯身の中に逆さ状態で重なって出土した。口縁端部は方形に収める。

羨道部からは、須恵器 4 点・土師器 1 点出土した。21・22は杯身である。21は器壁がやや荒れている。22は僅かに歪みが認められる。23は蓋であり、口縁部は断面方形になるように収め、端



第32図 横穴式石室玄室及び羨道部出土金属器実測図

部に面を形成する。24は椀であり、口縁端部は僅かに内傾させる。25は土師器の高杯杯部で、内面全体に明瞭なハケ目が残る。

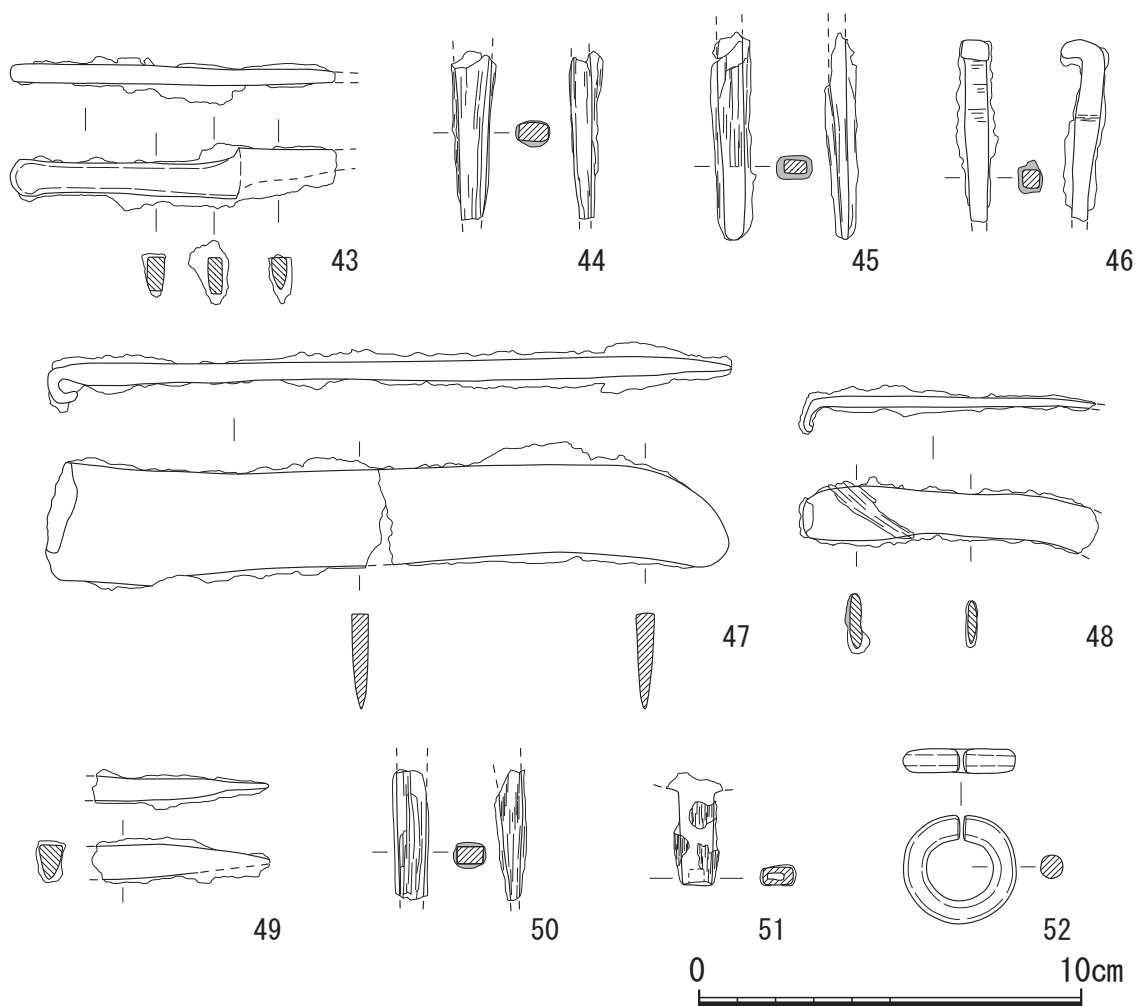
石室床面付近の須恵器の時期は、杯蓋・杯身の特徴から、主体は陶邑編年 T K 43 型式期と考える。しかしながら、杯蓋で古相の様相を呈する天井部と口縁部の境界に稜線が入るものが 1 点 (1)、これらより新しい T K 209 型式期の特徴を持つものとして、やや小形の杯蓋 (9)、杯身で立ち上がりが短く、受部が水平に近いもの (22) がある。

(2) 金属製品

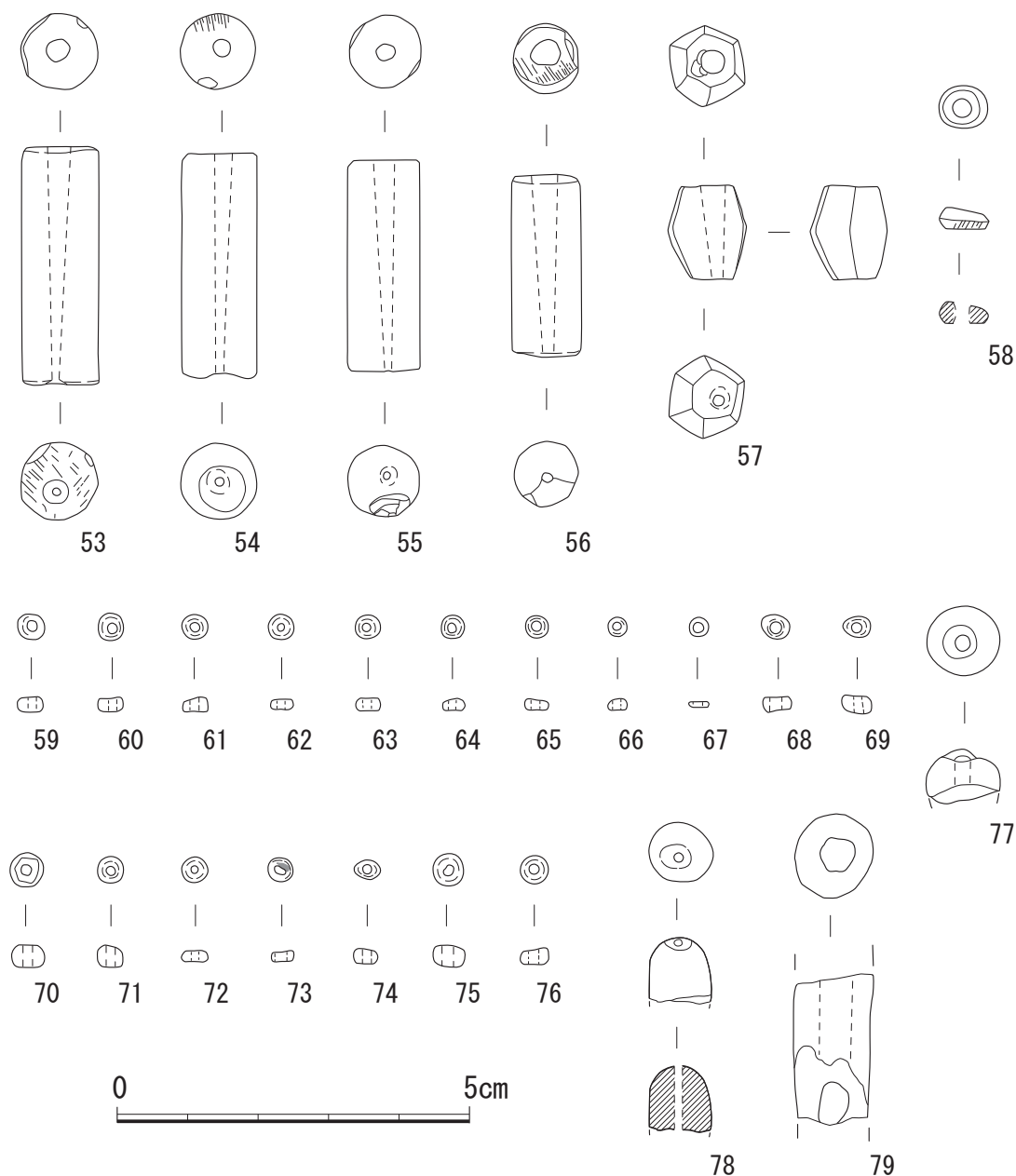
鉄製品には、鏃、刀子、釘、鎌、耳環とそのほか不明鉄製品がある。

26～42は鉄鏃である。26～36は平根系鉄鏃である。26・27は鏃身部が柳葉形で山形関を持つ。28・29はナデ関を持つ。30・31は鏃身部が腸袂柳葉で角関を持ち、茎部に有機質が残存する。34は鏃身部が緩やかな三角形でナデ関を持つ。37～42は長頸鏃である。鏃身部平面形は長三角形であり、頸部関は棘状関を持つ。41以外は茎部に有機質が残存し、40では樹皮が巻かれている様子が明瞭である。42のみ、羨道部からの出土である。

43は刀子である。刃部と茎部が残存する。茎尻部の刃部側は下方に丸く収める。46は鉄釘であ



第33図 横穴式石室玄室出土金属器実測図



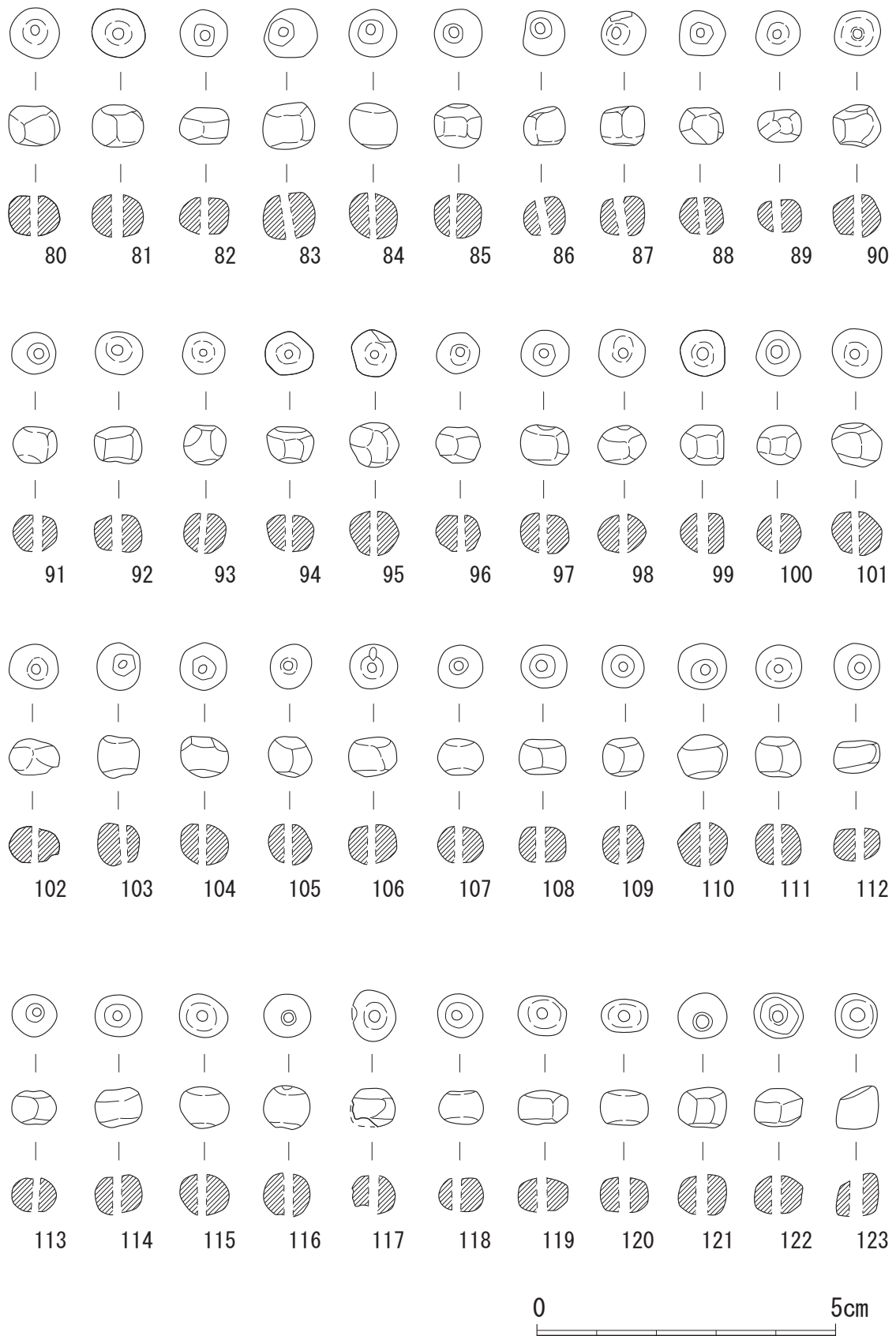
第34図 横穴式石室玄室出土玉類実測図1

る。玄室床面付近からは1点のみの出土である。表面には横方向の木質が付着しており、後述する玄室上層から出土した鉄釘(143~152)と形状とともに類似する。

47・48は、鉄鎌である。47は全長17.8cmを測る。48は表面に木質が付着する。52は中実の金銅製耳環である。表面の箔は剥落している。そのほかに不明鉄製品と思われる破片が5点出土している。44・45は不明鉄製品で、木質が残存しており、刀子の茎部の可能性がある。50も同じく木質が残存するものの、細片で種類は不明である。51は先端に穴が認められるものの、製作時のものではなく錆の影響で穴状に窪んだと考えられる。鉄鎌か刀子の可能性がある。49も刀子の刃部と考えたが、断面形は三角形とは言い難い。

(3) 玉類

碧玉製管玉、水晶製切子玉、ガラス玉、土製丸玉、白玉などがある。出土した玉類の総数は71



第35図 横穴式石室玄室出土玉類実測図2

点を数える。全て20号墳玄室からの出土であり、いずれも原位置は留めていない。

53～56は碧玉製管玉である。長さ2.6～3.4cm・幅1.0～1.1cmを測る。いずれも片面穿孔で、53・54では、穿孔到達面に円盤状剥離の痕跡が認められる。色調は濃緑色を呈している。57は、水晶製切子玉である。形状は6面体で、表面の角部分は摩耗して丸くなっている。片面穿孔である。58は滑石製白玉である。形状は側面中央部が最大径となる算盤玉形であり、表面に斜めの線刻が部分的に残存する。59～77はガラス玉である。77は直径1.1cmを測る。片方の小口部分が欠損している。この大きさのものは1点のみである。色調は青色を呈する。直径0.1～0.3cm程度のガラス小玉は18点出土した。色調は水色、緑色、黄色がある。それぞれの個数は水色が11点、緑色は5点、黄色は2点を数える。緑色の中で、70・71・74の色調は黄緑色に近い。80～123は、土製丸玉である。大きさは極めて均質的である。形状は不整円形であり、表面には成形時の凹凸が残り、漆が塗布されている可能性がある。多くの個体で、小口の穿孔周辺には漆が剥がれており、製作の過程で穿孔付近を研磨され整えられたと考えられる。78は土製で片方の小口が欠損するものの、平面楕円形の玉となりそうである。79は管玉のような土製品で、両方の小口部分は欠損している。土錘の可能性もある。

2)横穴式石室内埋土出土遺物(第36・37図)

(1)土器

124～126は土師器である。124は布留式甕の口縁部である。125は杯であり、外面体部に不定方向のケズリが残る。126は高杯の脚部であり、外面には縦・不定方向のケズリが残る。127～135は須恵器である。127～129は杯蓋である。130・131は杯身で、130の底部にはヘラ記号が確認できる。132は壺であり、体部にカキメが施される。133・134は無蓋高杯の口縁部である。135は壺の口縁部である。

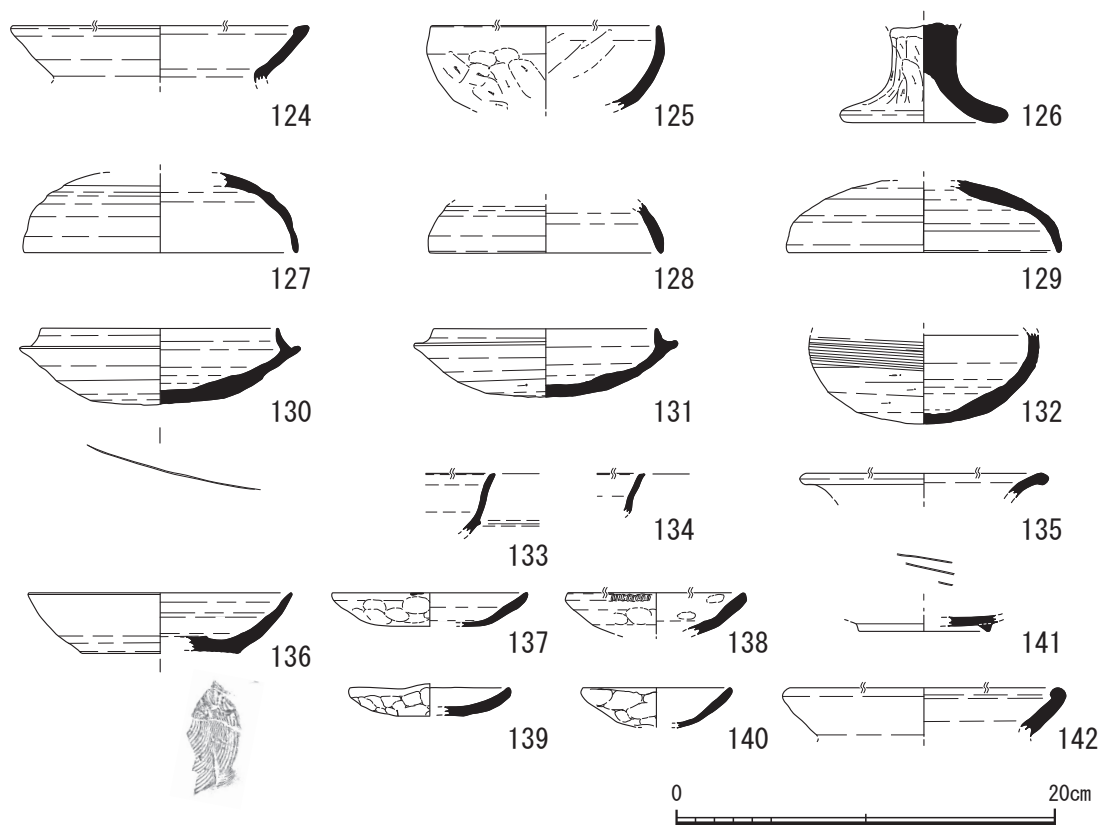
(荒木瀬奈)

136～142は平安時代以降に石室が再利用された際に持ち込まれた、あるいは流入したと考えられる。136は回転台成形の土師器杯である。底面と口縁部の境が強いナデで凹むことで内底面中央部が盛り上がる。底部は糸切りである。137～140は土師器皿である。137・138は底部外周の強いナデによって口縁部が屈曲して立ち上がるが、口縁端上半はわずかに外反する。外面のヨコナデの範囲が狭い。138は口縁端部外面が縦方向に刻まれて、本来の口縁端部が残っていない。139・140は口縁部のヨコナデが弱く、ほぼ指押さえで成形するため、口縁部がやや波打っている。141は瓦器椀である。見込みに平行線状の暗文が施される。142は「く」字形に外反する口縁部を持つ土師器羽釜か。口縁端部は内側に折り返される。

(森島康雄)

(2)鉄製品

143～152は鉄釘である。玄室内の1・2層中から出土した。いずれも表面を覆うように木質が残存する。頭部の形状は折り曲げているものの、後述する石組遺構S X50出土の釘のように、先端をつぶして平坦にしているものは確認できない。釘に残存する木質は上下で木目の方向が異なっていることから、2個体分の木材を接合していたと考えられる。釘の下部から先端付近の木目の方向は縦方向のものと横方向のものがある。

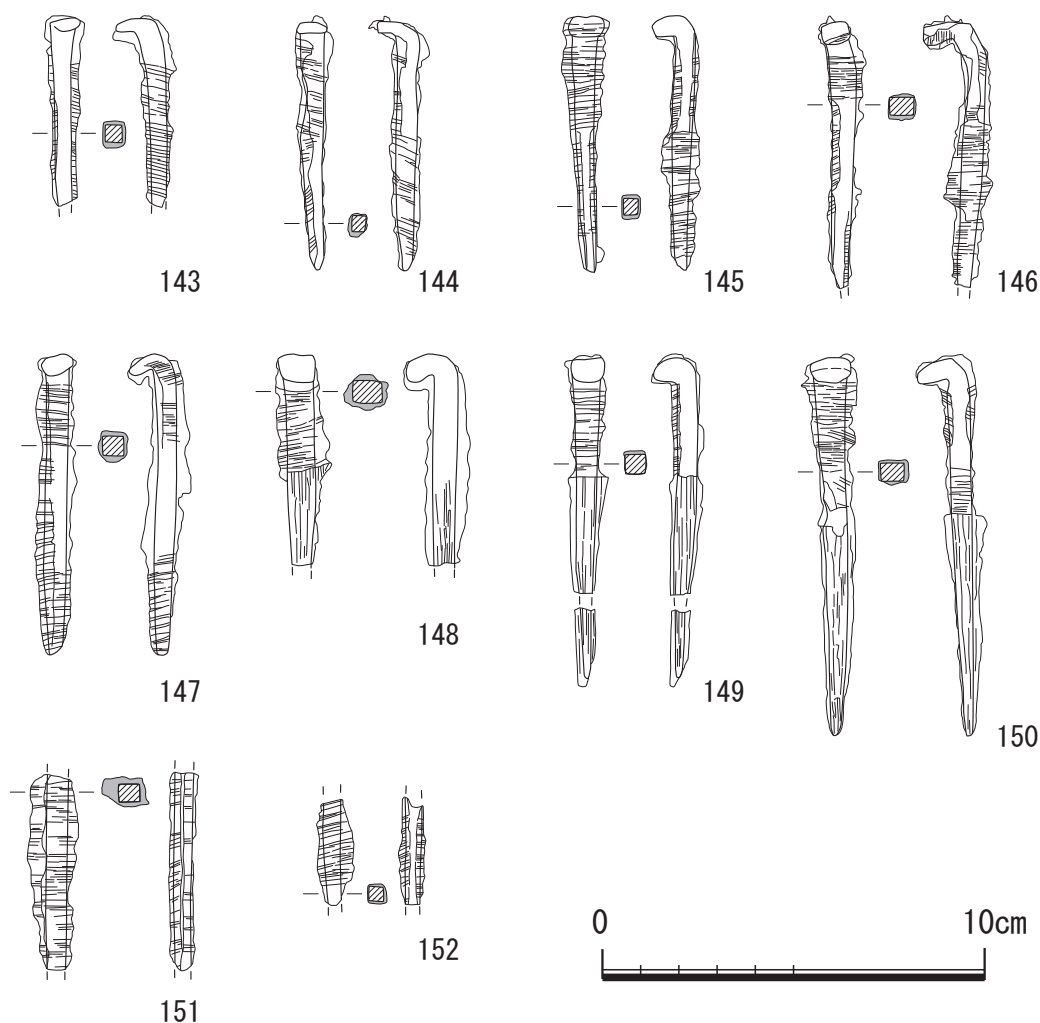


第36図 横穴式石室埋土出土土器実測図

3) 墳丘上及び周溝内出土遺物(第38～40図)

残存する墳丘盛土から上層で出土したものと、周溝埋土から出土したもの(156・161・167・169・174・180)である。153は土師器高杯の脚部である。脚柱部と接合部に軸痕が残る。154～176は古墳時代後期の須恵器であり器種は杯蓋・杯身、高杯、壺、甕、提瓶、すり鉢などが認められる。154～159は杯身である。155の底部にはヘラ記号が確認できる。158・159は口縁端部が短く、体部も厚みがある。160～163は杯蓋である。162・163の天井部内面には同心円の当て具痕が残る。164は天井部と口縁部の境界の稜線は明瞭である。165・166は高杯脚部である。167はすり鉢である。底部は厚さ1.7cmの円板状であり、側面に格子状叩きが施される。168は長頸壺の頸部であり、内面の体部との境界付近に指押さえが認められる。169は広口壺の体部から底部である。170・171・174～176は甕の口縁部である。174は復元口径28.4cmを測る。175は波状文が4段確認でき、口縁部付近まで及ぶ。172は壺あるいは甕の肩部付近の可能性がある。173は提瓶の肩部付近の細片である。耳は短く、先端を丸く収める。この他に図化していない遺物として、須恵器甕の破片が遺物箱2箱分出土した。(荒木瀬奈)

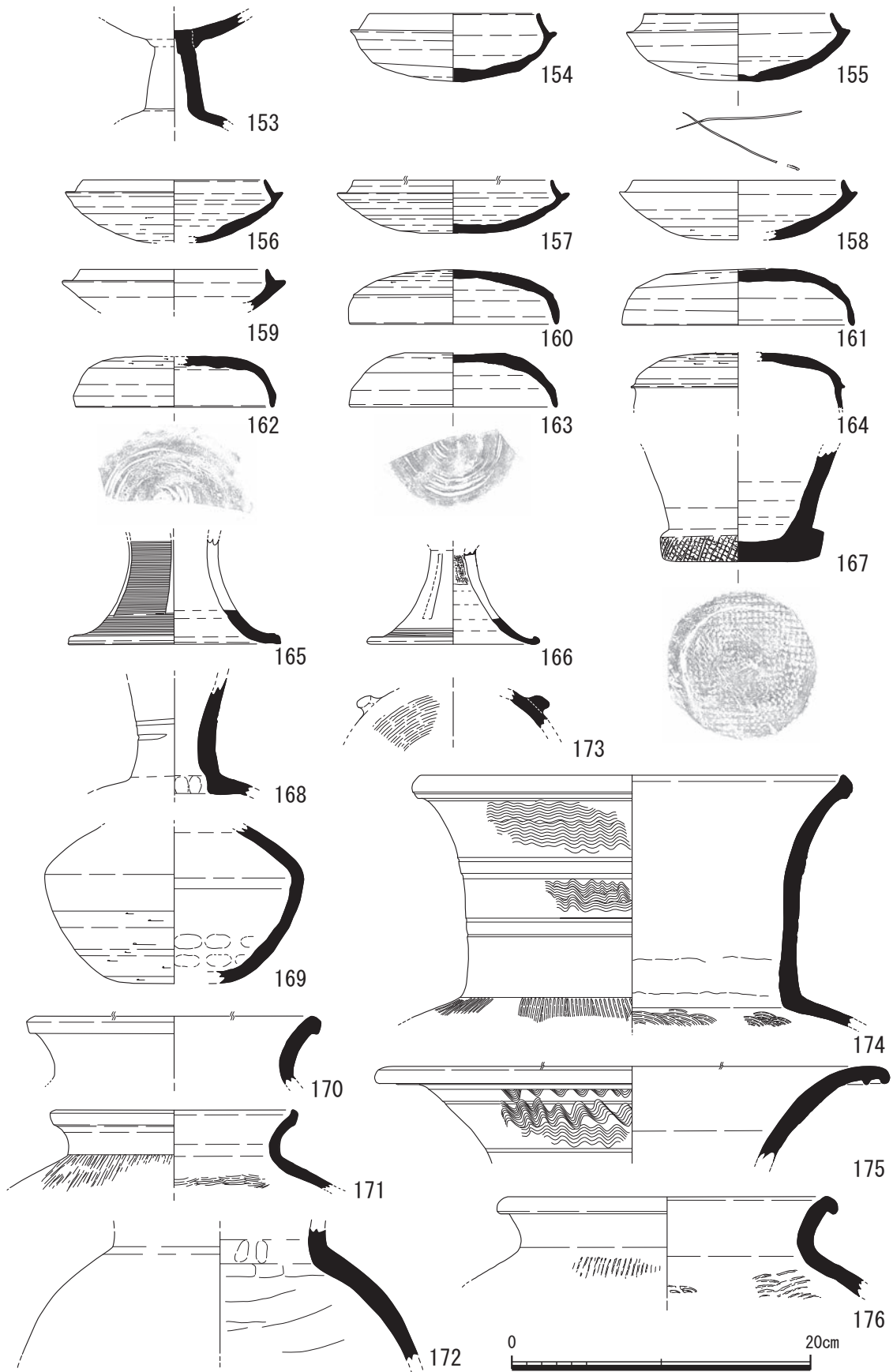
177・178は須恵器杯B蓋である。178はつまみが付かない。180～182は須恵器碗である。180は底部ヘラ切り、181・182は回転糸切りである。180は周溝からの出土である。179は須恵器壺である。破断面の色調はわずかに紫色を帯びる。183～185は黒色土器である。183は回転台成形で底部糸切り、見込みはヘラケズリの後、密なヘラミガキが施される。184は外反する口縁の内端面に沈線がめぐらされ、内外面にはヘラミガキが施される。185の内面は見込みに密なジグザグ状



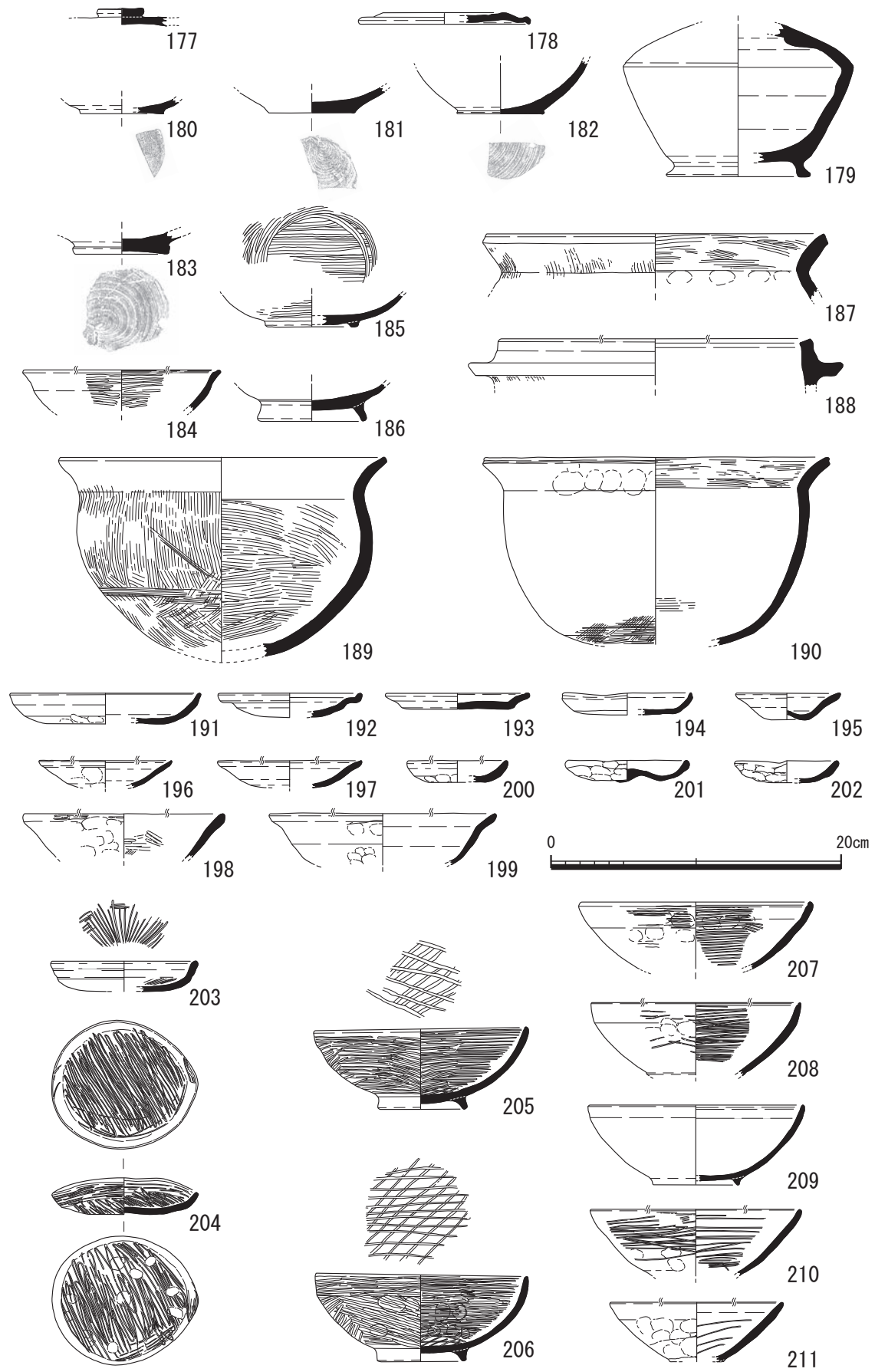
第37図 横穴式石室埋土出土鉄製品実測図

ミガキの後、圏線状ミガキ、外面は高台付近まで分割ヘラミガキが施される。貼付け輪高台である。186は灰釉陶器碗である。皿付は研磨されている。187は土師器甕、188は土師器羽釜である。両者とも胴部外面に粗いタテ方向のハケが施される。189・190は土師器甕である。189は胴部内外面にハケが残るが、190は底部を除いて、ていねいなナデでハケの調整痕跡を消している。

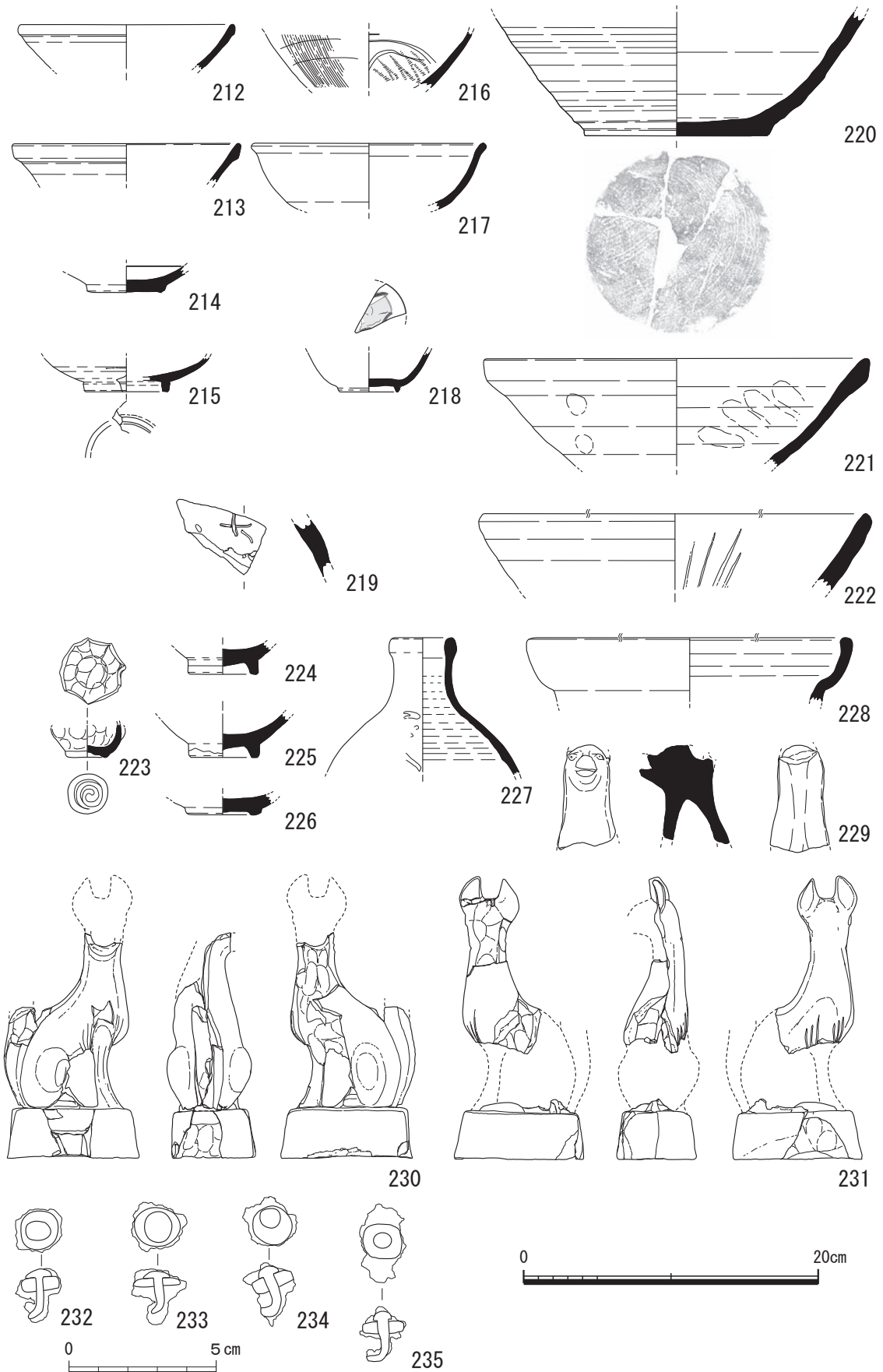
191～202は土師器皿である。191は口縁部に2段のナデが施される。192・193は「て」字状口縁の小皿で、193はほぼ扁平となっている。194は口縁端部が直立する。195はへそ皿である。196～199は口縁部上半が外反する皿で、外面のヨコナデの範囲が狭い。200は強いヨコナデが施されるが、口縁端部に、成形後、伏せて置かれたことによるとみられる細かな圧痕が付いている。201・202は口縁部のヨコナデが弱く、指押さえて成形する小皿で、口縁部が波打っている。191～194は11・12世紀代、195～199は14・15世紀代、200～202は16世紀代に位置付けられる。203・204は瓦器皿である。203は見込みに放射状暗文が施される。口縁部は磨滅しているが、外面にわずかにヘラミガキが観察できる。204は見込みと底部外面に密なジグザグ状ヘラミガキ、口縁部内外面に水平方向のヘラミガキが施される。205～211は瓦器碗である。205・206は見込みに格子状暗文が施され、口縁部内面に密な圏線ミガキ、外面には密な分割ヘラミガキが施される。205



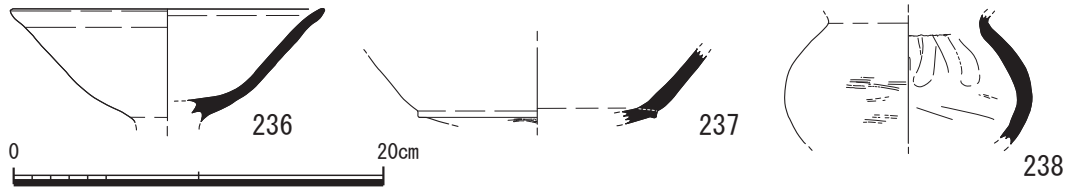
第38図 墳丘上及び周溝内出土遺物実測図 1



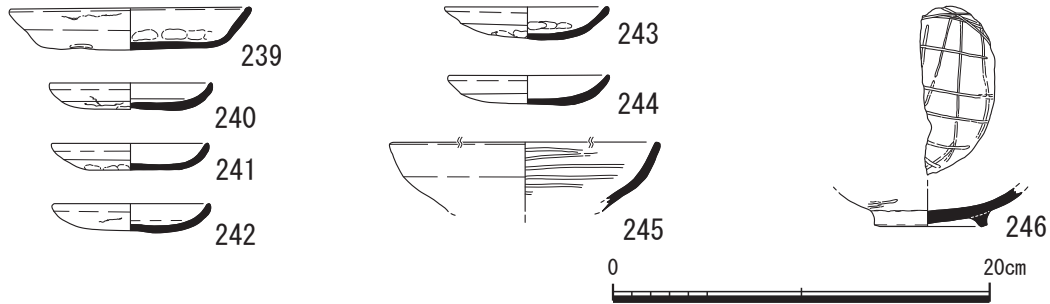
第39図 墳丘上及び周溝内出土遺物実測図2



第40図 墳丘上及び周溝内出土遺物実測図 3



第41図 墳丘盛土内出土遺物実測図



第42図 石組遺構 S X 50出土遺物実測図 1

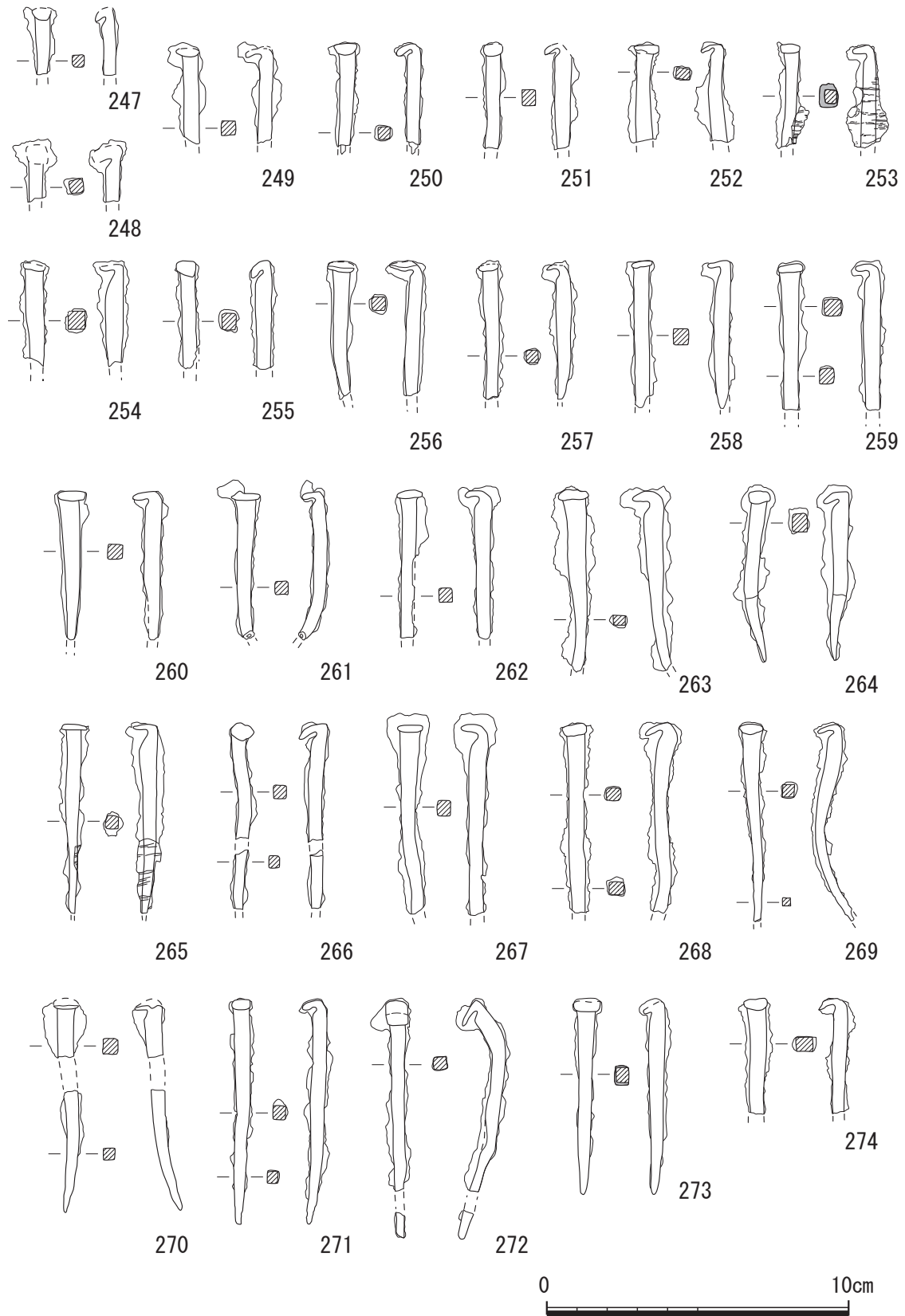
は口縁内端部に沈線がめぐらされる。207・208は内面に密な圈線状ヘラミガキが施され、外面の上半に分割性の崩れた粗いヘラミガキが施される。口縁内端部には沈線がめぐらされる。209は内外面ともに磨滅が著しい。210は内面に隙間の大きく空いた圈線状ミガキ、外面上半には分割性の崩れた粗いヘラミガキが施される。211は内面に粗い渦巻き状のヘラミガキが施される。見込みには暗文が施されるが、全容は知りえない。粘土を擦り付けたような低い高台が貼付けられている。

212～215は白磁碗である。212はII類、213・214はIV類である。214の内面には1条の沈線がめぐらされる。215は割り高台の切込みが体部に及んでいる。

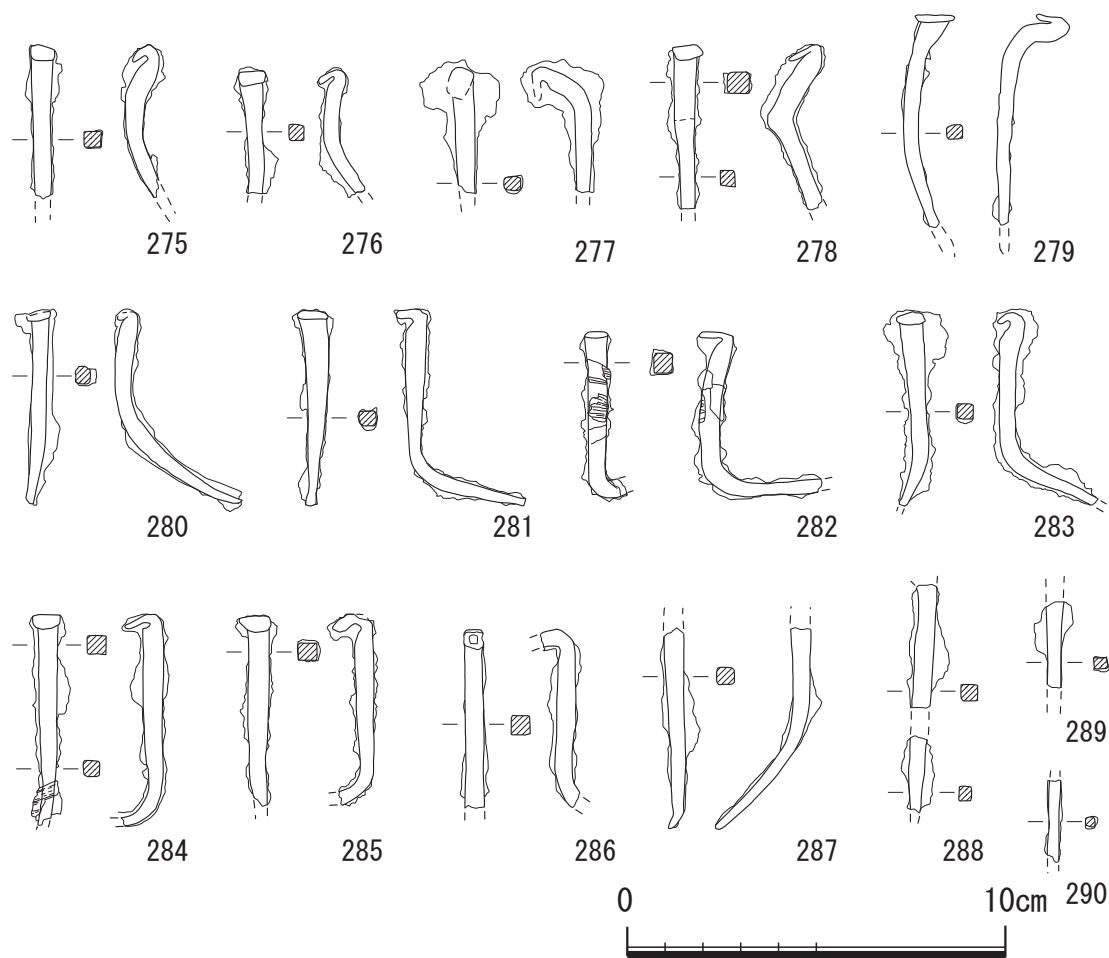
216は同安窯系青磁碗I-1b類、217は無紋の青磁碗である。218は饅頭心形の染付碗である。219は丹波焼壺である。ヘラ描きが刻まれる。「十」の字にも見えるが、上半が失われており断定できない。220は須恵器鉢である。使用により内底面から2cm程度が平滑になり、底部外縁も摩耗して糸切り痕跡が見えなくなっている。221は東播系須恵器鉢である。残存部の内面下部約4分の1は、使用により平滑になっている。222は丹波焼すり鉢である。

223は花塩壺である。口縁部はすべて失われているが、8輪花に作られていたものと考えられる。224～226は肥前陶器である。224は皿である。見込みに3か所の胎土目が見られる。225は見込みに天目釉、外面に白濁した釉が垂れている。226は内面に透明釉、外面に淡いオリーブ色の釉が掛けられるが、一部は白濁している。227は丹波焼徳利。肩部に釉ハギによる文字が記されるが、大半が失われて判読できない。228は瓦質土器土管か。内面は回転ナデ、外面は回転ナデの後ミガキが施される。229～231は狐の土人形である。229は木型による型作り、230・231は土型を用いた型作りで、離型剤の外面にキラ粉が残る。(森島康雄)

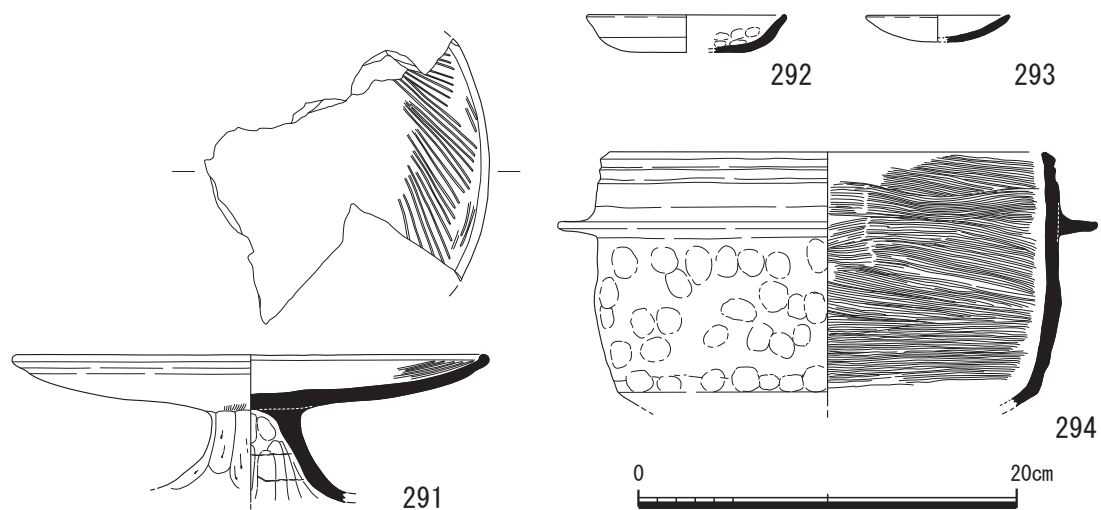
232～235は、鉄鋌である。いずれも墳丘南西区から出土した。すべて錆で膨れており、鋌頭部の形状は不明瞭である。先端は曲がっている。馬具等の副葬品の一部の可能性もあるものの、現



第43図 石組遺構 S X 50出土遺物実測図 2



第44図 石組遺構S X50出土遺物実測図3



第45図 B地区出土遺物実測図

時点では形状・時期などは不明である。

(荒木瀬奈)

4) 墳丘盛土内出土遺物(第41図)

236～238は墳丘盛土掘削中に出土した土師器である。236・237は高杯の杯部で、236は内外面をナデで整えられる。238は丸底壺の体部と考える。時期は古墳時代前期後半～中期頃と考える。

(荒木瀬奈)

5) 石組遺構 S X 50 出土遺物 (第42図～第45図)

(1) 土器

239～244は土師器皿である。239は大皿で、平らな底部から口縁部に至る屈曲部に強い指押さえ痕跡が残る。口縁部外端は面取りが施されが、やや崩れている。240～244は小皿で、口縁端部は短く上方に屈曲する。245・246は瓦器碗である。245は内面に粗い圈線ミガキが施される。細かく割れていて接合できない破片があり、完形で納められていたと考えられる。246は見込みに格子状暗文が施される。239～243は石組内から出土したもので、中世墓の副葬品と考えられる。13世紀前半に比定できる。246は石組の石材の間から出土した。(森島康雄)

(2) 鉄製品

鉄釘は破片も含めて44点図化した。この内、釘の頭部は39点ある。法量は頭部から先端まで残存するものの数値を見ると5.6～7.4cmのものが確認できる。269・272・275～285は屈曲している。頭部の形状は、大半が先端を潰して折り曲げている。253・265・282・284では表面に横方向の木質の可能性のある痕跡が部分的に確認できる。鉄釘はいずれも石組の底部から埋土中までに散在するように出土しており、どのような構造物を構成していたのかは不明である。273・274は石組遺構 S X 50 近辺の精査中に出土した。玄室上層から出土した鉄釘(143～152)と比較すると、形態的特徴が異なっており、細く短い形状で、頭部先端を折り曲げて潰している点が相違する。

286は、屈曲させた先を潰していないことから釘ではなく鏃の可能性が考えられるものの断定はできない。(荒木瀬奈)

6) B 地区出土遺物 (第45図)

291は土師器高杯である。脚部外面はヘラケズリにより11面に面取りされる。杯部内面に放射状暗文が施される。292・293は土師器皿である。292は胎土にクサリ礫が目立つ。294は瓦質土器羽釜である。内面は細かいハケ調整、外面は口縁部から鰐下部にかけてヨコナデ調整で、口縁部に2条の沈線がめぐらされる。胴部外面は水平方向に並ぶ指押さえが残る。胴部外面には煤が厚く付着しているが、鰐の下面には及ばない。(森島康雄)

8. ま と め

1) 遺構・遺物の分布状況

今回の調査地の明確な遺構としては、古墳時代後期後半に築造された20号墳と、13世紀前半にその墳丘を削平して構築された石組遺構 S X 50 があげられる。周辺では、北側に15世紀末～16世紀初頭頃の羽釜が出土した柱列 S A 35 や時期不明の掘立柱建物 S B 40 等が分布するものの、全体としては遺構の分布密度は希薄である。

遺構ではないものの、20号墳の墳丘上層や盛土中、B 地区精査時には古墳時代前期後半～近世までの遺物が出土しており、周辺では長期間にわたり集落などの土地利用があったと考えられる。

2) 法貴峠20号墳についての検討

(1) 古墳構築過程の復元 (第46図)

20号墳の調査によって得られた成果から、現時点での構築過程を復元する。

①築造開始時の整地

古墳築造場所の決定後、自然地形を削平し、整地層を施すことで地面を水平に整地し、墳丘盛土下の基盤面の高さ調整を行ったと考える。もとの自然地形がどの程度削平されたかは明確にできないものの、築造前は西側の丘陵からの傾斜面が続いていたと考えられ、そのため、整地層は東側の平野部側にかけて僅かに厚く盛土される様子が見られる。また、この段階で周溝が部分的に掘削された可能性がある。

②石室基底石据付け穴の掘削、墳丘盛土(下部)の構築

整地層を掘削し、玄室・玄門部分の基底石の据付け穴を作る。併行してこの段階で墳丘盛土の下層部分を構築し始めたと考える。

③基底石の据付け

据付け穴に基底石を落とし込んで基底石を設置する。

④基底石の裏込めの充填、石室床下の整地、玄室敷石敷設、羨道部床面整地

基底石の裏側に粘質性の高い土を充填し裏込めとする。玄室内では築造時の整地層の上に別の整地層を設置し、基底石据付け穴を埋めている。また、この段階で玄室床面に敷石を設置し、石室内部からも基底石の固定・補強を行ったと考える。羨道部では床面を整地したと考える。

⑤石室2・3段目の盛土と石材の構築と羨道基底石の設置

石室2・3段目の高さまで墳丘盛土を水平に設置し、この盛土を裏込めとして、石室石材を設置する。盛土の墳丘外側には、合わせて下段列石を設置して、墳丘下半部の地盤強化を行う。盛土を水平に堆積させたことで、以降の石室石材設置、石室裏込めの盛土、上段列石設置、羨道側列石設置時に作業面としても利用された可能性も考えられる。

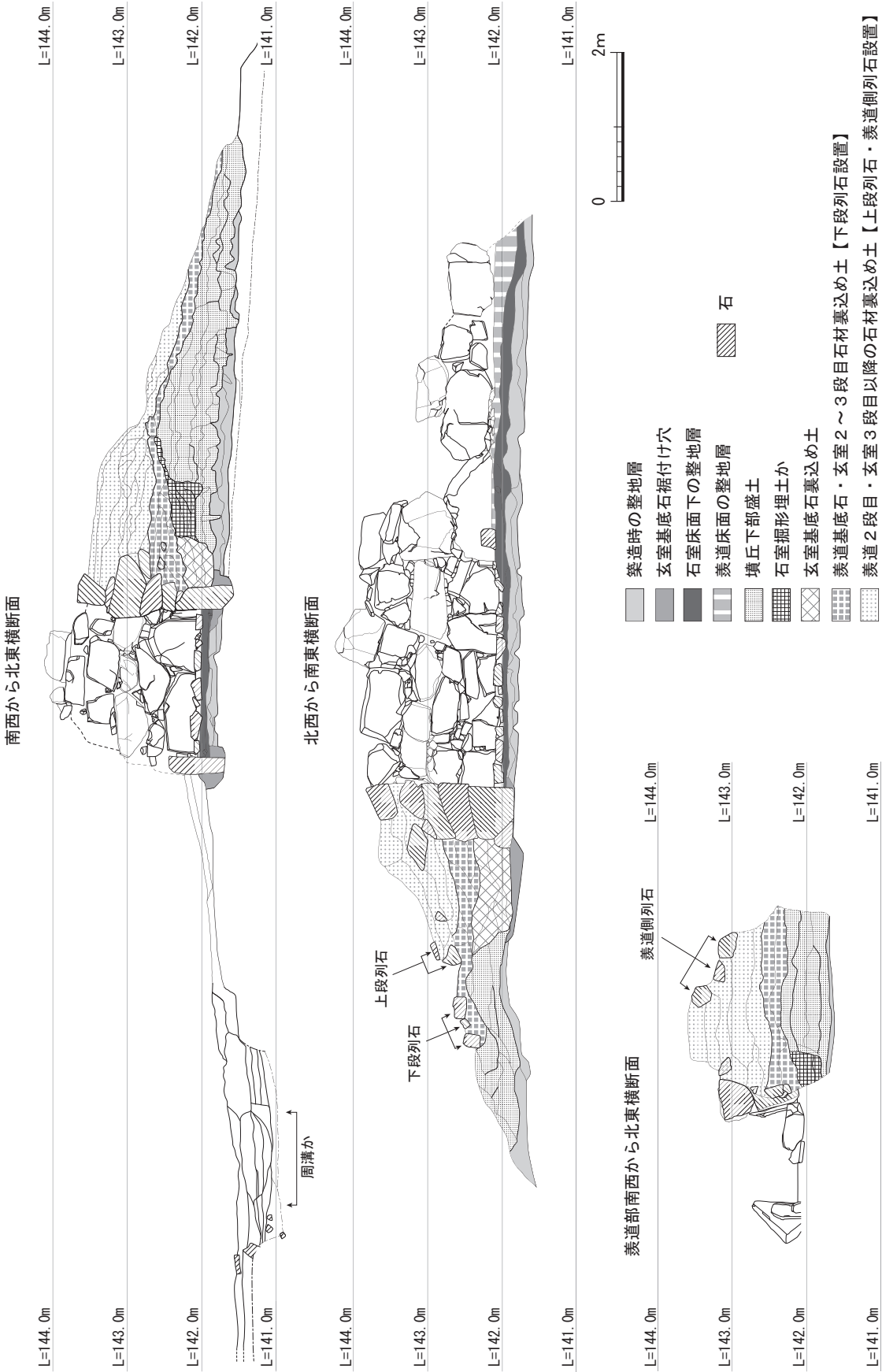
⑥石室上段と墳丘上部構築

4段目、5段目の石室石材設置に合わせて、墳丘上部の盛土を行う。④段階以降は、石室石材設置→裏込め土設置→上段列石・羨道部列石の設置→盛土を繰り返す。

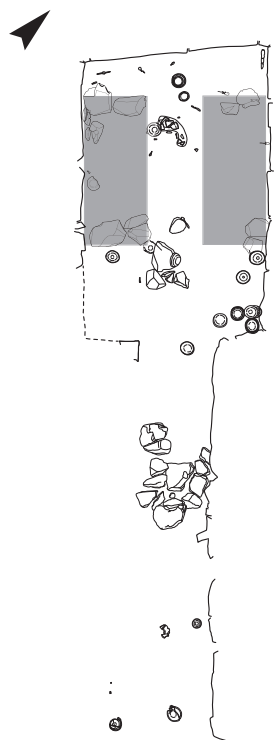
墳丘盛土と石室の上部は失われており、本来の墳丘・石室の高さや構造については不明である。その他にも不確定要素として、④の各部分の工程の前後関係や、袖部基底石の設置時期、石室掘形や作業面の範囲・構造等があげられる。他の古墳の事例も参考にして今後検討していきたい。

(2)石室内の埋葬状況の復元(第47図)

20号墳玄室床面で検出した棺台の位置および遺物の出土状況から、第47図のように木棺の位置を復元した。石室内は埋葬当時の状況を留めていないものの、残存する出土遺物から時期比定を行う。須恵器杯蓋・杯身の特徴から、主体は陶邑編年TK43型式期である。杯蓋にはこれらよりやや古相の様相を呈する天井部と口縁部の境界に稜線が入るものや、天井部のヘラ削りの範囲が広いものが存在するものの少量であり、初葬はTK43型式期と考える。追葬の有無は明確に判断できないが、玄室・羨道・周溝内から出土した杯身には立ち上がりが短く、受部が水平に近いTK209型式期の特徴を持つものが複数あり、この時期に追葬が行われた可能性がある。



第46図 20号墳構築過程の復元案 (S = 1/80)



第47図 埋葬状況の復元図

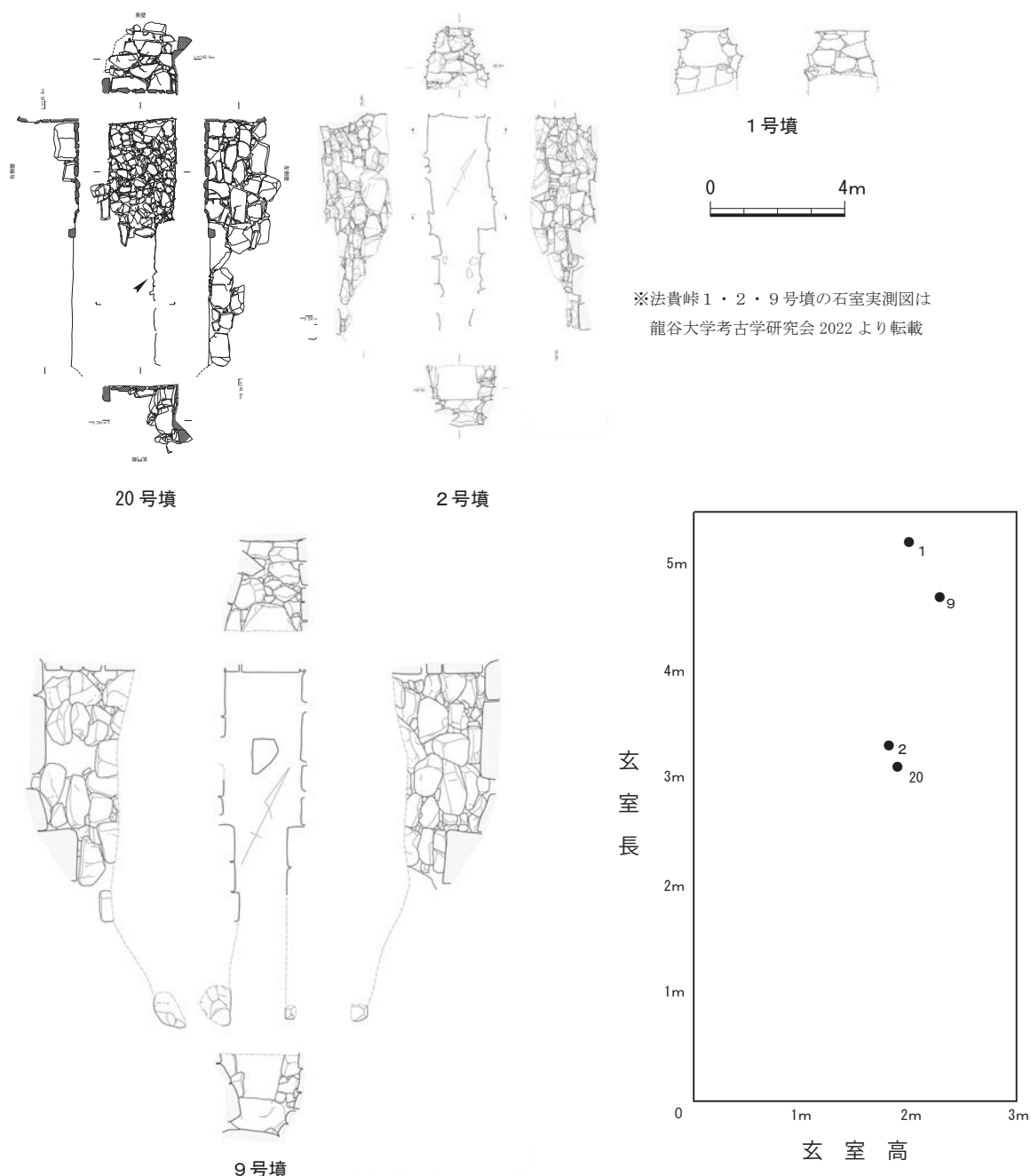
(3) 周辺の古墳群との比較検討

20号墳の横穴式石室と、丘陵上の法貴峠古墳群とされている古墳の内、横穴式石室が開口している古墳と比較すると、石室石材の積み方や南東方向に開口することなどが共通する。法貴峠古墳群中では、墳丘と石室の規模的には9号墳が突出しており、同古墳群中の盟主墳の可能性はある。20号墳の横穴式石室は、残存状況が悪いことを考慮しても、1・9号墳の石室よりは小規模であり、2号墳と近似する。龍谷大学考古学研究会は石室の特徴から2号墳→20号墳→1号墳→9号墳の順で築造されたと考察している。^(注8)

石室以外の要素では、20号墳は丘陵部の古墳からは唯一離れて分布しており、立地的には亀岡盆地と北摂地域を行き来する交通路上の目立つ段丘縁辺に位置している点で、丘陵部の古墳より優位性があると言える。また、墳丘は盛土と列石を含む石材から構成されており、自然地形の利用は認められない。20号墳が位置する場所まで石室石材や墳丘盛土等の古墳築造のための各種資材を運搬するには、丘陵部の古墳よりも労力がかかった可能性があり、20号墳の被葬者はそれでもこの場所に古墳を築造可能な有力者であったと想像できる。なお、石室以外の要素が判明している古墳は20号墳のみであり、法貴峠古墳群内の変遷や20号墳が古墳群築造の契機となる古墳と断定できるかどうかは、各古墳の出土遺物が判明し、比較検討を行った上で判断したい。

法貴峠古墳群と同様に、曾我谷川流域を取り囲んでいる丘陵上の古墳を見ると、西部の法貴古墳群周辺に古墳が集中して分布する状況が確認できるものの、現時点で古墳時代後期の突出した規模・内容を持つ古墳は確認できず、それぞれの古墳群内での盟主墳が存在し、それらが並立する印象を受ける。周辺の古墳と20号墳を比較すると、墳丘は中規模であり、石室規模は法貴峠1・9号墳等の盟主墳の可能性のある古墳よりは小形である。副葬品については、玄室内の須恵器は杯蓋・杯身、有蓋高杯・同蓋、椀、蓋などの小形品のみであるが、墳丘上層・周溝内からは後世の改変を受けているものの、壺・甕・提瓶等が出土している。前田俊雄氏は、亀岡盆地の後期古墳出土土器を集成しており、^(注9)この成果を参考にすると、20号墳の土器組成は、墳丘上層・周溝内から出土した須恵器も含めると器種はやや豊富であるが、同時期で土器組成が判明している古墳は少なく、いずれも小規模古墳である。鉄製品は中・小形品のみであり、刀剣や馬具等は認められない。玉類は複数種あるが、勾玉やトンボ玉等の特殊なものはない。以上のように、現状では規模・内容的には突出する点はないものの、丘陵部から離れた段丘縁辺の見通しの良い場所に立地し、自然地形を利用せずに盛土や列石等で古墳を構築している点で亀岡盆地南部の曾我谷川流域での有力古墳の1基となる可能性がある。

今回の全面発掘調査により20号墳の墳丘・石室構造や構築過程が判明したことは、当該地域の古墳研究において重要な調査事例である。特に、墳丘内列石は、周辺では亀岡市小金岐71号墳、



第48図 法貴峠古墳群内の横穴式石室と石室規模の比較(S=1/200)

南丹市園部天神山3号墳、綾部市久田山古墳群と細谷古墳群で複数確認されているほか、近年の法貴北古墳群と法貴古墳群の調査でも墳丘内列石を持つ古墳が複数確認されており、今後これらの古墳との比較検討が必要である。^(注10)

3) 石組遺構 S X 50 について

現時点で、曾我部町内では石組遺構 S X 50 と類似する遺構は確認できない。しかし、北側に隣接する金生寺遺跡で石組遺構 S X 50 と近接する中世前期の遺構・遺物が検出されている。^(注11) 主な遺構としては、掘立柱建物・井戸・溝状遺構などの居住地に関するものが複数検出されており、石組遺構 S X 50 のような墓の可能性のある遺構は確認できない。金生寺遺跡の調査成果と合わせ

て、中世前期段階の周辺地域の土地利用状況や遺跡の動態を考える上での重要な存在となる。

(荒木瀬奈)

注1 位置と環境全体の記述については以下の文献を基にした。

桐井理揮・引原茂治・上井佐紀・名村威彦2022「犬飼遺跡第2・3次」『京都府遺跡調査報告集』第185冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

亀岡市史編さん委員会2000『新修亀岡市史』資料編第1巻 亀岡市

注2 法貴峠古墳群の既往の調査は以下の文献で報告されている。

京都府教育委員会2021「平成30・令和元(平成31)年度の調査(法貴峠古墳群第1次)」『京都府埋蔵文化財調査報告』

龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会2022『亀岡盆地における群集墳Ⅱ 法貴峠古墳群・法貴古墳群・宮条古墳群・宮条南古墳群』龍谷大学学友会学術文化局・考古学研究会 第6集

注3 前掲注2(龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会2022)と同じ

注4 京都府教育委員会2021「平成30・令和元(平成31)年度の調査(法貴峠古墳群第1次)」『京都府埋蔵文化財調査報告』(令和4年度)

注5 石井智大2007「横穴式石室に関する用語」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会

注6 20号墳の石室石材・墳丘内列石、石組遺構 S X 50、周辺石材の石種等については、京都大学大学院の河上哲生教授にご指導いただいた。

注7 小嶋 篤2024「墳丘の内に石を見出すこと」『九州前方後円墳研究会論集』九州前方後円墳研究会

注8 前掲注2(龍谷大学学友会学術文化局考古学研究会2022)と同じ

注9 前田俊雄2019「第4章考察 5. 須恵器」『京都府亀岡市鹿谷古墳の研究』ーゴーランド調査古墳の研究2ー ゴーランド・コレクション調査プロジェクト

注10 近年の法貴北古墳群・法貴古墳群の調査については以下の略報がある。

竹村亮仁2023「法貴北古墳群第1・2次」『京都府埋蔵文化財情報』第144冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

竹村亮仁2024「法貴古墳群第1・2次(A地区)」『京都府埋蔵文化財情報』第146冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

増田慧子2024「法貴北古墳群第3次・法貴古墳群第2次」『京都府埋蔵文化財情報』第147冊(公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注11 荒木瀬奈・引原茂治・山本 梓2023「金生寺遺跡第4・5次」『京都府遺跡調査報告集』第191冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

参考文献

一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆(編)2013『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4 同成社

大阪府立近つ飛鳥博物館2006『陶器の須恵器ー年代のものさしー』

川畑純2015『武具が語る古代史ー古墳時代社会の構造転換ー』 京都大学学術出版会

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

中世土器研究会編1996『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

日本中世土器研究会2022『新版 概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

平尾政幸2019「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号 (公財)京都市埋蔵文化財研究所

右島和夫・土生田純之・曹 永鉉・吉井秀夫2003『古墳構築の復元的研究』雄山閣

渡邊可奈子2010「畿内における古墳時代の刀子—大和地方を中心に—」『古代学研究』第185号 古代学研究会

※そのほか、各遺跡の報告書等を参照したが、紙幅の都合上割愛した。

付表 3 出土土器観察表

() 復元値、[] 現存値、－ 計測不能

番号	種類	器種	地区名	出土 地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備 考
1	須恵器	杯蓋	20 号墳	玄室床 面付近	14.8	4.8	－	口： 10/12	内面：灰 (N6/0) 外面：灰 (5Y6/1)	密（2mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	外面自然釉 付着
2	須恵器	杯蓋	20 号墳	玄室床 面付近	15.0	4.5	－	11/12	褐灰 (10YR6/1)	密（1mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ、ユビオサ エ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	
3	須恵器	杯蓋	20 号墳	玄室床 面付近	14.8	4.6	－	全体： 7/12 口径： 2/12	灰 (N6/0)	密（3mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	外面自然釉 付着
4	須恵器	杯蓋	20 号墳	玄室床 面付近	14.1	4.5	－	全体： 8/12 口径： 6/12	灰 (N6/0)	密（まれに 2 mm 大の白色砂 粒、1mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	火襷あり
5	須恵器	杯蓋	20 号墳	玄室床 面付近	14.4	4.1	－	口縁部 一部欠 損	灰 (N6/1)	密（3mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	
6	須恵器	杯蓋	20 号墳	玄室床 面付近	13.9	4.2	－	11/12	灰 (N5/0)	密（2mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	
7	須恵器	杯蓋	20 号墳	玄室床 面付近	14.2	4.6	－	口縁部 一部欠 損	灰 (N4/0)	密（2mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	外面上部に 工具痕あり
8	須恵器	杯蓋	20 号墳	玄室床 面付近	14.5	4.0	－	完存	灰 (5Y6/1)	密（3mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ、外）回転 ナデ、回転ヘラ ケズリ	火襷あり
9	須恵器	杯蓋	20 号墳	玄室床 面付近	12.6	4.0	－	口： 7.5/12 全体： 10/12	灰 (N6/0)	密（1.5mm 以 下の白色・黒色 砂粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズ リ、ナデ	
10	須恵器	杯身	20 号墳	玄室床 面付近	13.1	4.7	－	ほぼ完 存	灰 (N5/0)	密（2mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	外面自然釉 付着
11	須恵器	杯身	20 号墳	玄室床 面付近	12.7	4.1	－	完存	灰白 (7.5Y7/1) ～灰白 (N7/0)	密（2mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	
12	須恵器	杯身	20 号墳	玄室床 面付近	12.8	3.8	－	完存	黄灰 (2.5Y6/1)	密（2mm 以下 の黒色砂粒・白 色砂粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	
13	須恵器	杯身	20 号墳	玄室床 面付近	12.2	4.1	－	11/12	内面：明褐 (7.5Y5/6) 外面：暗 灰 (N3/0)	密（1mm 以下 の白色・褐色砂 粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	底部工具痕 あり

番号	種類	器種	地区名	出土 地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備 考
14	須恵器	高杯 蓋	20号墳	玄室床 面付近	14.3	5.0	—	ほぼ完 存（口 縁部少 し欠 損）	灰（N6/0）	密（6mm大チ ャート、2mm 大の白色砂粒、 1mm以下の白 色・黒色砂粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	外面自然釉 付着 貼付けつま み
15	須恵器	高杯 蓋	20号墳	玄室床 面付近	14.0	4.6	—	完存	灰白 （25Y7/1）	密（3mm以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズ リ、	貼付けつま み
16	須恵器	高杯 蓋	20号墳	玄室床 面付近	14.5	5.3	—	完存	内面：灰 白（N7/0） 外面：灰 白（N8/0 ～灰6/0）	密（2mm大の 白色砂粒、1 mm以下の白 色・黒色砂粒、 石英）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズ リ、	外面自然釉 付着 貼付けつま み
17	須恵器	有蓋 高杯	20号墳	玄室床 面付近	12.7	9.0	10.5	口縁部 一部欠 損	灰白 （5Y7/1）	密（4mm半透 明砂粒、2mm 以下の白色・黒 色砂粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 ナデ、回転ヘラ ケズリ	
18	須恵器	有蓋 高杯	20号墳	玄室床 面付近	12.7	8.4	10.0	受け部 一部欠 損	灰白 （10YR7/1）	密（3mm大の 白色砂粒、1 mm以下の白 色・黒色砂粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	
19	須恵器	壺蓋	20号墳	玄室床 面付近	9.8	3.6	—	完存	灰（N6/0）	密（2mm以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	外面自然釉 付着
20	須恵器	椀	20号墳	玄室床 面付近	8.7	7.1	—	口縁部 一部欠 損	灰 （N5/0）	密（1mm以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	外面自然釉 付着、沈線 あり
21	須恵器	杯身	20号墳	羨道	13.1	4.4	—	ほぼ完 存	灰黄 （25Y7/2）	密（1mm以下 の白色・黒色砂 粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 未調整	
22	須恵器	杯身	20号墳	羨道	11.8	3.8	—	全体： 9/12 口径： 8/12	灰（N5/0）	密（3mm以下 の白色砂粒、1 mm以下の白 色・黒色砂粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズ リ、未調整	
23	須恵器	壺蓋	20号墳	羨道	9.1	2.9	—	完存	内面：灰 （N5/0） 外面：灰 （N5/0）～ 灰（N4/0）	密（5～2mm 大の白色砂粒、 1mm以下の白 色砂粒）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	
24	須恵器	椀	20号墳	羨道	(8.0)	[5.6]	—	口： 7.5/12	灰白 （N7/0）、黒 褐（25Y3/1） ～にぶ い黄橙 （10YR7/4）	やや密（1mm 以下の白色・黒 色砂粒）	内・外）回転ナ デ	全面に自然 釉付着
25	土師器	高杯 か	20号墳	羨道	13.6	(4.9)	—	口： 3/12	浅黄橙 （75YR8/6）	密（4mm以下 の白色・黒色・ 茶色砂粒）	内）ハケ、ユビ オサエ 外）ハケ、ケズ リ	
124	土師器	甕	20号墳	石室 上層	(15.6)	[3.0]	—	1/12以下	にぶい橙 （75YR6/4） 断：橙 （5YR6/6）	やや粗（1～ 1.5mmの白色・ 半透明・透明・ 薄茶色砂粒）	内・外）ナデ	
125	土師器	杯	20号墳	石室 上層	(12.0)	[4.4]	—	1.5/12	にぶい橙 （75YR5/3）	粗（1.5mm以 下の白色・半透 明砂粒）	内）ナデ 外）ナデ、ケズ リ	

番号	種類	器種	地区名	出土 地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備 考
126	土師器	高杯	20 号墳	石室 上層	—	[5.3]	(8.4)	4/12 弱	外面： 浅黄橙 (75YR8/4) 内面：橙 (5YR7/6) 断：に ぶい橙 (75YR7/4)	やや粗（1.5mm 以下の灰色・赤 茶色砂粒、1 mm 以下の黒色 砂粒）	内）ナデ、ユビ オサエ 外）ナデ、ケズ リ	
127	須恵器	杯蓋	20 号墳	石室 上層	14.4	[4.2]	—	口： 6/12	灰（N6/1）	やや密（1 mm 以下の白色・黒 色砂粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	外面自然釉 付着
128	須恵器	杯蓋	20 号墳	石室 上層	(12.2)	[2.6]	—	口： 4.5/12	灰白 (2.5Y7/1)	密（1 mm 以下 の白色・黒色砂 粒）	内・外）回転ナ デ	
129	須恵器	杯蓋	20 号墳	石室 上層	14.3	[3.8]	—	4/12	灰（N6/0） 断：にぶ い黄橙 (10YR7/2)	密（0.5mm 以下 の白色・黒色砂 粒、1～2mm 大の白色・黒色 砂粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	
130	須恵器	杯身	20 号墳	石室 上層	12.5	4.1	—	11/12	にぶい橙 (75YR7/4) ～褐灰 (75YR5/1)	やや粗（1 mm 以下の白色・ 透明色砂粒、 1.5mm 以下の 半透明・黒色砂 粒、）	内）回転ナデ、 ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	外面底部に ヘラ記号
131	須恵器	杯身	20 号墳	石室 上層	11.8	3.6	—	ほぼ完 存	灰（N6/0）	やや密（3 mm 大の白色砂粒、 1 mm 以下の白 色・黒色砂粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	外面自然釉 付着
132	須恵器	壺	20 号墳	石室 上層	[12.2]	[4.8]	—	最大 径：ほ ぼ 6/12	内面：に ぶい褐 (75YR6/3) 外面：灰白 (10YR7/1)	密（1 mm 以下 の白色・茶色砂 粒、2 mm 大の 白色・茶色砂粒）	内）回転ナデ、 未調整 外）カキ目、回 転ヘラケズリ	
133	須恵器	無蓋 高杯	20 号墳	石室 上層	(15.3)	[3.2]	—	1/12 以下	褐灰 (10YR6/1) 断：にぶ い赤褐 (5YR5/3)	密（0.5mm 以下 の白色・黒色 砂粒）	内・外）回転ナ デ	
134	須恵器	無蓋 高杯	20 号墳	石室 上層	(13.0)	[2.1]	—	1/12 以下	灰褐 (75YR4/1) 断：黄灰 (2.5Y6/1)	密（0.5mm 以下 の白色砂粒、 1 mm 以下の黒 色砂粒、1.5mm 大の白色砂粒）	内・外）回転ナ デ	
135	須恵器	長頸 壺	20 号墳	石室 上層	12.5	[1.3]	—	1.5/12 弱	黄灰 (2.5Y6/1) 断：にぶ い黄橙 (10YR7/3)	やや密（1 mm 以下の白色・灰 色・薄茶色砂粒）	内・外）回転ナ デ	
136	土師器	杯	20 号墳	石室 上層	(13.9)	3.2	—	口： 3.5/12	浅黄橙 (75YR8/4) 外面底 部：褐灰 (10YR5/1)	密（1 mm 以下 の黒色砂粒、 0.5mm 以下の 赤茶色・白色砂 粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 糸切り高台	
137	土師器	皿	20 号墳	石室 上層	(10.3)	1.8	—	3/12	橙 (5YR7/6)	やや粗（1.5mm 以下の赤茶色砂 粒、1 mm 以下 の白色・半透明 砂粒、0.5mm 以下 の黒色砂粒）	内）ナデ 外）ナデ、ユビ オサエ	
138	土師器	皿	20 号墳	石室 上層	(9.3)	[2.2]	—	1.5/12	橙 (5YR6/6)	密（0.5mm 以下 の赤茶色・黒 色砂粒）	内）ナデ 外）ナデ、ユビ オサエ	
139	土師器	皿	20 号墳	石室 上層	(8.4)	1.5	—	口： 4.5/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密（1 mm 以下 の白色・赤茶色 砂粒）	内）ナデ 外）ナデ、ユビ オサエ	

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備考
140	土師器	皿	20号墳	石室上層	(7.8)	[2.1]	—	口： 2/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 (0.5mm 以下の白色砂粒)	内) ナデ 外) ユビオサエ	
141	瓦器	椀	20号墳	石室上層	—	[0.9]	(6.8)	高台： 2/12 弱	灰 (N4/0)	密	内) 暗文 外) ナデ、貼り付け高台	
142	土師器	羽釜か	20号墳	石室上層	(14.2)	[2.5]	—	1/12 以下	橙 (5YR6/6)	やや密 (1～1.5mm の白色・薄茶色・半透明・透明砂粒)	内・外) ナデ	外面煤付着
153	土師器	高杯	20号墳	墳丘上層	最大径 (9.2)	[7.7]	—	最大径： 1/12 以下	橙 (5YR6/6)	やや粗 (0.5～1mm 前後の黒灰色・白色・灰色・褐色粒)	内) ナデ 外) ナデ、ユビオサエ	
154	須恵器	杯身	20号墳	墳丘上層	11.4	4.5	—	5/12	内：灰 (N4/0) 外：暗灰 (N3/0)	やや粗 (0.5mm 前後の白色砂粒)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
155	須恵器	杯身	20号墳	墳丘上層	12.5	4.55	—	11.5/12 以上	灰白 (10YR8/1)	やや粗 (1mm 以下の白色砂粒、2mm 以下の暗灰色砂粒、)	内) 回転ナデ、ナデ 外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ	外面底部にヘラ記号あり
156	須恵器	杯身	20号墳	周溝	(12.2)	[4.2]	—	口： 2/12 強	外面：灰 (N5/0) 内面：青灰 (5PB6/1)	密 (1mm 以下の白色・黒色砂粒)	内) 回転ナデ、ナデ 外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ	一部自然釉付着
157	須恵器	杯身	20号墳	墳丘上層	(13.3)	3.55	—	口： 2/12	灰白 (2.5Y7/1)	密 (1mm 以下の白色・黒色砂粒、2mm 大の白色砂粒、)	内) 回転ナデ、ナデ 外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ	外面自然釉付着
158	須恵器	杯身	20号墳	墳丘上層	(14.1)	[4.0]	—	2/12 弱	灰 (N6/0)	密 (0.5mm 前後の白色砂粒)	内) 回転ナデ、ナデ 外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
159	須恵器	杯身	20号墳	墳丘上層	(12.5)	[2.7]	—	口： 4/12 弱	内面：黄灰 (2.5Y5/1) 外面：灰黄褐 (10YR6/2)	密 (1mm 以下の白色砂粒)	内・外) 回転ナデ	重ね焼き痕あり
160	須恵器	杯蓋	20号墳	墳丘上層	—	3.7	(13.9)	2/12	灰 (N6/0)	やや粗 (0.5～1mm 前後の白色・黒灰色粒)	内) 回転ナデ、外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ、ケズリ	
161	須恵器	杯蓋	20号墳	周溝	15.4	3.8	—	口： 2/12 弱	内面：灰 (N6/0) 外面：灰白 (N7/0)	密 (1mm 以下の白色砂粒、黒色・透明の極細砂粒)	内) 回転ナデ、ナデ 外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切りのち未調整	
162	須恵器	杯蓋	20号墳	墳丘上層	(14.5)	3.4	—	口： 1/12 蓋上面： 5/12	灰 (N5/0)	粗 (0.5～1mm 前後の白色粒、4mm 大の白色粒)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、ナデ、回転ヘラケズリ	
163	須恵器	杯蓋	20号墳	墳丘上層	—	3.6	(13.8)	5/12	灰 (N6/0)	やや粗 (0.5mm 前後の白色砂粒)	内) 回転ナデ、ケズリ 外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ	
164	須恵器	高杯蓋	20号墳	墳丘上層	最大径： (14.3)	[3.8]	—	最大径部： 3/12	灰 (N5/0)	密 (3mm 以下の白色・灰色・黒色粒)	内) 回転ナデ、ナデ 外) 回転ナデ、回転ヘラケズリ、ナデ	
165	須恵器	高杯	20号墳	墳丘上層	—	[7.0]	(14.2)	1/12	にぶい橙 (7.5YR7/3)	やや粗 (0.5mm 前後のは白色砂粒、3mm 前後の白色粒)	内) 回転ナデ 外) カキ目	

番号	種類	器種	地区名	出土 地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備 考
166	須恵器	高杯	20 号墳	墳丘 上層	基部径 (3.0)	[6.4]	脚底 部 (11.0)	脚径： 1.5/12 弱	外面： 暗灰黄 (2.5Y5/2) 内面：灰白 (2.5Y8/1)	やや粗（2mm 以下の暗灰色・ 黒色砂粒、1 mm 以下の白色 砂粒、）	内）回転ナデ 外）回転ナデ（消 し）、カキ目	
167	須恵器	鉢	20 号墳	周溝	－	[7.4]	10.4	底部： 12/12	灰白 (2.5Y7/1)	密（0.5mm 前 後の白色・黒灰 色砂粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 ナデ、格子状タ タキ	
168	須恵器	長頸 壺	20 号墳	墳丘 上層	基部 径：6.1	[7.9]	－	基部 径部： 9/12	灰（N7/0）	密（2mm 以下 の白色・黒色粒）	内）回転ナデ、 ナデ、ユビオサ エ 外）回転ナデ	体部に自然 釉付着
169	須恵器	壺	20 号墳	周溝	最大 径： (17.3)	[10.5]	－	－	灰（N6/0）	密（3mm 前 後の白色粒、 1mm 以下の白 色・黒色粒）	内）回転ナデ、 ユビオサエ 外）回転ナデ、 回転ヘラケズリ	内外面に自然 釉付着
170	須恵器	甕	20 号墳	墳丘 上層	(21.5)	[4.5]	－	1/12 以下	灰（5Y5/1） 自然釉： 灰（5Y4/1）	やや密（0.5mm 前後の白色・黒 色砂粒）	内・外）回転ナ デ	口縁付近自然 釉付着
171	須恵器	甕	20 号墳	墳丘 上層	(16.0)	[5.3]	－	1/12	灰黄褐 (10YR5/2)	やや密（0.5mm 前後の白色・黒 色砂粒）	内）回転ナデ、 タタキ 外）回転ナデ、 同心円タタキ	
172	須恵器	壺か 甕	20 号墳	墳丘 上層	最大 径： (26.5) 頸部 径： (14.4)	[8.1]	－	－	灰（5Y6/1）	やや密（白色・ 茶色砂粒）	内）回転ナデ、 ケズリ、ナデ 外）回転ナデ、 ナデ	外面自然釉 付着
173	須恵器	提瓶	20 号墳	墳丘 上層	本体径 (16.3)	[3.9]	－	－	灰黄褐 (10YR6/2)	密（1mm 内の 黒色・白色砂粒）	内）ナデ 外）カキ目	外面自然釉 付着
174	須恵器	壺	20 号墳	墳丘 上層・ 周溝	(28.4)	[16.9]	－	口： 1/12 以下 頸部： 4/12	黄灰 (2.5Y6/1) 自然釉：灰 オリーブ (7.5Y5/2)	やや密（0.5mm 前後の白色・茶 色砂粒）	内）回転ナデ、 ナデ、同心円タ タキ 外）回転ナデ、 波状文、タタキ	全体に自然 釉付着
175	須恵器	壺	20 号墳	墳丘 上層	(32.0)	[9.2]		1/12	灰 (7.5Y5/1)	やや密（白色・ 黒色極細砂粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 波状文	
176	須恵器	甕	20 号墳	墳丘 上層	(21.3)	[6.8]	－	2/12 弱	褐灰 (7.5YR4/1)	やや密（1mm 前後の白色砂 粒）	内）ナデ、同心 円タタキ 外）ナデ、タタ キ	
177	須恵器	杯B 蓋	20 号墳	墳丘 上層	最大径 (6.2) つまみ 径(3.2)	[1.1]	－	－	灰白 (2.5Y7/1)	やや密（0.5mm 位の黒色砂粒）	内・外）ナデ	
178	須恵器	杯B 蓋	20 号墳	墳丘周 辺精査	(11.7)	[0.8]	－	4/12	灰（N6/0）	密（0.5mm 前 後の白色砂粒）	内・外）回転ナ デ	口縁部に自然 釉付着
179	須恵器	壺	20 号墳	墳丘 上層	最大径 (16.0)	[10.5]	(9.6)	底部： 3/12 体部： 5/12	灰 (7.5Y5/1)	やや粗（1mm 前後の白色・黒 色砂粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 ナデ、貼り付け 高台	体部に自然 釉付着
180	須恵器	碗	20 号墳	周溝	－	[1.0]	(5.8)	高台： 2/12 強	灰（5Y6/1）	密（0.5mm 以下 の白色砂粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転ヘラ切り	
181	須恵器	碗	20 号墳	墳丘 上層	－	[1.7]	(6.0)	4/12	灰 (7.5Y6/1)	密（0.5mm 前 後の白色砂粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転糸切り	
182	須恵器	碗	20 号墳	墳丘 上層	－	[3.7]	(6.0)	2/12	灰白 (2.5Y7/1)	密（0.5mm 前 後の白色砂粒）	内）回転ナデ 外）回転ナデ、 回転糸切り	

番号	種類	器種	地区名	出土 地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備 考
183	黒色 土器	椀	20号墳	墳丘 上層	—	[1.5]	6.5	6/12	黒褐 (2.5Y3/1)	密	内) ヘラケズリ 後ヘラミガキ 外) ナデ、糸切 り	
184	黒色 土器	椀	20号墳	墳丘 上層	(13.5)	[2.8]	—	1/12	暗灰 (N3/0)	やや密	内) ミガキ 外) ミガキ	
185	黒色 土器	椀	20号墳	墳丘 上層	—	[1.7]	5.8	5/12	暗灰 (N 3/0)	密 (0.5mm 以 下の白色砂粒)	内) ミガキ 外) ミガキ、ナ デ、貼り付け高 台	
186	灰釉 陶器	椀	20号墳	墳丘 上層	—	[2.6]	7.0	10/12	褐灰 (10YR6/1)	密 (0.5 ~ 1mm 前後の白色・黒 灰色粒)	内) 回転ナデ 外) 回転ヘラ切 り、回転ナデ、 貼り付け高台	
187	土師器	甕	20号墳	墳丘 上層	(23.4)	[3.8]	—	3/12	内：にぶ い赤褐 (5YR5/4) 外：灰褐 (5YR4/2)	粗 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) ハケ、ナデ、 ユビオサエ 外) ナデ、ハケ	
188	土師器	羽釜	20号墳	墳丘 上層	(21.6)	[3.2]	—	1/12	にぶい橙 (7.5YR6/4)	粗 (0.5 ~ 1mm 前後の白色・黒 灰色・灰色粒)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、 回転ヘラケズリ	
189	土師器	甕	20号墳	墳丘 上層	22.5	[13.5]	—	3/12	橙 (5YR6/6)	やや粗 (1 mm 前後の白色・茶 色・灰色砂粒)	内・外) ナデ、 ハケ	
190	土師器	甕	20号墳	墳丘 上層	(23.8)	[13.0]	—	4/12	灰黄褐 (10YR4/2)	やや粗 (0.5 ~ 1 mm 前後の白 色・茶色砂粒)	内) ハケ、ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ、ハケ	
191	土師器	皿	20号墳	墳丘 上層	(13.0)	2.1	—	2/12	浅黄橙 (10YR8/3) 断：褐灰 (10YR5/1)	密 (1 mm 以下 の赤茶色・黒色 砂粒)	内) ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ	
192	土師器	皿	20号墳	墳丘 上層	(9.8)	[1.7]	—	1.5/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) ナデ 外) ナデ、未調 整	
193	土師器	皿	20号墳	墳丘 上層	(9.9)	1.1	—	2/12	にぶい橙 (7.5YR7/4)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) ナデ、ユビ オサエ 外) ナデ	
194	土師器	皿	20号墳	墳丘 上層	(8.8)	1.5	—	口： 5.5/12	にぶい橙 (7.5YK7/4) 断：暗灰 (N3/0)	密	内) ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ	
195	土師器	皿	20号墳	墳丘 上層	7.2	1.8	—	10/12	浅黄橙 (7.5YR8/3)	やや粗 (0.5 ~ 1mm 前後の白 色・白灰色・茶 色粒)	内・外) ナデ	
196	土師器	皿	20号墳	墳丘 上層	(9.1)	[1.9]	—	口： 1.5/12 強	浅黄橙 (7.5YR8/3) 内面：に ぶい褐 (7.5YR5/4)	密 (1mm 以下 の半透明・赤茶 色砂粒)	内) 回転ナデ 外) 回転ナデ、 ユビオサエ	
197	土師器	皿	20号墳	墳丘 上層	(9.9)	[1.9]	—	口： 2/12	浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：に ぶい褐 (7.5YR5/4)	密 (0.5mm 以 下の白色・半透 明砂粒)	内) ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ	
198	土師器	皿	20号墳	墳丘 上層	(13.7)	3.0	—	1.5/12	にぶい黄橙 (10YR7/4)	密	内) ナデ、工具 によるナデ 外) 工具による ナデ、ナデ、ユ ビオサエ	
199	土師器	皿	20号墳	墳丘 上層	(15.5)	[3.5]	—	1/12 以下	にぶい黄橙 (10YR6/4)	密	内) ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ	
200	土師器	皿	20号墳	墳丘 上層	(6.8)	[1.5]	—	口： 2/12 強	橙 (5YR6/6)	密	内) ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ	

番号	種類	器種	地区名	出土 地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備 考
201	土師器	皿	20 号墳	墳丘 上層	(8.1)	1.5	－	4/12	内面：に ぶい黄橙 (10YR6/4) 外面： 浅黄橙 (10YR8/4)	密 (1.5mm 以 下の白色砂粒、 0.5mm 以下の 黒色砂粒)	内) ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ	
202	土師器	皿	20 号墳	墳丘 上層	(7.0)	1.5	－	3/12 強	にぶい黄橙 (10YR6/4)	密	内) ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ	
203	瓦器	皿	20 号墳	墳丘 上層	(10.0)	2.1	－	2/12	灰 (N4/0)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) ミガキ、ナ デ 外) ナデ	
204	瓦器	皿	20 号墳	墳丘 上層	10.1 ～ 8.9	2.5 ～ 1.5	－	完存	灰 (N4/0)	密 (白色極細砂 粒)	内) 暗文、ミガ キ 外) ユビオサエ、 ミガキ	
205	瓦器	椀	20 号墳	墳丘 上層	14.6	5.7	5.8	7/12	暗青灰 (5 B 3/1)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) ミガキ、暗 文 外) ミガキ、ナ デ、貼り付け高 台	
206	瓦器	椀	20 号墳	墳丘 上層	14.6	6.1	6.0	口： 6/12	灰 (N5/0)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) ミガキ、ユ ビオサエ、暗文 外) ミガキ、ナ デ、貼り付け高 台	
207	瓦器	椀	20 号墳	墳丘 上層	(15.8)	[4.6]	－	1/12	暗灰 (N 3/0)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内・外) ミガキ、 ユビオサエ	
208	瓦器	椀	20 号墳	墳丘 上層	(14.4)	[5.0]	－	口： 1.5/12	内面：暗灰 (N3/0) 外面：に ぶい黄橙 (10YR7/3)	密 (0.5mm 以 下の灰色砂粒)	内) ミガキ 外) ナデ、ミガ キ、ユビオサエ	
209	瓦器	椀	20 号墳	墳丘 上層	14.7	5.5	－	6/12	灰 (N4/0)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) マメツによ る調整不明瞭 外) マメツによ る調整不明瞭、 貼り付け高台	
210	瓦器	椀	20 号墳	墳丘 上層	(14.4)	[4.6]	－	口： 2/12 弱	暗灰 (N3/0)	密	内) ナデ、ミガ キ 外) ナデ、ユビ オサエ、ミガキ	
211	瓦器	椀	20 号墳	墳丘 上層	(11.8)	[4.1]	－	口： 1.5/12	炭素付着 部：灰 (N4/0) 炭素未付着 部：灰白 (10YR8/1) ～にぶ い黄橙 (10YR7/3)	密	内) ナデ、ミガ キ 外) ナデ、ユビ オサエ、貼り付 け高台	
212	陶磁器	白磁 椀	20 号墳	墳丘 上層	(14.6)	[3.0]	－	1/12	灰白 (5Y8/2)	密	内・外) 施釉	
213	陶磁器	白磁 椀	20 号墳	墳丘 上層	(15.3)	[2.6]	－	口： 1.5/12	素地：灰白 (10YR8/1) 釉調：灰白 (2.5Y8/1)	密 (黒色極細砂 粒)	内・外) 施釉	
214	陶磁器	白磁 椀	20 号墳	墳丘 上層	－	[1.8]	5.3	高台： 9/12	素地：灰白 (10YR8/2) 釉調：灰白 (2.5Y8/2)	密 (0.5mm 以 下の黒色砂粒)	内) 施釉 外) 施釉、削り 出し高台	
215	陶磁器	白磁 皿	20 号墳	墳丘 上層	－	[2.3]	(5.6)	口： 2/12 強	素地：白 (N9/0) 釉調：灰白 (2.5Y8/2)	密	内) 露胎部 外) 施釉、露胎 部、割り高台？	高台に切り 込みあり

番号	種類	器種	地区名	出土地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備考
216	陶磁器 (同安窯)	青磁 碗	20号墳	墳丘 上層	—	[3.8]	—	—	灰オリーブ (5Y6/2)	精良	内・外) 施釉	
217	陶磁器	青磁 碗	20号墳	墳丘 上層	(15.6)	[4.5]	—	2/12	灰白 (10Y7/1)	密	内・外) 施釉	
218	陶磁器	染付 碗	20号墳	墳丘 上層	—	[2.7]	(3.9)	2/12	灰白 (N8/0)	密	内) 施釉 外) 施釉、露胎 部	中国製饅頭 心
219	陶器 (丹波)	壺	20号墳	墳丘 上層	長：4.7	幅： 6.2	—	—	内：褐 (75YR4/4) 外：灰 (5Y6/1) 釉：灰オ リーブ (5Y4/2)	密 (3mm 大の 黒色粒、1mm 以下の黒色・白 色粒)	内・外) ロクロ ナデ	線刻あり
220	須恵器	鉢	20号墳	墳丘 上層	—	[8.4]	(12.4)	底部： 12/12	浅黄 (2.5Y7/3)	粗 (0.5～2mm 前後の灰色・黒 灰色・白色粒)	内) ナデ 外) 回転ナデ、 糸切り高台	内面底部す り痕跡、底 部外縁摩耗
221	須恵器	鉢	20号墳	墳丘 上層	(25.8)	[7.3]	—	1.5/12	黄灰 (2.5Y5/1)	やや粗 (1mm 位までの白色砂 粒)	内) ナデ、ユビ オサエ 外) ナデ	内面下部す り痕跡
222	陶器 (丹波)	鉢	20号墳	墳丘 上層	(26.0)	[5.2]	—	1/12 以 下	内：に ぶい褐 (75YR5/3) 外) にぶ い赤褐 (5YR4/3)	やや粗 (0.5mm 前後の黒灰色・ 茶色砂粒)	内) すり目 外) 施釉	
223	土師器	花塩 壺	20号墳	墳丘 上層	—	[2.1]	2.7	12/12	にぶい橙 (75YR6/4)	密	内・外) ユビオ サエ	
224	陶器 (肥前)	碗	20号墳	墳丘 上層	—	[2.1]	4.5	12/12	にぶい褐 (75YR5/4) 素地：黒 (N2/0)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) 施釉 外) 露胎部、削 り出し高台	
225	陶器 (肥前)	碗	20号墳	墳丘 上層	—	[3.0]	4.5	12/12	にぶい黄橙 (10YR7/2) 釉：灰オ リーブ (5Y5/2)	密	内) 施釉 外) 施釉、露胎 部、削り出し高 台	
226	陶器 (肥前)	皿	20号墳	墳丘 上層	—	[1.2]	4.5	12/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) 施釉 外) 露胎部、削 り出し高台	胎土目
227	陶器 (丹波)	德利	20号墳	墳丘 上層	(4.0)	[9.2]	—	3/12	素地： 灰黄褐 (10YR6/2) 釉：黒褐 (10YR3/2)	密	内・外) 施釉	
228	瓦質土 器	土管 ?	20号墳	墳丘 上層	(21.0)	[4.4]	—	1.5/12	褐灰 (75YR4/1)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) 回転ナデ 外) ミガキ、ナ デ	
229	土師質	人形 (キ ツ ネ)	20号墳	墳丘 上層	長：6.6	幅： 3.8	厚さ： 3.2～ 5.0	—	にぶい橙 (75YR6/4)	やや密 (0.5mm 以下の白色・赤 褐色砂粒)	内・外) ナデ	18 C 前半頃 木型による 1品もの
230	土師質	稲荷 狐	20号墳	墳丘 上層	全長： 15.3 最大 幅： 9.0・5.8	—	—	7/12	にぶい橙 (75YR7/4)	密 (0.5mm 以 下の黒色・白色 砂粒、微細な雲 母)	内・外) 二枚型 成形、ユビオサ エ	土型作り。 外面にキラ 粉
231	土師質	稲荷 狐	20号墳	墳丘 上層	全長： 19.2 最大 幅： 8.8・5.4	—	—	—	にぶい橙 (75YR7/4)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒、 2～3mm 前後 の白色・灰色粒、 微細な雲母)	内・外) 二枚型 成形、ユビオサ エ	土型作り。 外面にキラ 粉

番号	種類	器種	地区名	出土 地点	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	胎土	調整	備 考
236	土師器	高杯	20 号墳	墳丘盛 土内	16.8	[6.1]	－	口： 12/12	内：橙 (5YR7/6) 外：にぶ い黄橙 (10YR7/3)	やや粗 (0.5 ～ 1mm 前後の白 色・黒灰色・茶 色粒)	内・外) ナデ	
237	土師器	高杯	20 号墳	墳丘盛 土内	(13.0)	[4.0]	－	2.5/12	外・断 面：浅黄橙 (7.5YR8/4) 内面：橙 (5YR7/6)、 にぶい褐 (7.5YR5/3)	粗 (2 ～ 3mm の茶色・白色・ 半透明砂粒、1 mm 以下の黒色 砂粒、3 mm 大 の灰褐色砂粒)	内・外) マメツ のため調整不明 瞭	
238	土師器	壺	20 号墳	墳丘盛 土内	頸部 径：8.6	[6.9]	－	頸部： 1/12 以 下	にぶい褐 (7.5YR5/4)	密 (1mm 以下 の黒色・白色粒)	内) ナデ 外) ナデ、ミガ キ	外面一部黒 斑あり
239	土師器	皿	20 号墳	石組遺 構 S X 50	12.7	2.3	－	口： 11/12	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密 (0.5mm 以 下の白色砂粒)	内・外) ナデ、 ユビオサエ	
240	土師器	皿	20 号墳	石組遺 構 S X 50	8.6	1.5	－	口： 8/12	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密 (0.5mm 以 下の黒灰色砂 粒)	内) ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ	
241	土師器	皿	20 号墳	石組遺 構 S X 50	8.3	1.4	－	完存	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 (0.5mm 以 下の黒灰色砂 粒・赤色斑粒)	内) ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ	
242	土師器	皿	20 号墳	石組遺 構 S X 50	8.2	1.5	－	ほぼ完 存	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密 (0.5mm 以 下の白色・灰色 砂粒)	内・外) ナデ	
243	土師器	皿	20 号墳	石組遺 構 S X 50	8.6	1.8	－	8/12	灰白 (7.5YR8/2)	密 (0.5 ～ 1mm 前後の白色・灰 色粒)	内・外) ナデ、 ユビオサエ	
244	土師器	皿	20 号墳	石組遺 構 S X 50	8.5	1.6	－	完存	浅黄橙 (7.5YR8/3)	密 (0.5mm 以 下の白色砂粒)	内・外) ナデ	
245	瓦器	椀	20 号墳	石組遺 構 S X 50	(14.0)	[3.7]	－	口： 1.5/12	灰 (N4/0)	密 (0.5mm 前 後の白色砂粒)	内) 調整不明瞭 外) ミガキ	
246	瓦器	椀	20 号墳	石組遺 構 S X 50	－	[2.0]	(5.4)	6/12	暗灰 (N4/0)	密 (0.5mm 以 下の白色・黒色 粒)	内) ミガキ 外) ミガキ、ナ デ、貼り付け高 台	見込みに格 子状のミガ キ
291	土師器	高杯	B 地区	南側排 土中	(25.7)	[7.5]	－	口： 2/12 弱	橙 (5YR7/6)	密 (1 mm 以下 の灰色・白色砂 粒、2 mm 大の 朱色クサリ礫)	内) ミガキ、ナ デ 外) ミガキ、ヘ ラケズリ	杯部内面に 放射状ミガ キ
292	土師器	皿	B 地区	ピット S P 18	10.4	2.0	－	3/12	にぶい橙 (7.5YR7/3)	密 (0.5mm 以 下の黒灰色・茶 色砂粒)	内) ナデ、ユビ オサエ 外) ナデ	
293	土師器	皿	B 地区	重機	(7.5)	1.4	－	6/12	灰白 (7.5YR8/2)	密 (0.5mm 以 下の白色粒)	内・外) ナデ	
294	瓦質 土器	羽釜	B 地区	柵列 S A 35 ピット S P 14	23.0	[13.4]	－	口： 1/12 体： 2/12	内：灰白 (10YR8/2)・ 灰白 (10YR7/1) 外：褐灰 (7.5YR6/1)	やや粗 (0.5 ～ 1 mm 前後の白 色・灰色・黒灰 色粒)	内) ナデ 外) ナデ、ユビ オサエ	外面煤付着

付表4 出土金属製品観察表

番号	種類	器形	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
26	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	5.90	0.40～1.70	0.25	4.00	
27	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	(7.80)	0.40～1.95	0.25～0.30	6.60	
28	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	6.90	0.60～1.95	0.25～0.35	5.40	
29	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	(6.60)	0.55～1.65	0.30	5.00	
30	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	(10.70)	0.40～2.00	0.35～0.40	14.70	木質残存か
31	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	12.40	0.35～2.00	0.25～0.40	16.10	樹皮巻
32	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	(4.05)	2.55	0.25	5.20	
33	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	(3.67)	2.30	0.30	4.80	
34	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	(3.70)	0.65～1.80	0.12～0.15	2.90	
35	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	(2.30)	0.78	0.45	1.70	
36	鉄製品	鏃	20号墳	玄室床面付近	(2.50)	0.70	0.20	1.60	
37	鉄製品	長頸鏃	20号墳	玄室床面付近	18.50	0.32～0.80	0.21～0.40	15.53	樹皮巻
38	鉄製品	長頸鏃	20号墳	玄室床面付近	(14.40)	0.35～1.00	0.25～0.35	13.70	樹皮巻
39	鉄製品	長頸鏃	20号墳	玄室床面付近	(13.70)	0.55～0.90	0.25～0.40	13.76	樹皮巻
40	鉄製品	長頸鏃	20号墳	玄室床面付近	(14.90)	0.35～0.85	0.30～0.40	15.82	樹皮巻
41	鉄製品	長頸鏃	20号墳	玄室床面付近	(13.30)	0.60～1.25	0.30～0.40	12.10	
42	鉄製品	長頸鏃	20号墳	羨道上層	(5.00)	0.50	0.40	5.50	樹皮巻
43	鉄製品	刀子	20号墳	玄室床面付近	(8.55)	0.60～1.40	0.40～0.45	12.40	
44	鉄製品	刀子か	20号墳	玄室床面付近	(4.40)	0.80	0.50	5.20	木質残存
45	鉄製品	刀子か	20号墳	玄室床面付近	(5.40)	0.60	0.30	6.90	木質残存
46	鉄製品	釘	20号墳	玄室床面付近	(4.70)	0.55	0.45	5.70	木質残存
47	鉄製品	鎌	20号墳	玄室床面付近	17.80	2.50	0.40	63.10	
48	鉄製品	鎌	20号墳	玄室床面付近	(7.75)	0.10～1.40	0.20～0.30	8.40	木質付着
49	鉄製品	不明	20号墳	玄室床面付近	(4.60)	0.85	0.60	6.10	
50	鉄製品	不明	20号墳	玄室床面付近	(3.40)	0.65	0.40	3.50	木質残存
51	鉄製品	不明	20号墳	玄室上層	(2.95)	0.75	0.45	3.40	
52	金銅製品	耳環	20号墳	玄室	直径3.00		0.60	14.30	中実、箔はほぼ剥離
143	鉄製品	釘	20号墳	玄室上層	(5.0)	0.45	0.45	5.30	木質残存
144	鉄製品	釘	20号墳	玄室上層	6.50	0.40	0.40	6.70	木質残存
145	鉄製品	釘	20号墳	玄室上層	6.70	0.40	0.40	7.10	木質残存
146	鉄製品	釘	20号墳	玄室上層	(6.90)	0.60	0.50	8.70	木質残存
147	鉄製品	釘	20号墳	玄室上層	7.85	0.55	0.50	10.10	木質残存
148	鉄製品	釘	20号墳	玄室上層	(5.60)	0.75	0.70	11.20	木質残存
149	鉄製品	釘	20号墳	玄室上層	(8.20～)	0.50	0.50	8.00	木質残存
150	鉄製品	釘	20号墳	玄室上層	9.90	0.60	0.50	13.00	木質残存
151	鉄製品	釘	20号墳	玄室上層	(5.20)	0.55	0.45	6.00	木質残存
152	鉄製品	釘	20号墳	玄室上層	(2.80)	0.40	0.40	2.20	木質残存
232	鉄製品	鋌	20号墳	墳丘上層	1.70	1.25	－	3.30	
233	鉄製品	鋌	20号墳	墳丘上層	1.45	1.60	－	3.20	
234	鉄製品	鋌	20号墳	墳丘上層	1.60	1.40	－	3.40	
235	鉄製品	鋌	20号墳	墳丘上層	1.70	1.40	－	3.23	
247	鉄製品	釘	20号墳	石組遺構 S X 50	(2.25)	0.40	0.40	2.18	
248	鉄製品	釘	20号墳	石組遺構 S X 50	(1.90)	0.45	0.45	2.03	
249	鉄製品	釘	20号墳	石組遺構 S X 50	(3.25)	0.50	0.45	3.54	
250	鉄製品	釘	20号墳	石組遺構 S X 50	(3.35)	0.40	0.40	2.80	
251	鉄製品	釘	20号墳	石組遺構 S X 50	(3.45)	0.45	0.50	2.93	

番号	種類	器形	地区名	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
252	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(3.15)	0.45	0.40	3.81	
253	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(3.45)	0.45	0.45	3.81	木質残存
254	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(3.40)	0.60	0.60	3.70	
255	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(3.60)	0.45	0.50	2.90	
256	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.50)	0.50	0.45	4.30	
257	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.50)	0.40	0.45	3.20	
258	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.85)	0.50	0.50	3.23	
259	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.90)	0.50 ~ 0.55	0.55 0.50	4.30	
260	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.95)	0.50	0.45	4.26	
261	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.9)	0.45	0.45	4.11	
262	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.9)	0.45	0.45	5.36	
263	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(5.95)	0.35	0.35	7.00	
264	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	5.60	0.50	0.60	5.40	
265	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	6.32	0.40	0.40	4.70	木質残存
266	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(5.90 ~)	0.45	0.45	4.82	
267	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(6.25)	0.50	0.45	7.98	
268	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(6.30)	0.4 強 ~ 0.45	0.40	6.30	
269	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(6.50)	0.30 ~ 0.45	0.25 ~ 0.40	4.00	
270	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(5.70 ~)	0.40 ~ 0.50	0.35 ~ 0.50	5.92	
271	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	7.40	0.40 ~ 0.45	0.35 ~ 0.45	4.38	
272	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(7.20 ~)	0.49	0.45	5.33	
273	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50 周辺精査	6.35	0.40	0.45	3.90	
274	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50 周辺精査	(3.80)	0.55	0.55	2.80	
275	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.05)	0.41	0.47	2.94	
276	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(3.35)	0.40	0.40	2.50	
277	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(3.35)	0.40	0.35	5.50	
278	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.35)	0.40 ~ 0.60	0.40 ~ 0.60	4.50	
279	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(5.60)	0.42	0.39	4.18	
280	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	5.05	0.40	0.40	4.40	
281	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	5.20	0.50	0.38	4.18	
282	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.50 ~ 6.40)	0.45	0.55	4.81	木質残存か
283	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(5.10)	0.40	0.40	6.10	
284	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(5.60)	0.40 ~ 0.50	0.40 ~ 0.50	5.00	木質残存
285	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(5.00)	0.55	0.45	3.50	
286	鉄製品	釘か	20 号墳	石組遺構 S X 50	(4.70)	0.50	0.50	3.63	
287	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	5.30	0.45	0.45	3.40	
288	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(5.40 ~)	0.30 ~ 0.50	0.35 ~ 0.45	4.31	
289	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(2.30)	0.35	0.30	1.35	
290	鉄製品	釘	20 号墳	石組遺構 S X 50	(2.20)	0.25	0.25	0.50	

付表5 出土玉類観察表

番号	器種	地区名	出土地	長さ 厚み (cm)	径 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	色調	備 考
53	碧玉 管玉	20号墳	玄室	3.4	1.1	8.80	上面：0.4 下面：0.1	濃緑色	片面穿孔
54	碧玉 管玉	20号墳	玄室	3.2	1.1	8.10	上面：0.25 下面：0.1	濃緑色	片面穿孔
55	碧玉 管玉	20号墳	玄室	3.0	1.01	6.60	上面：0.25 下面：0.1	濃緑色	片面穿孔
56	碧玉 管玉	20号墳	玄室	2.6	1.0	4.70	上面：0.4 下面：0.15	濃緑色	片面穿孔
57	水晶 切子玉	20号墳	玄室	1.35	1.1	2.20	上面：0.35 下面：0.15	透明	6面体、片面穿孔、摩耗顕著
58	白玉	20号墳	玄室	0.31	0.7	0.16	0.27	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	滑石製か、摩耗顕著、 一部線刻有りか
59	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.22	0.38	0.06	0.10	水色	
60	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.20	0.35	0.04	0.12	水色	
61	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.21	0.39	0.04	0.13	水色	
62	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.17	0.35	0.03	0.15	水色	
63	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.2	0.35	0.03	0.12	水色	
64	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.2	0.36	0.03	0.10	水色	
65	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.19	0.35	0.03	0.13	水色	
66	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.18	0.29	0.02	0.10	水色	
67	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.1	0.28	0.02	0.15	水色	
68	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.21	0.40	0.04	0.20	水色	
69	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.28	0.4	0.04	0.15	水色	
70	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.31	0.49	0.11	0.15	緑色	
71	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.31	0.39	0.06	0.13	緑色	
72	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.17	0.39	0.04	0.10	緑色	
73	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.17	0.38	0.03	0.19	緑色	一部黒色の変色部分有りか
74	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.21	0.37	0.02	0.15	緑色	
75	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.3	0.45	0.09	0.20	黄色	
76	ガラス 小玉	20号墳	玄室	0.24	0.41	0.05	0.15	黄色	
77	ガラス 玉	20号墳	玄室	(0.75)	1.10	1.08	0.20	青色	全体的に亀裂が入って割れている
78	土製丸 玉か	20号墳	玄室	(0.95)	0.9	0.75	0.10	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	片方の小口欠損
79	土製管 玉か	20号墳	玄室	[2.1]	1.1	2.40	0.45	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	両小口欠損
80	土製丸 玉	20号墳	玄室	0.68	0.85	0.47	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
81	土製丸 玉	20号墳	玄室	0.7	0.9	0.52	0.20	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	

番号	器種	地区名	出土地	長さ 厚み (cm)	径 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	色調	備 考
82	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.6	0.8	0.40	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
83	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.80	0.90	0.54	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
84	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.8	0.80	0.46	0.18	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
85	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.75	0.8	0.48	0.13	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
86	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.65	0.7	0.36	0.15 ~ 0.25	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
87	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.7	0.75	0.40	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
88	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.62	0.75	0.40	0.15 ~ 0.2	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
89	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.52	0.75	0.32	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
90	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.7	0.8	0.41	0.18	黒色 (N2/0)	
91	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.61	0.75	0.30	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
92	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.62	0.8	0.33	0.15	黒色 (N2/0)	
93	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.65	0.7	0.33	0.10	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
94	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.6	0.75	0.33	0.11	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
95	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.75	0.8	0.43	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
96	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.6	0.74	0.31	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
97	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.7	0.8	0.43	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
98	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.65	0.8	0.39	0.15	黒色 (N2/0)	
99	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.68	0.75	0.39	0.20	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
100	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.7	0.75	0.35	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
101	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.75	0.85	0.50	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
102	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.60	0.80	0.43	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
103	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.7	0.73	0.43	0.12	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
104	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.7	0.8	0.43	0.18	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
105	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.70	0.75	0.34	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：褐灰色 (10YR4/1)	
106	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.65	0.80	0.38	0.14	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
107	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.6	0.75	0.37	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
108	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.60	0.80	0.36	0.18	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
109	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.65	0.70	0.32	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
110	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.75	0.82	0.43	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	
111	土製 丸玉	20 号墳	玄室	0.7	0.75	0.37	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺：暗灰色 (N3/0)	

番号	器種	地区名	出土地	長さ 厚み (cm)	径 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	色調	備 考
112	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.55	0.75	0.36	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺；褐灰色 (7.5YR4/1)	
113	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.57	0.75	0.30	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺；褐灰色 (7.5YR4/1)	
114	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.68	0.80	0.41	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺；暗灰色 (N3/0)	
115	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.7	0.8	0.38	0.16	黒色 (N2/0) 孔周辺；暗灰色 (N3/0)	
116	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.75	0.8	0.37	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺；暗灰色 (N3/0)	
117	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.65	0.7	0.40	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺；暗灰色 (N3/0)	片方の小口欠損
118	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.6	0.75	0.34	0.18	黒色 (N2/0) 孔周辺；暗灰色 (N3/0)	
119	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.60	0.85	0.32	0.15	黒色 (N2/0)	
120	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.6	0.8	0.28	0.20	黒色 (N2/0)	
121	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.7	0.80	0.42	0.20	黒色 (N2/0) 孔周辺；暗灰色 (N3/0)	
122	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.65	0.81	0.44	0.15	黒色 (N2/0) 孔周辺；暗灰色 (N3/0)	
123	土製 丸玉	20号墳	玄室	0.72	0.75	0.35	0.21	黒色 (N2/0)	

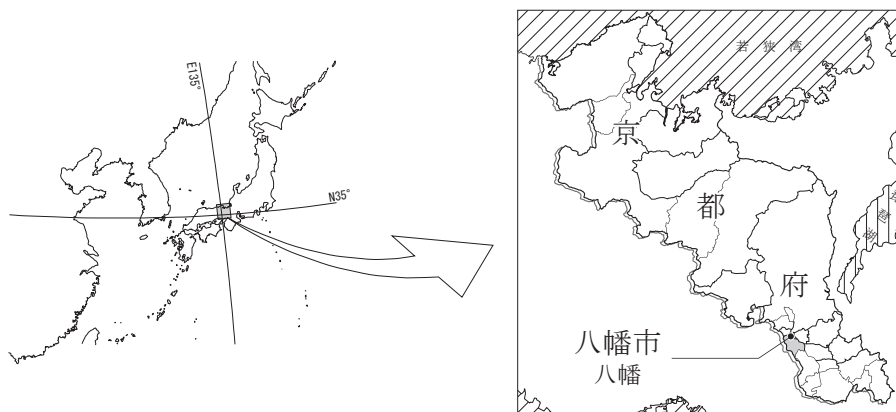
3. 木津川河床遺跡第42次発掘調査報告

1. はじめに

流域下水道は、複数市町村域を対象として下水や雨水を受けるもので、原則として都道府県により設置・管理が行われる。京都府の木津川下流域においては、木津川流域下水道が昭和56(1981)年より供用開始されており、その終末処理場である洛南浄化センターは、南北を宇治川と木津川に挟まれた三川合流地点に位置している^(注1)。三川合流の景観は、河川が人工的に改変されたもので、秀吉による伏見整備に伴って始まる^(注2)。一連の普請で、宇治川は巨椋池へ注いでいたものを付け替えて納所付近で桂川と合流させた。さらにこの約1km下流の地点では、木津川を合流させている。1868(明治元)年には木津川の流路付け替えが着工される^(注3)。明治30(1897)年から明治44(1911)年には国営の淀川改良工事が実施され、宇治川が淀の南側へ付け替えられた。これにより桂川との合流点が約5km下流側へ移動するとともに、宇治川と木津川の間には背割堤が設けられた。その後、大正7(1918)年からの淀川改修増補工事により、宇治川と木津川の合流点が約2km下流側へ移動させ、現在の景観が完成する^(注4)。

上記変遷のうち、木津川付け替えによる新旧流路と現桂川に挟まれた東西約4.5km・南北2.5kmに及ぶ三角形の範囲が木津川河床遺跡として登録されており、河川で洗われた遺物が採集される場所として古くから認識されてきた。洛南浄化センター内では昭和57(1982)年の木津川河床遺跡第1次となる発掘調査を嚆矢に多数の調査が実施されており、木津川河床遺跡とも縁の深い施設である。今回報告する木津川河床遺跡第42次発掘調査は、木津川流域下水道洛南浄化センター内における急ろ放流渠整備に伴う発掘調査である。本書は現地調査を担当した調査課加藤雅士が執筆した。

なお、調査に係る経費は京都府流域下水道事務所が全額負担した。



第1図 八幡市と遺跡の位置

〔調査体制等〕

〈現地調査〉

調査責任者 調査課長 小池 寛

調査担当者 調査課調査第1係長 森島康雄

同 調査第1係主任 加藤雅士

調査場所 八幡市八幡一丁目

現地調査期間 令和5年11月6日～令和5年12月26日

調査面積 340m²

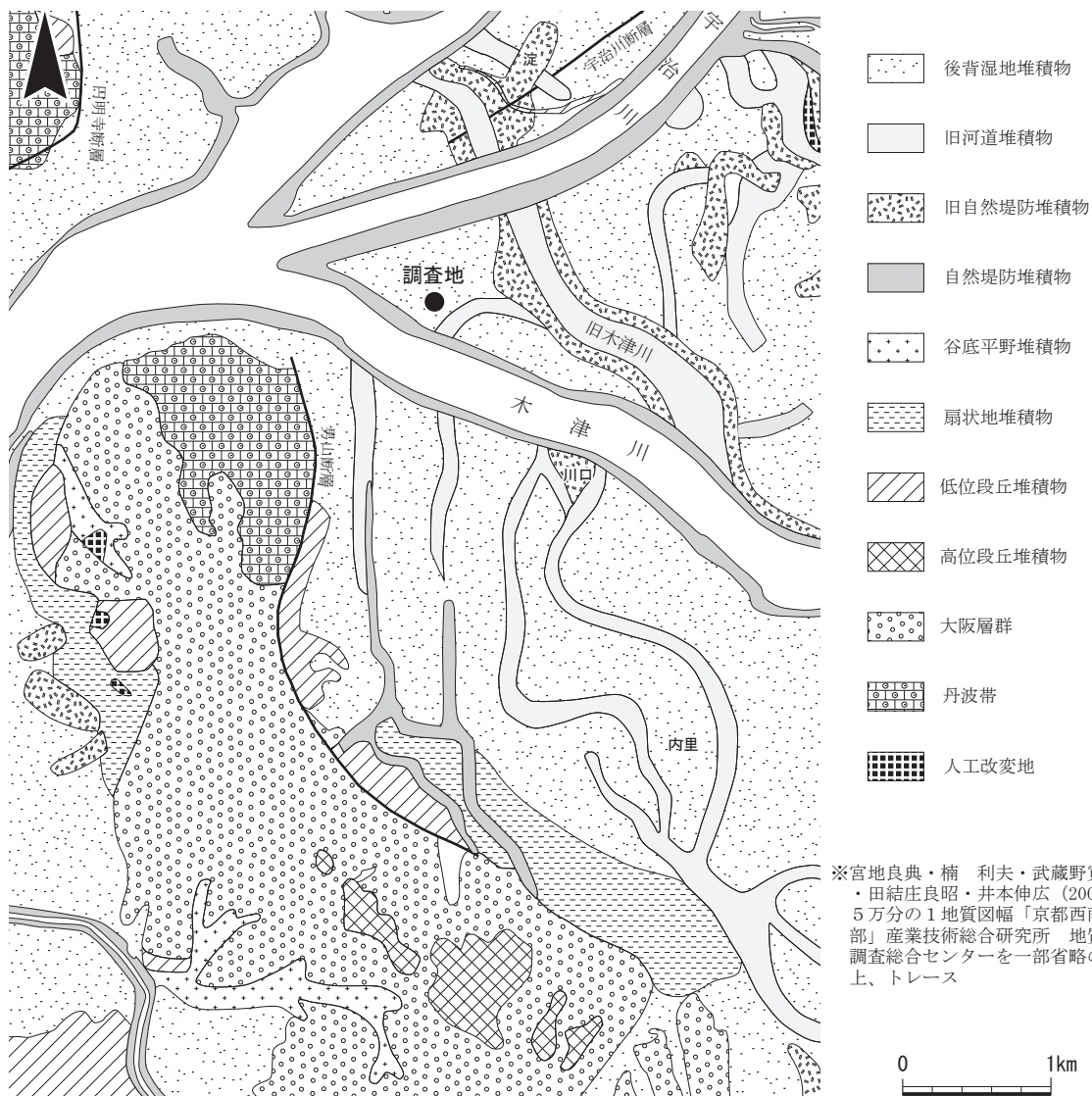
〈整理作業〉

調査責任者 調査課長 小池 寛

調査担当者 調査課調査第1係長 森島康雄

同 調査第1係主査 加藤雅士

整理作業期間 令和6年11月1日～令和7年3月31日



第2図 周辺地質分布図

2. 位置と環境

1) 地理的環境

木津川河床遺跡は京都府八幡市の北端部に位置する。遺跡範囲のほとんどは八幡市域に属するが、遺跡範囲東辺部の一部は京都市伏見区に含まれる。大阪－奈良の府県境に位置する生駒山地から北へ延びて来た丘陵は、京都盆地の西縁を限りながら本遺跡の西方で途切れる。その北端頂部には男山の名称で親しまれ、石清水八幡宮が鎮座する鳩ヶ峰(142.3m)^(注5)が載る。鳩ヶ峰が載る丘陵は大阪層群と一部丹波帯で構成されており、北面する丹波山地南端部の西山丘陵との間に幅約1.5kmの地峡部を作りだしている。京都盆地を流れる川は、全てこの地峡部を抜けて大阪湾へと注いでいる。丘陵東縁には低位段丘と扇状地があり、明治初年から付替えされた旧木津川との間の平地部は後背湿地に分類される。平地部では複数の旧流路が確認されており、このうち、内里の東から川口へ至る旧流路は中世後半～近世初頭まで木津川本流であった可能性が指摘されている。^(注6)

2) 周辺遺跡

ここでは洛南浄化センター内での既往調査を除いて、周辺の遺跡について概観する。

旧石器時代 八幡市西部の丘陵に位置する金右衛門垣内遺跡^(注7)、西ノ口遺跡^(注8)、荒坂遺跡^(注9)でナイフ形石器や翼状剥片などが出土・採集されている。^(注10)

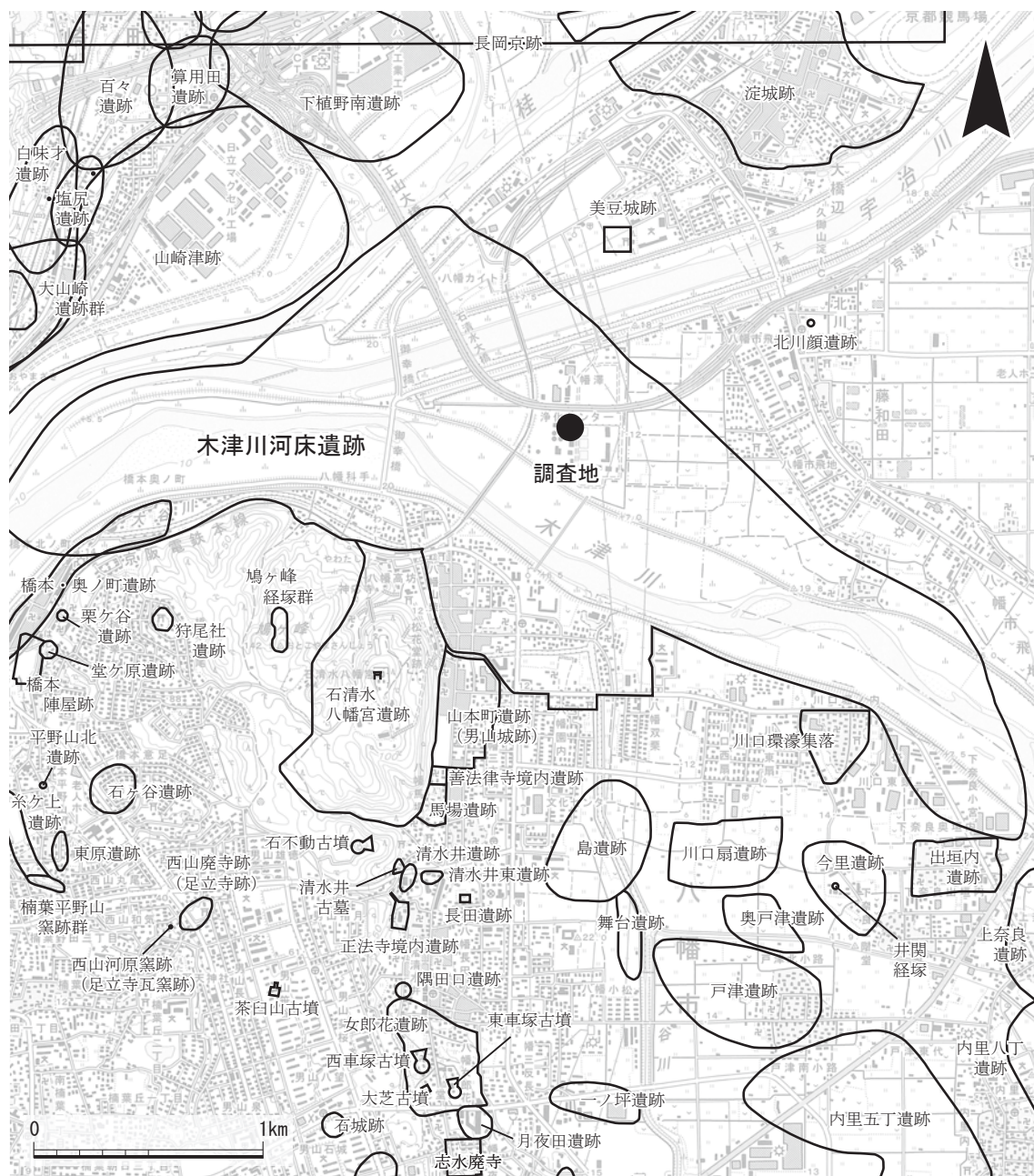
縄文時代 草創期の資料である有舌尖頭器が金右衛門垣内遺跡^(注11)、美濃山廃寺下層遺跡^(注12)で出土している。美濃山遺跡^(注13)で石匙などが出土しているほか、縄文時代とは確定しないが金右衛門垣内遺跡^(注14)で切目石錘が出土している。荒坂遺跡^(注15)では落とし穴の可能性がある土坑からサヌカイトの母岩が出土している。

弥生時代 金右衛門垣内遺跡で中期の土器と多量の石鏃が出土しているほか、遺跡の南200mの地点で中期中頃の甕棺が出土している。幸水遺跡では中期後半の方形周溝墓が検出されており、金右衛門垣内遺跡の集団の墓ではないかと指摘されている。後期には宮ノ背遺跡^(注18)、西ノ口遺跡^(注19)、備前遺跡^(注20)、南山遺跡^(注21)、美濃山廃寺下層遺跡^(注22)、美濃山遺跡^(注23)、幣原遺跡^(注24)で竪穴建物などの集落が検出されている。このうち宮ノ背遺跡、幸水遺跡では木棺墓が見つかった。その他、式部谷遺跡^(注25)では六区袈裟襷文銅鐸がみつかった。^(注26)

古墳時代 前期から中期にかけて石不動古墳^(注27)、西車塚古墳^(注28)、東車塚古墳^(注29)、王塚古墳^(注30)などの前方後円墳が造られる。このうち西車塚古墳は、京田辺市の天理山古墳群などとともに綴喜古墳群^(注31)として国史跡に指定されている。後期の古墳としては柿谷古墳^(注32)がある。このほか八幡市から京田辺市にかけての狭い範囲には、狐谷横穴群^(注33)、美濃山横穴群^(注34)、女谷荒坂横穴群^(注35)、松井横穴群^(注36)が集中している。集落としては女郎花遺跡^(注37)、上奈良遺跡^(注38)で前期～中期の竪穴建物が検出されているほか、内里八丁遺跡^(注39)、新田遺跡^(注40)で古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴建物がまとまって見つかった。

飛鳥・奈良時代 寺院跡としては志水廃寺^(注41)、西山廃寺(足立寺)で塔跡などの伽藍が見つかり、これらの寺院に瓦を供給した瓦窯として志水1号窯^(注42)と足立寺瓦窯跡が充てられている。

また美濃山廃寺^(注43)では大型の礎石・掘立柱併用建物が検出されている。集落として女郎花遺跡^(注44)、



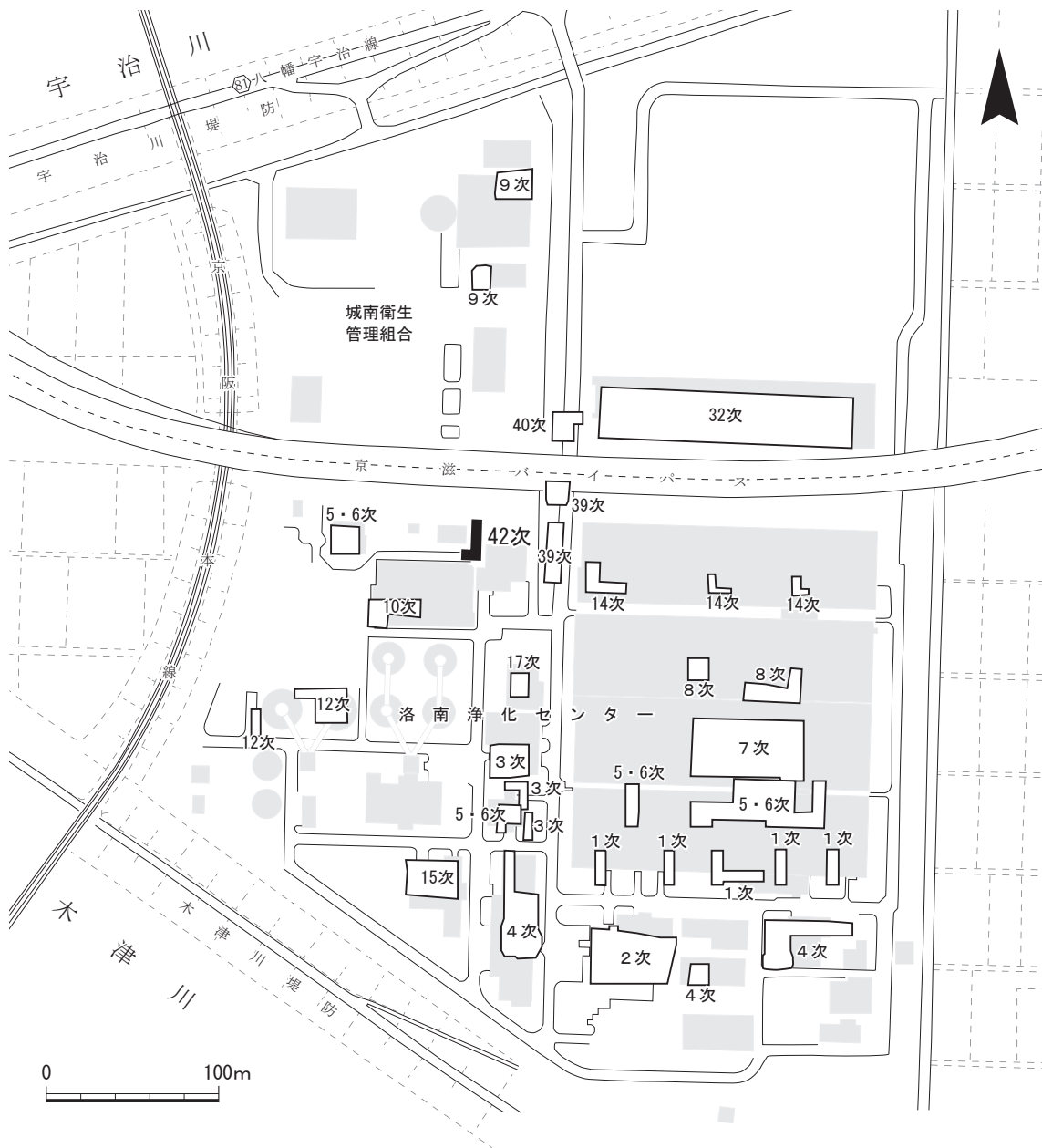
第3図 周辺遺跡分布図

(注45)
美濃山遺跡で堅穴建物や掘立柱建物が見つかった。

(注46) (注47) (注48) (注49)
平安時代以降 内里八丁遺跡、上屋津遺跡、女郎花遺跡、西村遺跡で集落跡が見つかった。

3) 浄化センター内での既往の調査

木津川河床遺跡の第1次調査は昭和57(1982)年に始まる。顕著な遺構が検出されたのは昭和58(1983)年の第2次調査からである。これ以降、第5・6・7次調査で古墳時代初頭、第10次調査で古墳時代前期、第2・4・5・6次調査で古墳時代後期の堅穴建物が検出されているほか、第6・12次調査では墓と考えられる土坑も見つかった。このほか、中世以降の島畑や素掘り溝も各調査で検出されている。本遺跡は、寒川旭氏による地震考古学が確立される過程において、^(注50)北仰西海道遺跡(滋賀県今津町)の次に参照された遺跡としても著名である。これは第6次調査時



次 数	調査年度	報 告	次 数	調査年度	報 告
第1次	1982(S57)	概報8冊	第10次	1998(H10)	概報88冊
第2次	1983(S58)	概報11冊	第12次	2000(H12)	概報98冊
第3次	1984(S59)	概報16冊	第14次	2001(H13)	概報102冊
第4次	1985(S60)	概報19冊	第15次	2002(H14)	概報106冊
第5次	1986(S61)	概報23冊	第17次	2006(H18)	概報122冊
第6次	1986(S61)	概報30冊	第32次	2019・2020 (H30・R1)	報集179冊
第7次	1989(H1)	概報38冊	第39次	2021(R3)	報集186冊
第8次	1991(H3)	概報49冊	第40次	2022(R4)	報集186冊
第9次	1994(H6)	市報17冊	第42次	2023(R5)	本 報 告

第4図 洛南浄化センターでの過年度調査

であり、その後、調査時に検出した地震痕跡についても詳細な観察と報告がなされるようになる。^(注51)ただし昭和59(1984)年の第3次調査時には、地震の砂脈について層位との関係で捉えようとする試みがすでになされていた点も注意されるべきであろう。^(注52)

3. 調査の方法

1) 調査の経緯

令和5年2月14日に原因者である京都府流域下水道事務所と京都府教育委員会文化財保護課を交えて現地協議を実施し、発掘調査の必要性和調査方法について確認を行った。調査地は、既設の急速ろ過池・急速ろ過棟・消毒棟に挟まれ、アスファルト舗装がなされている場所である。アスファルト面上の標高は約13.0mである。今回の調査地の南西で行われた第10次調査では、標高8.5m付近で中世島畑、標高8m弱で古墳時代前期の竪穴建物などが検出されている。狭小な場所において掘削深度が5m以上に及ぶため、原因者側で設ける鋼矢板内で発掘調査を実施することとなった。令和5年7月から工事用杭の設置、8月から鋼矢板の打設が開始されたが、事前の想定よりも地盤が堅固であったため、途中で工法変更の必要が生じた。そのため鋼矢板の設置と土留め工事の完了には、10月までの期間を要した。鋼矢板内の表土掘削についても、標高9mの深度まで原因者側で実施した。

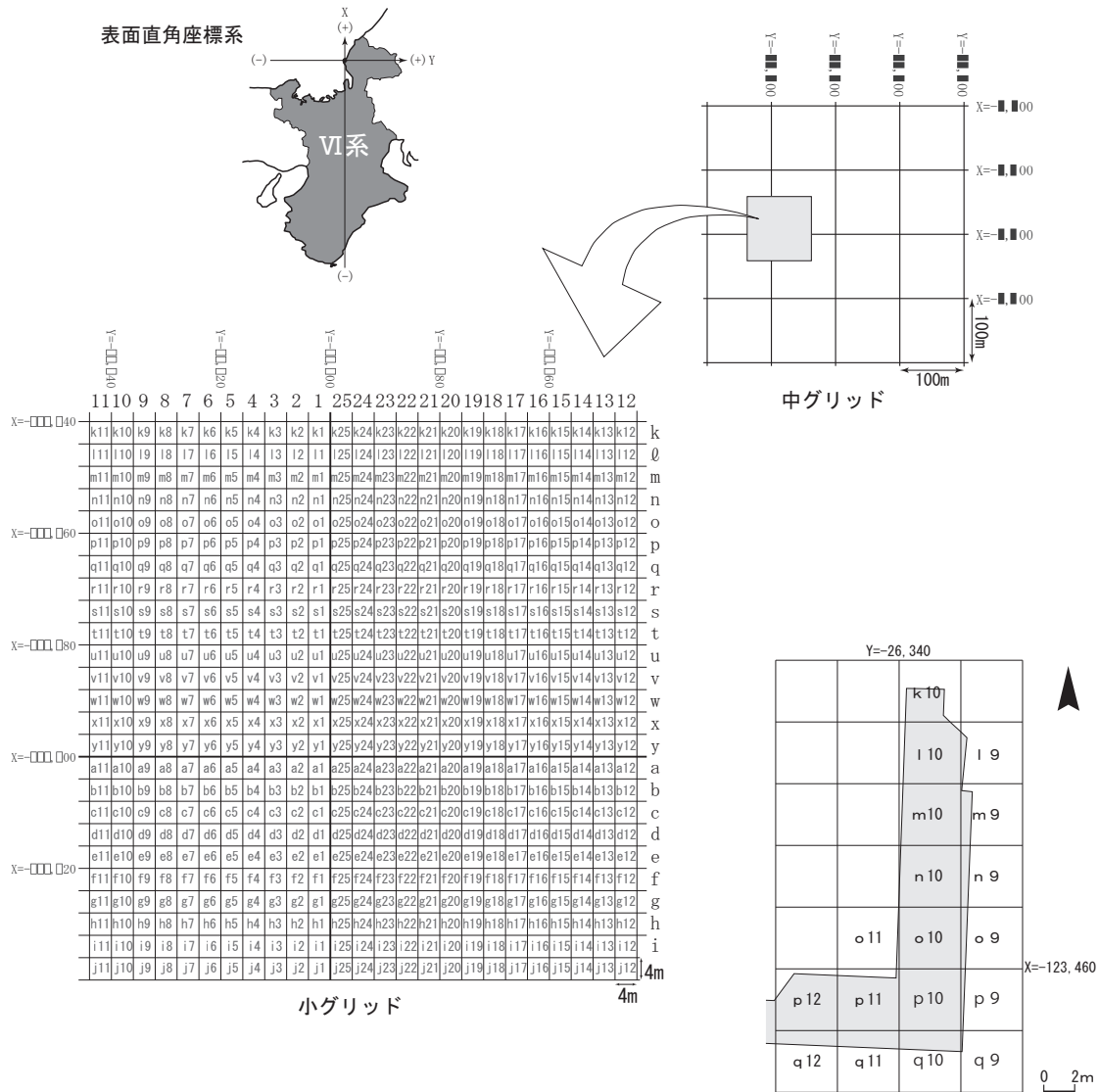
11月6日から、当センターによる現地作業を開始した。まず、鋼矢板内に人員が安全に入出場できるよう昇降階段を設置するとともに、ユニットハウス等を搬入して事務所整備を実施した。重機掘削は小型重機を鋼矢板内へ搬入して行った。排土は、大型重機を使用して調査地外へ搬出するとともに、4tダンプ車で第2ポンプ場南西側の排土置場へ移動させた。重機掘削中、調査地内の全面に地盤改良層やコンクリート製パイルが見つかったため、これらを破碎・除去するためにブレーカー付重機を使用した。重機掘削後は、人力掘削作業により遺構検出・遺構掘削・清掃等の作業を実施し、検出した遺構等については、担当調査員が図化・写真撮影等の記録作成を行った。調査は標高の異なる上・下2面に及び、第1面の記録終了は11月29日である。11月30日に再び重機掘削を行い、12月19日に2面の全景写真撮影と平面測量を実施した。12月20日から地震痕跡の断ち割り調査を開始した。12月26日には資材等の撤収を完了させ、12月27日に原因者側に現地を引き渡した。この間の12月18日には、京都府教育委員会と八幡市教育委員会が現地確認を行っている。

2) 遺構記号

文化庁による『発掘調査のてびき』に準じて遺構種別を示す記号と番号の組み合わせにより表記した。なお番号については、原則的に重複が無いように運用した。

3) 小グリッドの設定

遺物の取り上げに対応するため、平面直角座標系Ⅵ系を利用した4m角の小グリッドを用意した。今回の調査地では南北をk~q、東西を9~12に分割し、それぞれを組み合わせで“k10”などとした。本書中では、平面図の横に調子落として表記している。



木津川河床遺跡第42次

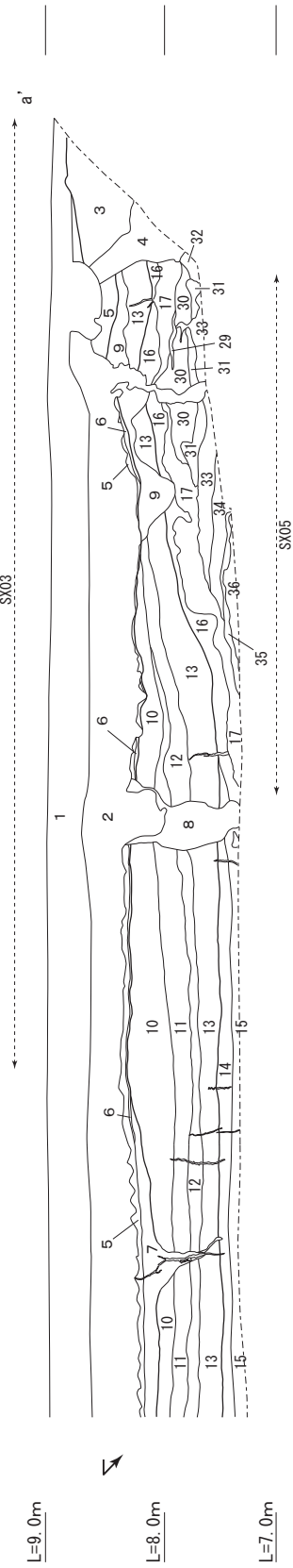
第5図 グリッドの設定

4. 調査概要

1) 基本層序

調査地は既設施設に囲まれた場所である。細長い南北部分の南端に、短い東西部分が取り付く逆L字形の土地である。調査地の地表高は13.0m前後で、原因者側により標高9.0m付近まで掘削が行われた後、当センターが調査地を引き受けた。当センター側で引き続き重機掘削を実施したところ、標高8.2m付近までは、少量のビニールやコンクリート片等を含む現代の造成土層であった。また調査区内には、構造物の基礎となるコンクリート製のパイルが全面に展開していた。造成土層の直下は約0.4m厚で硬化剤が使用されており、土壤改良がなされていた。また調査区北端部付近では、コンクリート製のいわゆるベタ基礎が施工されていた。造成土層の年代を示す一定点として、1990年代半ばに発売されたジュース缶が出土している^(注53)。コンクリート製パイルは、調査着手した標高9mよりも上位から打設され、今回調査が及んだ最深部(標高7.2m)よりも深くまで設置されている。

西壁土層断面

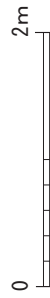
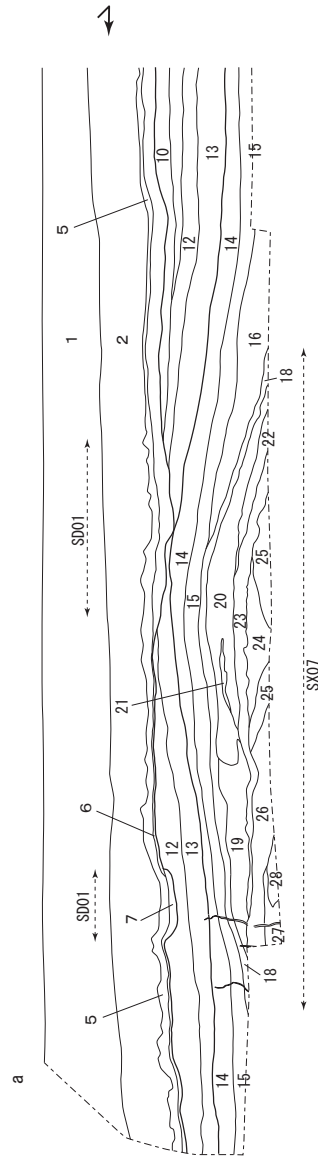


a

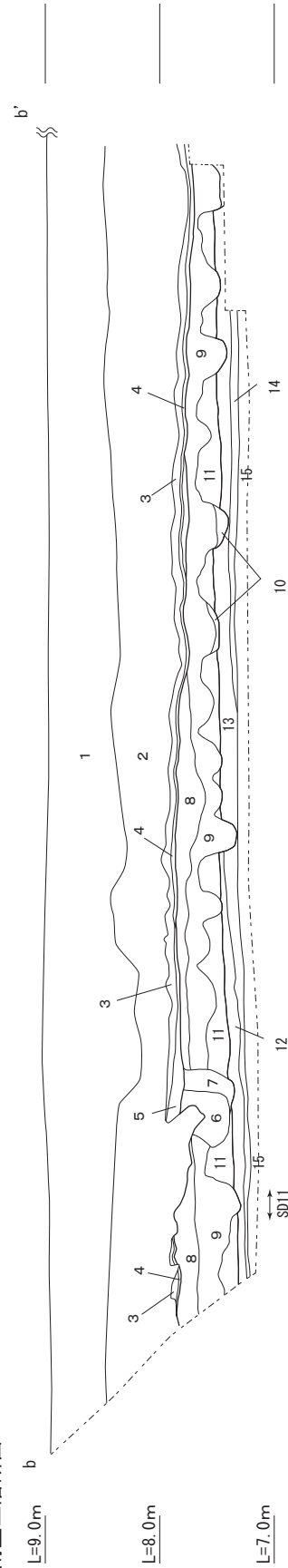
L=9.0m

L=8.0m

L=7.0m



南壁土層断面



第6図 調査区壁面土層断面図

第6図の土層名

西壁土層断面

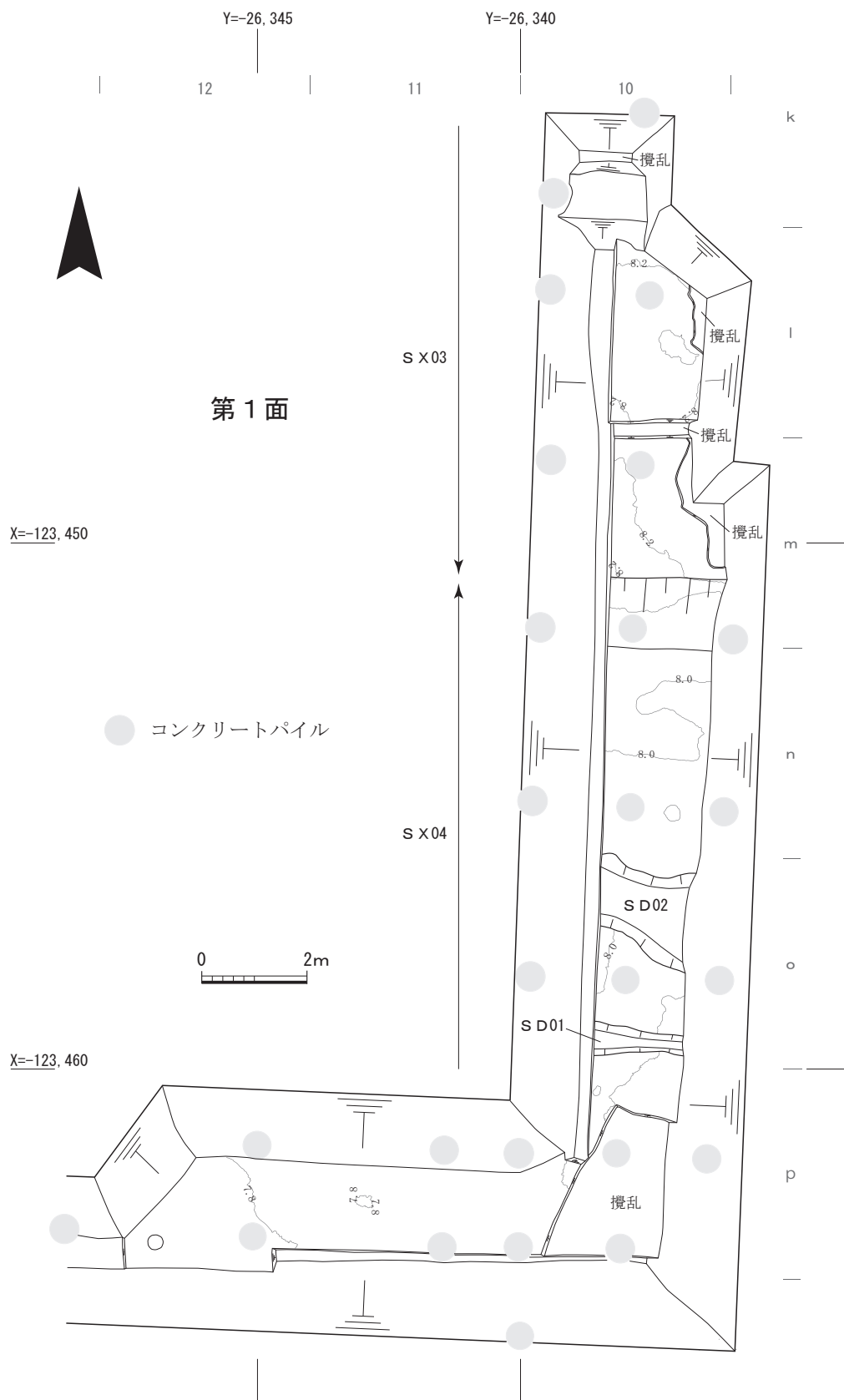
1. 盛土
2. 地盤改良
3. 淡黄色 (2.5Y8/3) シルト モザイク状を呈する
4. 灰白色 (2.5Y8/1) シルト
5. 青灰色 (5BG6/1) シルト 粘質
6. 褐灰色 (10YR4/1) シルト<攪乱の影響で変色>
7. 黄橙色 (10YR8/6) シルト
8. 灰色 (5Y6/1) シルト 径0.5～1 cm大の土師器片を多く含む<攪乱>
9. 褐灰色 (10YR6/1) シルト やや粘質
10. 青灰色 (5BG6/1) シルト やや粘質 径0.5～1 cm大の土師器細片を多く含む<整地>
11. 緑灰色 (10G6/1) シルト やや砂質 径0.5～1 cm大の土師器細片を少量含む<整地>
12. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト 有機化する
13. 青灰色 (10BG6/1) シルト やや粘質
14. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) シルト やや粘質
15. 浅黄色 (7.5Y7/3) シルト いわゆる微砂層
16. 青灰色 (10BG6/1) 均質なシルト
17. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 均質なシルト
18. 緑灰色 (10GY6/1) シルト やや粘質
19. 灰オリーブ色 (7.5Y6/2) 均質なシルト
20. 浅黄橙色 (10YR8/3) 極細粒砂混じりシルト 砂質
21. 灰白色 (7.5Y8/1) 極細粒砂 ラミナ構造を呈する
22. 黄灰色 (2.5Y6/1) シルト やや粘質
23. にぶい橙色 (7.5YR7/4) 極細粒砂に褐灰色 (7.5YR5/1) シルト やや粘質が40%混じる
24. にぶい黄橙色 (10YR7/4) 細粒砂 いわゆる砂層 ラミナ構造を呈し第23層との境界には厚さ1 mmの鉄分が沈着する
25. 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細粒砂
26. 浅黄橙色 (10YR8/4) 極細粒に褐灰色 (7.5YR5/1) やや粘質なシルトが20%混じる
27. 明褐灰色 (7.5YR7/1) シルト
28. 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト やや粘質
29. 淡黄色 (2.5Y8/3) 細粒砂 ラミナ構造を呈する
30. 灰白色 (10YR8/2) 細粒砂混じりシルト 部分的にラミナ構造を呈する
31. 明褐灰色 (7.5YR7/1) シルト やや粘質
32. にぶい黄橙色 (10YR7/3) 均質な細粒砂 いわゆる砂層
33. 灰白色 (10YR8/1) 中粒砂混じり細粒砂 ラミナ構造を呈する いわゆる砂層
34. 浅黄色 (2.5Y7/3) 均質な細粒砂 いわゆる砂層
35. 褐灰色 (10YR5/1) シルト やや粘質 第17層との境界に厚さ5mmの鉄分沈着
36. 黄灰色 (2.5Y6/1) 均質なシルト

南壁土層断面

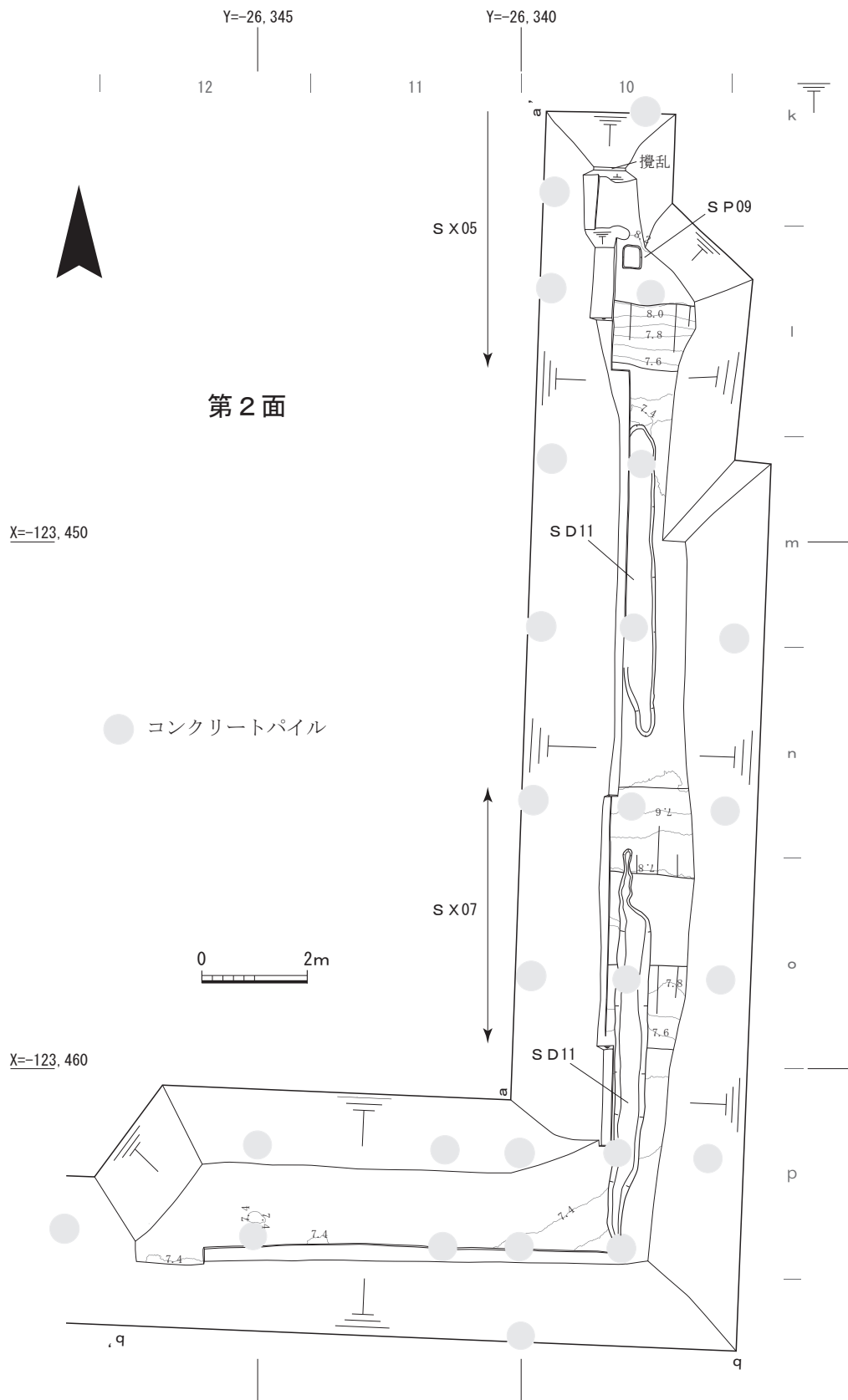
1. 造成土層
2. 地盤改良土層
3. 青灰色 (5BG6/1) シルト 粘質
4. 褐灰色 (10YR4/1) シルト <攪乱の影響で変色>
5. 黄橙色 (10YR8/6) シルト
6. にぶい黄橙色 (10YR7/2) シルト
7. 灰白色 (10YR7/6) シルト 黄橙色 (10YR8/6) シルトが40%混じる
8. 灰色 (5Y6/1) 均質なシルト 粘質
9. 灰黄色 (2.5Y6/2) シルト 有機化する
10. 灰白色 (2.5Y7/1) シルト
11. 灰白色 (5Y7/1) シルト 粘質
12. 灰白色 (2.5Y7/1) 均質なシルト 粘質
13. 灰白色 (10YR7/1) 均質なシルト やや粘質
14. 灰白色 (5Y7/1) 均質なシルト やや砂質
15. 灰白色 (5Y7/1) 均質なシルト やや砂質

土壌改良層直下についても薬剤の影響と思われる土壌の黒色化(西壁第6層、南壁第4層)が見受けられる。現代の影響を受けていない層は、標高約8.3～7.8mの高さで検出した整地土層(西壁第10・11層)である。第10・11層は最も厚い部分で0.54mの厚さがあるが、南へ向かって薄くなり調査区南壁では確認できない。土師皿や陶磁器の細片が層の全体に満遍なく混じっている点から、人為的に動かされた土であることは明瞭で、整地層と判断した。この整地層には瓦器片が少量存在している。瓦器が示す時代以降の遺物も認められなかったため、12・13世紀を中心とする年代が与えられる。調査はまず、この西壁第10層および西壁第12層上面を第1面として平面的に精査を実施した。

第1面の下位にある西壁第12層は、南壁第9層に対応する。有機化のため色調が暗く、耕作に関わるものと考えられる。南壁の観察によると、本来、南壁第11層上面で複数の南北溝が平面的に検出できたようである。しかしながら狭長な調査区内において、重機でコンクリートパイルを破碎しながら掘削を行ったため検出できなかった。西壁第12層より下位は均質なシルト質土であり、河川氾濫により形成された層である。近傍の第10次調査では、標高7 m付近で古墳時代前期の竪穴住居が検出されており、砂っぽさが強くなる標高7.4m付近の西壁第14・16層上面を第2面として平面的に精査を実施した。南壁では第12・13層上面にあたる。調査区北端部では、西壁



第7図 第1面遺構平面図



第 8 図 第 2 面遺構平面図

第16層直下はラミナ構造を有する砂層であるため、第2面とした西壁第14・16層は当初無遺物の地山と認識していた。しかし調査終盤の断ち割りの際、弥生～古墳時代と考えられる微細な遺物が出土している。

2) 検出遺構

① 第1面検出遺構(第7図)

島畑状遺構 S X03・低位部 S X04 調査区北半部にある地形の高まりである。第12層上に整地土である第10・11層が置かれることにより造られる。先述のとおり第10・11層は最も厚い部分で0.54mあるが、南へ向かって薄くなり調査区の中程で無くなる。整地土層下面の標高を見ると、北へ向かっては曲隆 S X05による高まりに従って高くなっていくが、上位を造成土層に削平されている。よって本来、より高い標高にまで整地土層が展開していたかは不明である。

第10層の上面が作る地形は北に高く、南に低くなっている。なかでも、調査区北端から8.0m～9.2mの部分においては、比高0.22mで急に北側が高く、南側が低くなっており、地形の高い部分を S X03、低い部分を S X04とした。S X03の標高は8.3m、S X04の標高は7.79～8.08mである。地面に高低を有するという点から、S X03が島畑本体、S X04は島畑間の低位部である可能性がある。浄化センター内での直近の調査である第32次調査では、室町時代とされる島畑が検出されている。第32次調査で検出された島畑低位部の標高は8m付近で、今回の低位部 S X04と近似である。島畑本体については、第32次調査では標高が9m付近であり、仮に今回検出した S X03が島畑であるとする、0.7m程度上位を削平されているものと考えられる。これは、第10・11層が土師皿や陶磁器の細片を含み有機化しないなど、耕作土層の特徴を示さない点と調和的である。すなわち、耕作土より下位の盛土部分であった可能性がある。

東西溝 S D01・02 第12層上の S X04とした部分で検出した東西方向の溝である。S X04が島畑間の低位部であるとすれば、耕作に関わる溝の可能性はある。

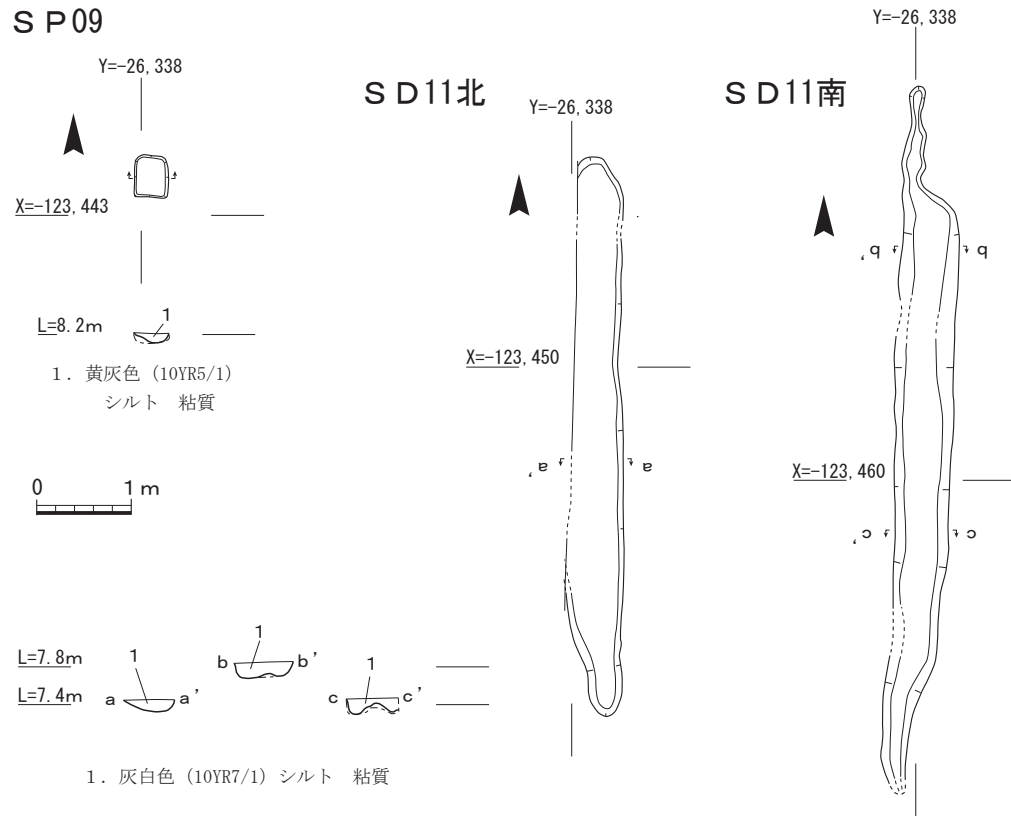
② 第2面検出遺構(第8図)

南北溝 S D11 調査区の南北部分で検出した溝である。南北に途切れるが一連の溝であろう。北は全長5.94mで、南は全長7.38m以上。幅は0.56mである。調査区南壁の観察によると、南壁第11層上面が掘り込み面となっており、埋土と一連となった9層がバックしたものが東西に連続的に掘られている。前述の通り工程上の問題で平面的に検出できなかったが、東西に複数に並んでいる点から、耕作に伴う溝と考えられる。埋土中からは古墳時代の可能性がある土師器の細片が出土しているが、周辺での調査成果から中世の素掘溝の可能性はある。

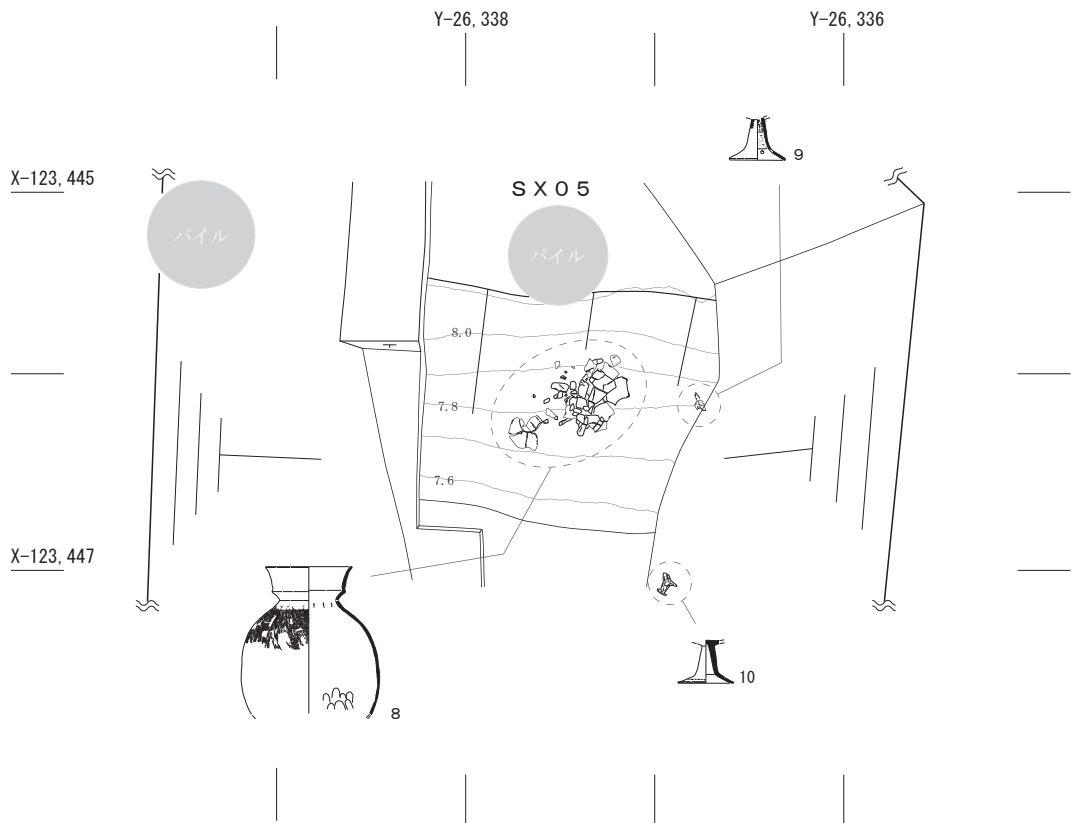
③ 地震痕跡

調査区壁面や平面では地震による砂脈を確認している。壁面で確認した砂脈は、西壁17層などの砂質層から上方に延びている。壁面で確認した砂脈は複数時期のものが混在している可能性があるが、第10・11層より上位にのびる砂脈も確認している。平面では、調査区南北部分の第1面で南北4m以上の砂脈を検出しており、同じ砂脈は第2面の平面でも引き続き確認している。

曲隆 S X05 地震による液状化現象が引き起こす噴砂の現象のうち、地上まで噴出せずに地



第9図 ピット S P 09と南北溝 S D 11平・断面図



第10図 曲隆 S X 05南斜面での遺物出土状況

形の盛り上がり^(注54)を形成したものである。S X05は調査地北端部で検出したもので、南北幅は3.76m以上。盛り上りの比高は0.7mである。

曲隆S X07 調査区南半部で検出したもので、南北幅4.98mである。盛り上りの比高は0.42m。噴砂の中心が西壁付近にあり、砂層(西壁第24層)が上方に向かって漏斗状に広がる状況が確認できる。

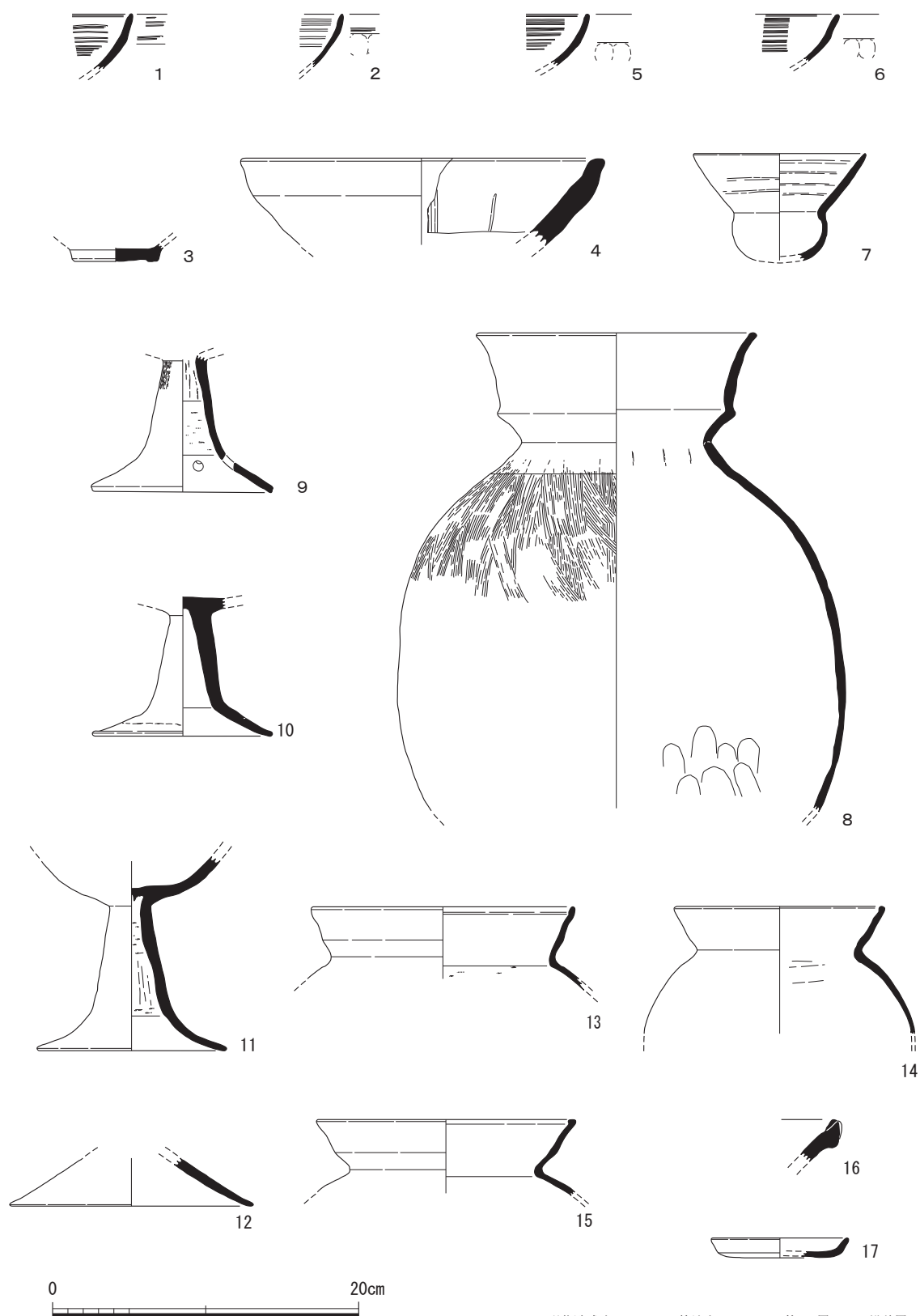
5. 出土遺物

出土遺物の総量は、整理箱2箱である。古墳時代の土師器・須恵器、土師器小皿、瓦器、陶磁器が出土している(第11図)。1・2は南壁を整形の際、現代造成土層である南壁第2層からの出土。3・4は西壁の断ち割りの際、整地土層である西壁10・11層からの出土。5～17は第1面での調査が終了後に面的掘削を実施中に出土したもの。このうち、5～16は第2面とした西壁第14・16層の直上に載る第13層中からの出土であり、10は東壁に刺さる形で出土した。17は掘削中の西壁第12・13層中から出土したものである。

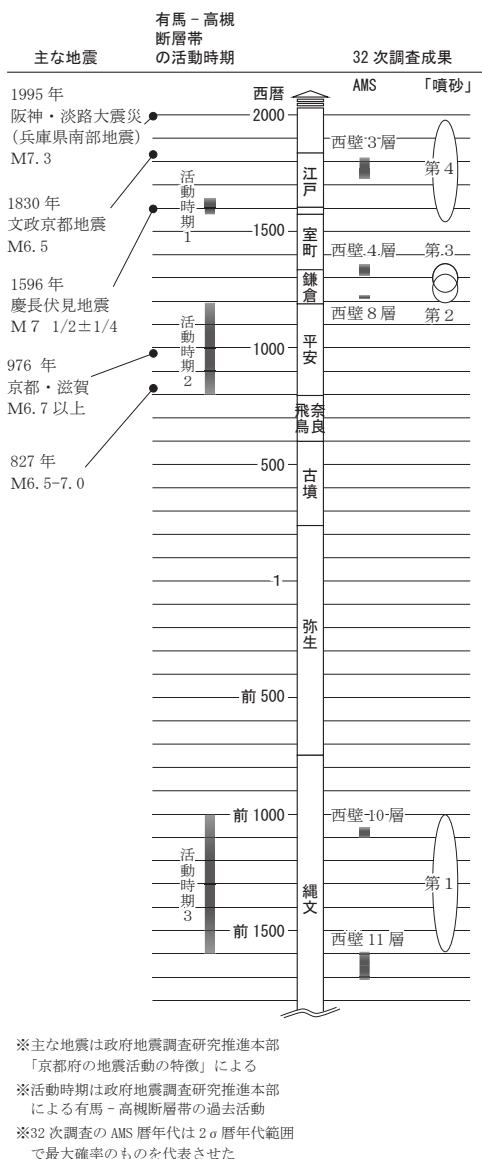
瓦器碗のうち1・5・6は口縁部内面に弱い沈線が巡り、内面のミガキがやや密。2の内面はミガキがやや粗。沈線を有しないが口縁端部が尖り気味であり、全て楠葉型の瓦器碗である。いずれも外面のミガキがほほないことから、12世紀後半から13世紀前半頃のものと考えられる^(注55)。陶器の碗(3)は古瀬戸と見られるもので内面は灰釉を施し、外面は露胎である。削り出しの低い輪高台を持つもので、古瀬戸後期様式にあてまはり、14世紀後半から15世紀のものと考えられる^(注56)。播鉢(4)は信楽焼の播鉢である。1本を1単位とする摺目が確認できることから、15世紀代のものとみられる^(注57)。古墳時代の土師器(7～15)はいずれも布留式で、古墳時代前期のもの^(注58)。小型丸底壺(7)は南山城地域の地域編年である佐山編年では、佐山ⅢA 1～A 2式にあてはまる^(注59)。二重口縁壺(8)は複合口縁を有するもので、体部上端は擬口縁状を呈しており、口頸部とは接合しないため図上復原した。佐山Ⅲ式の範疇で捉えられる。高杯(9～12)のうち、12は低脚のものか。甕(13～15)は、くの字状口縁で端部内面が肥厚する。佐山分類で甕F 2 bとされるもので、佐山Ⅲ式に当てはまる。須恵器鉢(16)は東播系のもので、片口を有するものである。外反する口縁で、口縁端部は上方へ拡張しつつ肥厚することから、12世紀後半から13世紀の年代が与えられる^(注60)。

6. まとめ

今回の調査では耕作に関わると考えられる複数の溝を確認した。溝からは古墳時代の遺物が出土しているが、整地土の年代や周辺の調査で検出されている素掘溝の年代から、中世が一つの候補となるであろう。一方、近傍での調査成果から近世島畑、中世島畑、古墳時代の集落の存在が事前に想定されていたが、調査区内に地盤改良などの工事が及んでいたため、近世島畑および中世島畑の上方は削平されていると考えられる。浄化センター本部内に掲示されている平成20(2008)年の空撮写真によると、調査地部分に低層の構造物の存在が確認できる。造成土から出土した空き缶の年代とも整合的で、この構造物を設ける際に地盤改良やコンクリート製パイルの打



第11図 出土遺物実測図



第12図 周辺の地震履歴

ている「第1 噴砂」の時期は、AMSの年代を見る限り縄文後期～晩期の誤りであろう。さて慶長伏見地震を生じさせたと考えられている有馬-高槻構造線^(注61)については、過去、3つの活動時期があったとされている^(注62)。両者まとめると、以下のように考えられる(第12図)。

①有馬-高槻断層帯の活動期3と第32次の「第1 噴砂」の時期はほぼ対応しており、縄文時代後期～晩期の時期に液状化を生じさせる規模の地震があったと考えられる。

②有馬-高槻断層帯の活動時期2に対応する時期(およそ平安時代)の痕跡については、第32次調査では確認されていない。この間、文献上ではM6以上に復原される地震があったことが分かっており、これらの地震は遺跡周辺で液状化を生じさせないものであった可能性がある。

③第32次調査の「第2 噴砂」・「第3 噴砂」の時期(鎌倉～室町)は、有馬-高槻断層帯の活動時期とはされていない。その一方で、南海トラフが震源と考えられている地震が発生している(1361年・正平(康安)地震、1498年・明応地震)。

④慶長

設がなされたと考えられる。古墳時代の遺構についても確認されなかった。標高7m付近まで調査を実施したが遺構が検出されず、木津川の氾濫によると考えられる水性堆積層が確認されたのみであったことから、本調査地においては古墳時代の安定面は存在しないものと考えられる。

出土遺物については、その数量は多くないが、古墳時代前期と中世(12～15世紀)に集約している。よって一定の年代的纏まりが認められる。

このほか、地震による液状化現象にともなう砂脈や2か所の曲隆を検出した。浄化センター内における既往の調査では、地震痕跡が多数確認されており、それらは文禄5(1596)年の慶長伏見地震に原因が求められている。その後、第32次調査では壁面の観察と年代測定を組み合わせることにより、液状化を発生させるイベントが慶長伏見地震を含んで過去4回発生していることを明らかにしている。これまでの調査では、出土遺物により時期決定された層との切り合い関係により、地震痕跡の時期が決定されていた。また、その時期も単一のものであった。こうした中、複数時期にわたり痕跡を残す地震が発生していたことを明らかにした点において、第32次調査の成果は木津川河床遺跡における地震考古学を前進させたと評価できる。ただし、縄文時代前期～中期とされ

伏見地震に代表される有馬－高槻断層帯の活動時期1の時期は、第32次調査の「第4噴砂」の時期に重なる。このようにしてみると、遺跡周辺において、その痕跡を残した過去の地震について上記①～④に整理することができた。今回の調査で検出した砂脈についても異なる時期のものが混在している可能性があるが、西壁で確認した砂脈に第10・11層よりも上位に延びるものが存在している点から③の時期の後半や慶長伏見地震を含む④の時期が候補となるが、詳細な年代決定は容易ではない。実際、年代分析を行った第32次調査でも、曲隆の年代については保留されたままであり、この点は今後の調査の課題として挙げておきたい。

平成7(1995)年の阪神・淡路大震災直後、それまで発掘調査によって確認されていた地震痕跡が、教訓として一般向けに十分還元できていなかったのではないかという内省の声が、多くの埋蔵文化財関係者から聞かれた。日々全国で行われている埋蔵文化財調査は大地に刻まれたデータの膨大な蓄積があり、東日本大震災を経て、それらの情報を現代の防災へと活かす試みも進められている。木津川河床遺跡はこうした活動の礎となった遺跡の一つであり、地道に積み重ねられつつあるデータの中に今回の調査成果も加えられる。

注1 木津川流域下水道は下水を最終処理する能力を有しており、下水道法(昭和33年法律第79号)第二条第四号イで規定されるものにあてはまる。現在6市2町(京都市・宇治市・城陽市・八幡市・京田辺市・木津川市・久御山町・井手町)の下水処理を担っている。

京都府HP「木津川流域下水道(洛南浄化センター)」<<https://www.pref.kyoto.jp/ryuiki/kizugawa-rakunan.html>>2024年3月閲覧

注2 『家忠日記』「文禄3年8月9日条」。

高橋誠一1974「巨椋池をめぐる堤」『宇治市史』2 宇治市

注3 同年5月に八幡の生津で左岸堤防が約540m以上決壊したことが契機となっている。付け替え工事の完了は1870(明治3)年である。

鈴木一久2008「近世における山城地域の水害」『近畿大学教育論叢』第20巻第1号

注4 植村善博1984「山崎地峡部の地形と土地利用」『地理』第29巻第7号 古今書院、八幡市誌編集委員協議会1984『八幡市誌』第三巻

注5 鳩ヶ峰の標高は国土地理院2万5千分1地形図によるが、電子国土webでは142.4mとある。京都盆地西縁の丘陵については八幡丘陵と田辺丘陵の名称があり(三田村1992)、その境界については大谷川がつくる谷部を充てる立場がある(加藤2018)。八幡丘陵については、さらに男山丘陵と美濃山丘陵に分けられる場合がある。このほか八幡丘陵と田辺丘陵を合わせて「男山丘陵」(宮地ほか2005)や「石清水丘陵」(鶴見・相模1972)とする例もあるが、この名称が京田辺市や精華町の丘陵にまで適応できるかは疑問である。

鶴見英策・相模 裕1972「京都西南部 地形各論」『土地分類基本調査簿』第133号 経済企画庁、三田村宗樹1992「京阪奈丘陵の大阪層群の層序と地質構造」『第四紀研究』第31巻第3号 日本第四紀学会、加藤雅士2018「(1)松井横穴群第1～4次 位置と環境 1. 地理的環境 2) 地形」『京都府遺跡調査報告集』第171冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、宮地良典・楠 利夫・武蔵野實・田結庄良昭・井本伸広2005『京都西南部地域の地質』産業総合研究所地質調査総合センター

注6 大洞真白2007「4. 総括 木津川流路の変遷について」『川口扇遺跡(第2次)発掘調査報告書』(八幡市埋蔵文化財発掘調査報告第43集) 八幡市教育委員会

注7 鈴木重治1979「山城出土の旧石器」『考古学ジャーナル』No167 ニューサイエンス社、中川和哉1987「金右衛門垣内発見のナイフ形石器」『旧石器考古学』第36号 旧石器談話会、八十島豊成・森川 実・杉山拓己2002「金右衛門垣内遺跡採集遺物整理報告」『八幡市埋蔵文化財調査概報』第33集 八幡市教

育委員会

- 注8 黒坪一樹・河野一隆1998「一般地方道富野荘八幡線関係遺跡 西ノ口遺跡(第2次)」『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、赤松一秀・榊井豊成1998「西ノ口遺跡発掘調査概報」『八幡市文化財発掘調査概報』第24集 八幡市教育委員会
- 注9 前掲注7(鈴木1979)と同じ
- 注10 なお第39・40次の報告では縄文海進により山城盆地が湖化したとしているが(竹原2023)、三川合流の地峡部には海水は一度も流れ込んでいないと考えられている(植村1984)。
前掲注4(植村1984)と同じ、竹原一彦2023「木津川河床第39・40次発掘調査報告 八幡市の地理と歴史環境 歴史的環境」『京都府遺跡調査報告集』第186冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注11 前掲注7(八十島ほか2002)と同じ
- 注12 古川 匠2012「美濃山廃寺下層遺跡第8次」『京都府遺跡調査報告集』第148冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注13 増田孝彦ほか2021『美濃山遺跡』(京都府遺跡調査報告集第183冊) (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注14 八幡市誌編纂委員協議会1986『八幡市誌』第一巻 八幡市
- 注15 小池 寛2004「平成14年度の調査 荒坂遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注16 前掲注14と同じ
- 注17 榊井豊成・赤松一成1998「幸水遺跡(第1・2次)発掘調査」『八幡市文化財発掘調査概報』第25集 八幡市教育委員会
- 注18 河野一隆1998「一般地方道富野荘八幡線関係遺跡 宮ノ背遺跡(第3次)」『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注19 前掲注8と同じ
- 注20 河野一隆1998「一般地方道富野荘八幡線関係遺跡 備前遺跡」『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、大洞真白・松下知世2010「備前遺跡(第3次)発掘調査報告書」『八幡市文化財発掘調査概報』 八幡市教育委員会
- 注21 榊井豊成1988『南山遺跡発掘調査概報』 八幡市教育委員会
- 注22 大洞真白2006「美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡範囲確認調査(1～5次)報告書」『八幡市文化財発掘調査概報』第39集 八幡市教育委員会、小森俊寛ほか「美濃山廃寺(第8次)・美濃山廃寺下層遺跡(第11次)発掘調査報告書」『八幡市文化財発掘調査概報』第58集 八幡市教育委員会、石井清司ほか2013「美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層第9次」『京都府遺跡調査報告集』第154冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、岡崎研一ほか2013「美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層第10次」『京都府遺跡調査報告集』第154冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、小池 寛ほか2014「美濃山廃寺第9次・美濃山廃寺下層第12次」『京都府埋蔵文化財調査報告集』第160冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注23 前掲注13と同じ
- 注24 石井清司1987「八幡市幣原遺跡出土の土器について」『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注25 前掲注17と同じ
- 注26 宇佐普一1962「京都府八幡町出土の銅鐸」『古代文化』第9巻第3号 古代学協会
- 注27 梅原末治1955「八幡市石不動古墳」『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会
- 注28 梅原1919など、梅原末治1919「八幡町西車塚」『京都府史蹟名勝地調査會報告』第1冊 京都府
- 注29 梅原末治1920「山城国八幡町の東車塚古墳」『久津川古墳研究』関信太郎 のち名著出版
- 注30 梅原末治1920「美濃山ノ古墳」『京都府史蹟地調査報告』第2冊 京都府
- 注31 古川 匠ほか2022『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会。なお同書中では西車塚古墳は「墳長

- 約120m」とされているが、同書が挙げる参考文献中で墳長120mと記したものは存在しておらず、墳長の根拠が不明である。
- 注32 引原茂治「柿谷古墳・美濃山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第146冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注33 久保田健士1982「狐谷横穴群」『京都府遺跡調査概報』第8冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注34 佐藤虎雄1929「美濃山の横穴」『京都府史蹟名勝地調査會報告』第2冊 京都府
- 注35 岩松 保ほか2004など、岩松 保ほか2004「女谷・荒坂横穴群」『京都府遺跡調査報告集』第34冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注36 加藤雅士ほか2018「松井横穴群第1～4次」『京都府遺跡調査報告集』第171冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注37 八十島豊成・塩貝泰洋1999「女郎花遺跡発掘委調査概報(第3・5次)」『八幡市文化財発掘調査概報』第28集 八幡市教育委員会
- 注38 八十島豊成2003「上奈良遺跡(第4次)発掘調査概要」『八幡市文化財発掘調査概報』第35集 八幡市教育委員会
- 注39 竹原一彦・森下 衛1999「内里八丁遺跡Ⅰ」『京都府遺跡調査報告書』第26集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注40 奥村清一郎ほか「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』 京都府教育委員会
- 注41 江谷 寛1978「志水廃寺発掘調査報告」『八幡市文化財調査報告』第2集 八幡市教育委員会
- 注42 西田直二郎・赤松俊秀1937「八幡町志水瓦窯址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第17冊 京都府
- 注43 前掲注22(岡崎ほか2013)と同じ
- 注44 筒井崇史2015「門田遺跡第3～5次 門田遺跡における古墳時代後期～飛鳥時代の集落の展開について」『京都府遺跡調査報告集』第161冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注45 前掲注13と同じ
- 注46 前掲注39と同じ
- 注47 大洞真白・小森俊寛2003「上津屋遺跡発掘調査(第5・7・8次)概報」『八幡市文化財発掘調査概報』第36集 八幡市教育委員会
- 注48 大洞真白2007「女郎花遺跡(第8次)発掘調査報告遺書」『八幡市文化財調査報告』第41集 八幡市教育委員会
- 注49 大高義寛ほか「西村遺跡第2・3次」『京都府遺跡調査報告集』第161冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注50 寒川 旭1988「地震考古学の提唱」『日本文化財科学会年報』16 日本文化財科学会、寒川 旭1992『地震考古学 遺跡が語る地震の歴史』中公新書
- 注51 岩松・寒川1987など、岩松 保・寒川 旭1987「八幡市木津川河床遺跡検出の大地震に伴う噴砂について」『京都府埋蔵文化財情報』第26号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注52 木ノ下治男1985「木津川河床遺跡 遺構」『京都府遺跡調査概報』第16冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注53 キリンビバレッジ株式会社製オレンジ飲料「きりり」。製造開始が1994年で2020年まで製造が継続するが、後半は店舗向け等の業務用であった。
- 注54 褶曲の名称が使われる場合もあるが、本報告では寒川(2015)の用法に従って曲隆とする。
寒川 旭2015「地震考古学から見た遺跡の液化状化跡」東京地学協会春季公開特別講演会資料
- 注55 森島編年のⅡ－2期からⅢ期の範囲で捉えられる。森島康雄1995「瓦器椀」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 注56 藤澤良祐編2007『愛知県史』別冊 窯業2 中世・近世・瀬戸系 愛知県史編さん委員会
- 注57 畑中編年の一期新段階～二期古段階に該当する。

畑中英二2003『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版

注58 寺沢 薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』檀原考古学研究所

注59 佐山分類でA3とされるもの。

高野陽子2003「総括 出土遺物の検討 弥生時代後期～古墳時代の土器様相」『佐山遺跡』京都府遺跡調査報告書 第33冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

注60 森田編年のⅧ期～Ⅸ期第1段階に該当する。

森田 稔1987「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館

注61 植村善博・中塚 良1992「京都盆地南部の地下を横断する横大路断層について」『活断層研究』第10号 日本活断層学会

注62 地震調査委員会2001「有馬－高槻断層帯の評価」政府地震調査研究推進本部

付表 出土土器観察表

() 復元値、- 測定不可

番号	種類	器種	出土地点 (小地区)	層位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率	色調	調整	備考
1	瓦器	椀	p12・q12	造成土	-	(3.6)	-	1/12 以下	暗灰 (N4/0) ～灰白 (5Y8/1)	内) ミガキ、外) ミガキ・ナデ	楠葉型
2	瓦器	椀	l10・m10	造成土	-	(3.4)	-	1/12	灰 (N4/0)	内) ミガキ、外) ミガキ・ナデ	楠葉型
3	灰釉陶器	椀	l10・m10	西壁第10・11層	-	-	5.4	底) 4/12	釉) 灰白 (5Y7/2)、胎) 灰白 (5Y8/1)	外) ケズリ	
4	陶器	播鉢	l10	西壁第10・11層	-	-	-	1/12	にぶい橙 (5YR7/4)	内) ロクロナデ、外) ロクロナデ	
5	瓦器	椀	n10	西壁第13層	-	(3.4)	-	1/12	暗灰 (N3/0)	内) ミガキ、外) ナデ	楠葉型
6	瓦器	椀	n10	西壁第13層	-	(3.2)	-	1/12	灰 (N4/0)	内) ミガキ、外) ナデ	楠葉型
7	土師器	小型丸底壺	l10	西壁第13層	11.2	(7.0)	-	口) 5/12	橙 (5YR7/6)	内) ミガキ・ナデ、外) ミガキ・ナデ	
8	土師器	二重口縁壺	l10	西壁第13層	17.8	(31.6)	-	口) 1/12	にぶい黄橙 (10YR7/3)	内) ナデ・オサエ、外) ナデ・ハケメ	
9	土師器	高杯	l10	西壁第13層	-	(9.0)	11.5	底) 8/12	橙 (2.5YR6/6)	内) ケズリ・ハケメ、外) ハケメ・ナデ	穿孔有
10	土師器	高杯	l10	西壁第13層	-	(9.1)	11.4	底) 4/12	浅黄橙 (10YR8/3)	内) ケズリ・ナデ、外) ナデ	
11	土師器	高杯	l10	西壁第13層	-	(12.7)	12.0	底) 1/12 以下	橙 (2.5YR7/6)	内) ケズリ・ナデ、外) ナデ	
12	土師器	高杯	l10	西壁第13層	-	(3.2)	15.7	底) 2/12	にぶい橙 (5YR6/4)	内) マメツ、外) マメツ	
13	土師器	甕	l10	西壁第13層	17.0	(5.5)	-	口) 1/12 以下	橙 (5YR6/6)	内) ナデ・ケズリ、外) ナデか	
14	土師器	甕	l10	西壁第13層	13.2	(8.3)	-	口) 2/12	灰白 (10YR7/2)	内) ナデ・ケズリ、外) ナデか	
15	土師器	甕	l10	西壁第13層	16.8	(5.1)	-	口) 4/12	灰褐 (7.5YR6/2)	内) ナデか、外) ナデか	
16	須恵器	片口鉢	l10	西壁第13層	-	(2.7)	-	1/12	灰白 (N7/0)	内) ロクロナデ、外) ロクロナデ	
17	土師器	皿	n10	西壁第12・13層	8.8	(1.3)	-	2/12	灰白 (10YR8/2)	内) ナデ、外) ナデ・オサエ	

版 圖



(1) 川北遺跡遠景(南東から)



(2) 1区全景(右が北)



(1) 2～5区全景(右が北)



(2) 6～10区全景(右が北)



(1) 1区近景(北から)



(2) 2～5区近景(南から)



(3) 2区全景(右が北)



(1) 3区全景(右が北)



(2) 4区全景(右が北)



(3) 5区全景(右が北)

(1) 6区全景(右が北)



(2) 7区全景(右が北)



(3) 8区全景(右が北)





(1) 9区全景(右が北)



(2) 10区全景(右が北)



(3) 2区断ち割り(北から)

(1) 3区断ち割り(南から)



(2) 4区断ち割り(南から)



(3) 5区断ち割り(北から)





(1) 7区断ち割り(南から)



(2) 9区断ち割り(南西から)



(3) 10区断ち割り(南から)

図版第1 法貴峠20号墳

(1)20号墳遠景(北東から)
背後丘陵に法貴峠古墳群が分布



(2)20号墳遠景(南東から)



(3)20号墳遠景(北西から)



図版第2 法貴峠20号墳



(1) 調査地全景(上が北東)



(2) 20号墳調査前状況(西から)



(3) 20号墳石室調査前状況
(南西から)

(1)20号墳表土直下礫層検出状況
(西から)



(2)20号墳礫層内遺物出土状況
(南から)



(3)20号墳墳丘残存部検出状況
(北西から)





(1) 20号墳墳丘内列石検出状況(南東から)



(2) 20号墳墳丘内列石検出状況(北東から)



(1) 20号墳墳丘内列石検出状況(北東から)



(2) 20号墳墳丘内列石検出状況(北西から)



(1) 20号墳墳丘内列石検出状況
(北から)



(2) 20号墳羨道部列石検出状況
(南東から)



(3) 20号墳羨道部東側墳丘
断ち割り断面(南東から)



(1)20号墳北東側墳丘断ち割り断面(北西から)



(2)20号墳北西側墳丘断ち割り断面(北東から)



(1)20号墳南西側墳丘断ち割り
断面(南東から)



(2)20号墳南西側墳丘断ち割り
断面墳丘裾付近(南西から)



(3)20号墳北側断ち割り断面
(東から)

(1)20号墳石室上部検出状況
(南西から)



(2)20号墳石室上部玄室左側壁
検出状況(南西から)



(3)20号墳石室上部奥壁検出状況
(南東から)





(1) 20号墳石室上部玄室東隅角
検出状況(南西から)



(2) 20号墳石室上部袖部検出状況
(北西から)



(3) 20号墳石室主軸畦断面
(南西から)

(1)20号墳石室東西畦断面
(南東から)



(2)20号墳玄室再利用時鉄釘等
出土状況(南東から)



(3)20号墳石室閉塞石検出状況
遠景(南西から)





(1)20号墳玄室床面遺物出土状況(上が北東)



(2)20号墳玄室床面遺物出土状況(南東から)

(1)20号墳玄室床面遺物出土状況
近景(南西から)



(2)20号墳玄室床面遺物出土状況
近景(北東から)



(3)20号墳玄室床面遺物出土状況
近景(北西から)





(1)20号墳玄室須恵器(18・10)出土状況(北西から)



(2)20号墳玄室鉄鎌出土状況(南西から)



(3)20号墳玄室長頸鎌(40)出土状況(北東から)



(4)20号墳玄室床面鉄鎌出土状況(南から)



(5)20号墳玄室耳環出土状況(南から)



(6)20号墳玄室床面碧玉製管玉出土状況(西から)



(7)20号墳玄室床面水晶製切子玉出土状況(南東から)



(8)20号墳羨道床面遺物出土状況(西から)

(1)20号墳玄室棺台検出状況
(南東から)



(2)20号墳石室検出状況全景
(南から)



(3)20号墳石室検出状況全景
(南東から)





(1) 20号墳玄室奥壁検出状況
(南東から)



(2) 20号墳玄室左側壁検出状況
(南西から)



(3) 20号墳玄室右側壁検出状況
(北東から)

(1)20号墳玄室床面敷石検出状況
(南東から)



(2)20号墳袖部・羨道検出状況
(北西から)



(3)20号墳石室羨道左側壁
検出状況(南西から)





(1)20号墳玄室床面敷石断面
(南西から)



(2)20号墳玄室敷石直下整地層
検出状況(北東から)



(3)20号墳玄室敷石直下整地層
断ち割り断面(南西から)

(1)20号墳石室羨道下整地層
断ち割り断面(南から)



(2)20号墳完掘状況全景(西から)



(3)20号墳石室玄室基底石
掘付け穴完掘状況(南東から)





(1) 石組遺構 S X50 検出状況
(北から)



(2) 石組遺構 S X50 掘削状況
(南西から)



(3) 石組遺構 S X50 完掘状況
(南西から)



(1) 石組遺構 S X 50床面遺物出土状況(南西から)



(2) 石組遺構 S X 50床面遺物出土状況(南東から)



(1) 石組遺構 S X 50床面土師器皿
出土状況(南から)



(2) 石組遺構 S X 50完掘状況
(南東から)



(3) 石組遺構 S X 50完掘状況
(北西から)



(1) 石組遺構 S X 50完掘状況
(北東から)



(2) 石組遺構 S X 50完掘状況
(南東から)



(3) 石組遺構 S X 50床面石材
検出状況(南東から)



(1) 20号墳・B地区完掘状況遠景
(西から)



(2) 20号墳・B地区完掘状況遠景
(上が東)



(3) B地区北壁面断面(南西から)

(1) B地区北東壁面断面
(北西から)



(2) B地区掘立柱建物S B40・
柱列S A35完掘状況(上が北)



(3) B地区柱列S A35・S P14
遺物出土状況(北から)

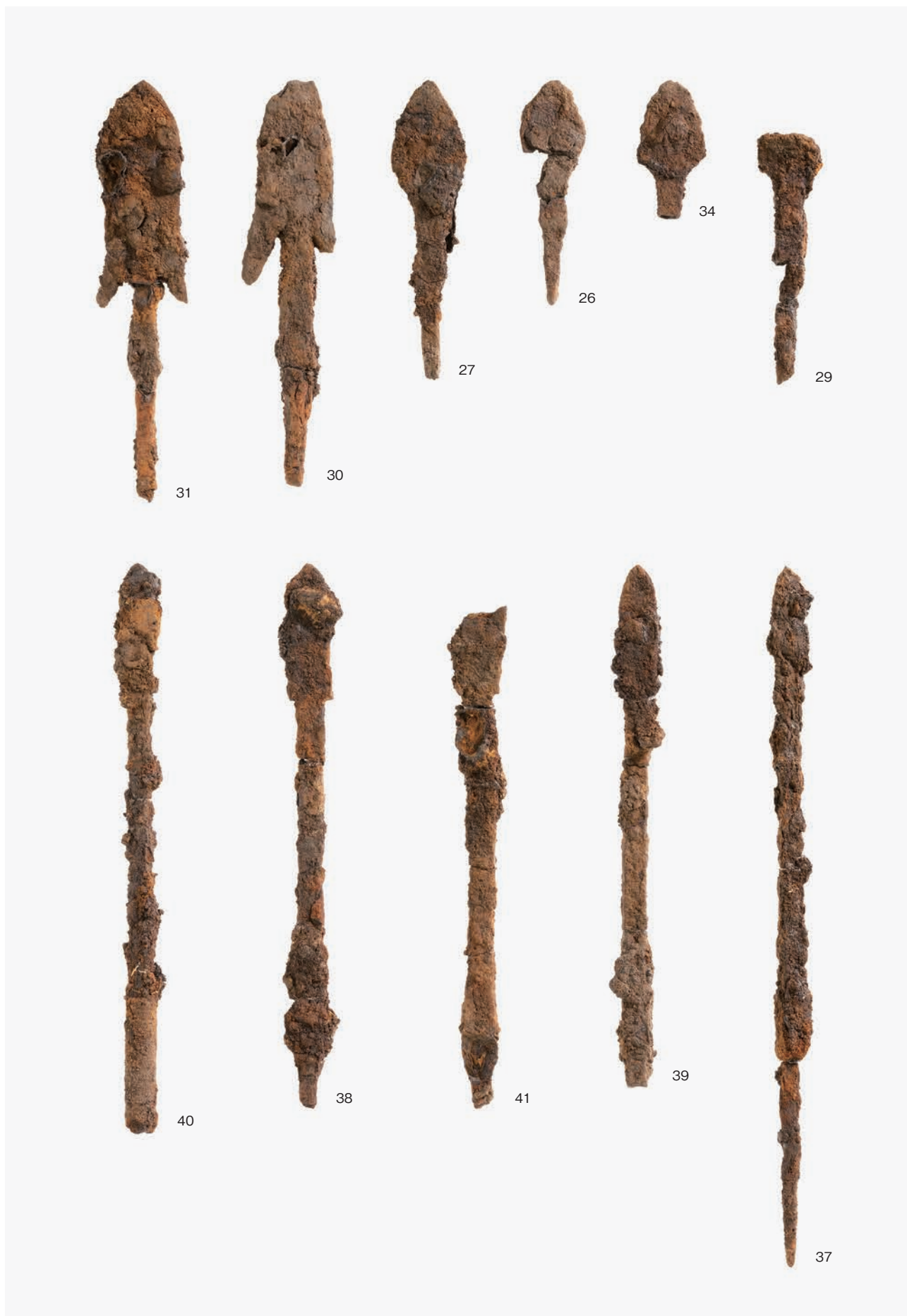




出土遺物 1 20号墳出土遺物 1



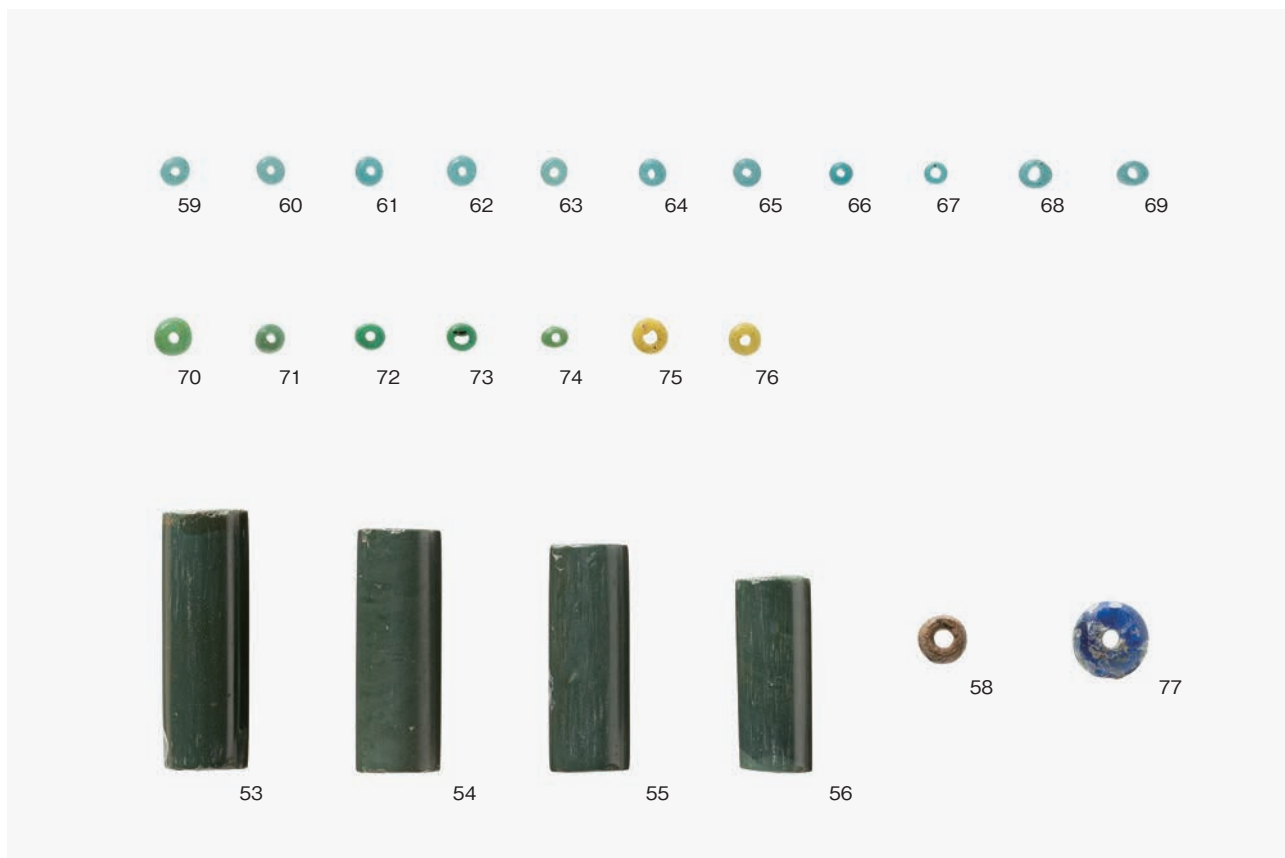
出土遺物 2 20号墳出土遺物 2



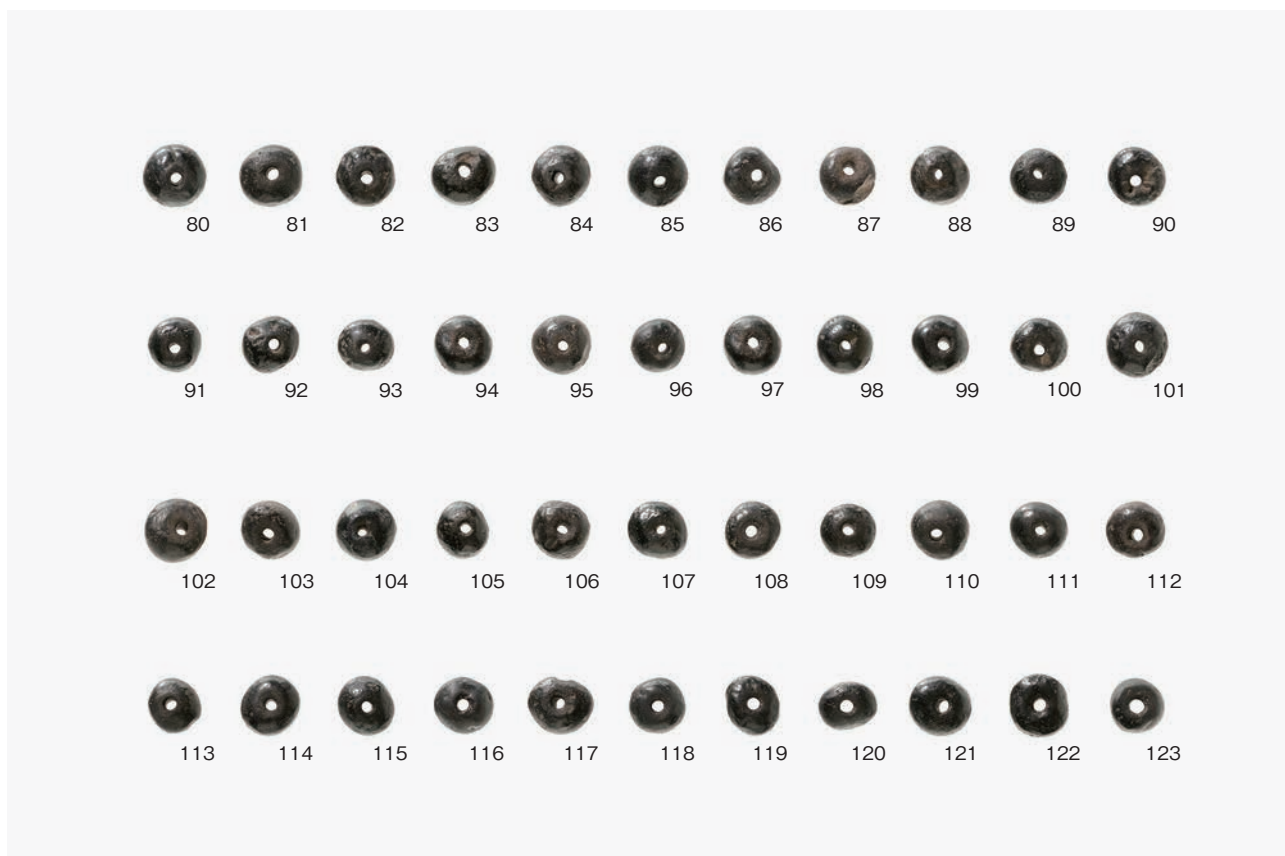
出土遺物 3 20号墳出土遺物 3



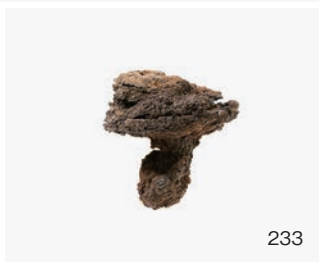
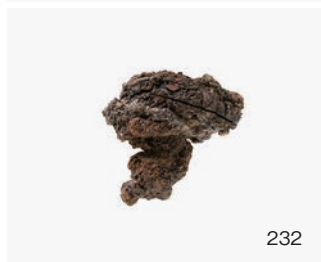
出土遺物 4 20号墳出土遺物 4



(1) 出土遺物 5 20号墳出土遺物 5



(2) 出土遺物 6 20号墳出土遺物 6



出土遺物 7 20号墳出土遺物 7



出土遺物 8 20号墳出土遺物 8



179



189



185



190



212

213

217

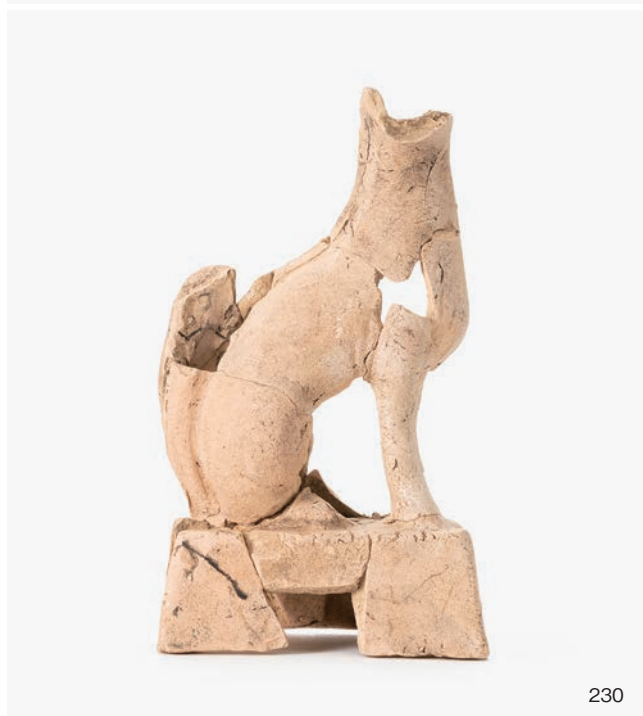
219

214

215

216

218





出土遺物11 20号墳出土遺物11・石組遺構 S X50出土遺物 1・B地区出土遺物



出土遺物12 石組遺構 S X 50出土遺物 2



東西部第2面全景(北東から) 左奥が鳩ヶ峰、手前は京阪電車8000系と浄化センター消化タンク



(1) 南北部第1面全景(北西から)



(2) 東西部第1面全景と砂脈の状況(西から)

(1)第1面S X03(奥)とS X04
(手前)(北西から)



(2)第1面東西溝S D01(奥)と東
西溝S D02(手前)(北西から)



(3)南北部第1面全景(東から)





(1) 南北部第2面全景(北から)



(2) 東西部第2面全景(南東から)



(1) 南北部第2面全景(南から)



(2) 南北部西壁土層断面(北東から)



(3) 東西部南壁土層断面(北西から)



(1) S P09土層断面(南から)



(2) 南北溝 S D11および曲隆 S X07検出状況(北東から)



(3) 南北溝 S D11北半部土層断面(北から)



(4) 南北溝 S D11南半部(北)土層断面(北から)



(5) 南北溝 S D11南半部(南)土層断面(北から)



(6) 曲隆 S X05の高まり(南から)



(7) 曲隆 S X07の高まり(南から)



(8) 西壁で整地層第10・11層を切る砂脈(矢印)の状況(東から)



(1) 東西部第2面での砂脈の状況
(東から)



(2) 曲隆 S X05断ち割り断面
(南東から)



(3) 曲隆 S X05断ち割り断面
(東から)



(1) 曲隆 S X07断ち割り断面
(北東から)



(2) 曲隆 S X07断ち割り断面
(東から)



(3) 曲隆 S X07断ち割り断面
(北西から)



(1) 出土遺物 1



(2) 出土遺物 2



出土遺物 3

報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第197冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第197冊
編著者名	面将道、荒木瀬奈、森島康雄、加藤雅士
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番の3 Tel. 075 (933) 3877
発行年月日	西暦2025年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
川北遺跡第4次	ふくちやましあざかわきた 福知山市字川北	26201	316	35° 18' 37"	135° 09' 26"	20241111 ~ 20250124	800	河川改修
法貴峠20号墳第2次	かめおかしそがべちやう 亀岡市曽我部町 なかなかこうじいち 中中小路・一ノ井出	26206	52	34° 59' 07"	135° 32' 22"	20200602 ~ 20201223	1,444	ほ場整備
木津川河床遺跡第42次	やわたしやわた 八幡市八幡 いっしょうぼた 一丁畑	26210	4	34° 53' 24"	135° 42' 32"	20231106 ~ 20231226	340	浄化施設 建設工事

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川北遺跡第4次	散布地	なし	なし	弥生土器、土製品、釘	
法貴峠20号墳第2次	古墳	古墳 中世	横穴式石室 石組墓	須恵器、土師器、鉄製品、玉類 中世土器、陶磁器	
木津川河床遺跡第42次	集落跡	中世	島畑状遺構、溝、 地震痕跡(曲隆・噴砂)	古式土師器、中世土器、陶磁器	

所収遺跡名	要 約
川北遺跡第4次	由良川に流れ込む大砂利川に隣接する場所であったため、由良川と大砂利川の堆積物が厚く堆積しており、遺構は検出できなかった。
法貴峠20号墳第2次	6世紀後半の横穴式石室をもつ古墳。墳丘内列石を備える。 墳丘削平面に鎌倉時代の石組墓が営まれる。
木津川河床遺跡第42次	上部が削平された中世の島畑と中世以降の地震痕跡を確認。

京都府遺跡調査報告集 第197冊

令和7年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒602-8358 京都市上京区七本松通下長者町下る三番町273
Tel (075)467-5151 Fax (075)467-5152